岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 166

下湯原B遺跡
藪滝山城跡

一般国道313号改良事業に伴う発掘調査

2002

岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 166

下湯原B遺跡
藪迨山城跡

一般国道313号改良事業に伴う発掘調査

2002

岡山県教育委員会

1　下湯原Ｂ遺跡　Ａ～Ｃ区（南から）

2　下湯原Ｂ遺跡　竪穴住居９出土青銅鏡・鏡形土製品

巻頭図版 2

1　藪逧山城跡　全景（北上空から）

2　藪逧山城跡　堀切 1 中央部断面（南西から）

序

本報告書には、真庭郡湯原町下湯原に所在する下湯原Ｂ遺跡と同町豊栄目地に所在する藪畳山城跡の発掘調査結果を収載しました。

この調査は、一般国道313号改良事業に伴う発掘調査です。一般国道313号は広島県福山市から岡山県西部、北部の山間を経て鳥取県倉吉市、北条町まで陰陽を結ぶ主要道の一つですが、岡山県北部の山間部などでは幅員の狭い曲がり道が残されており、一刻も早い改良工事が必要とされていました。

現在、湯原町内ではその工事の一環として、岡山県真庭地方振興局により改良が進められていますが、当初この工事の計画路線内で、遺跡の存在は知られていませんでした。その後、県北リゾート構想に伴う分布調査が平成７年度に実施されたことにより、下湯原Ｂ遺跡と藪畳山城跡の２遺跡が用地内に含まれることが明らかとなりました。このため、岡山県教育委員会では、用地内の埋蔵文化財の取り扱いについて、関係当局と協議調整を重ねてきましたが、設計変更などの余地がなく、工事にかかる部分については、やむなく記録保存のための発掘調査を行うことになり、平成10年度に一次調査を、平成11・12年度に全面調査を実施いたしました。

調査の結果、藪畳山城跡では、かなり急峻な尾根の先端部を二重の堀切で区画している中世の出城のようすが明らかになりました。また、下湯原Ｂ遺跡では、18棟もの竪穴住居が見つかりましたが、なかには完形の土器をはじめ鉄鏃・刀子などの鉄器や小形の鏡・鏡を模した土製品、祭祀に使われたミニチュア土器など多種多様な遺物が出土した住居もあり、県北における古墳時代の集落の一端を明らかにすることができました。なお、今回の発掘調査は、湯原町内では初めての全面調査であり、下湯原Ｂ遺跡は現在の町並に近いこともあって、多くの町民の方々に埋蔵文化財について知っていただける良い機会となりました。この報告書が学術研究に寄与できるばかりでなく、文化財の保護・保存のために活用され、また地域の研究のための資料として広く役立つならば幸いと存じます。

最後に、発掘調査ならびに報告書の作成にあたって、真庭地方振興局、湯原町教育委員会をはじめ、関係各位ならびに地元の方々から賜りました多大な御指導と御協力に対し、厚くお礼申し上げます。

平成14年２月

岡山県古代吉備文化財センター
所長　正　岡　睦　夫

例　　言

1　本書は、一般国道313号改良事業に伴い岡山県教育委員会が実施した下湯原Ｂ遺跡・藪迨山城跡の発掘調査報告書である。

2　下湯原Ｂ遺跡は真庭郡湯原町下湯原に、藪迨山城跡は湯原町豊栄目地に所在している。

3　発掘調査については、岡山県真庭地方振興局からの分任事業として岡山県教育委員会が調査主体者となり、調査実務は岡山県古代吉備文化財センターが実施した。

4　発掘調査は、一次調査を平成10年７月１日から７月15日まで、全面調査を平成11年４月１日から平成12年６月30日まで実施した。調査面積は、一次調査が100㎡、下湯原Ｂ遺跡が3,890㎡、藪迨山城跡が1,200㎡である。

5　発掘調査は、一次調査を中野雅美が、全面調査を浅倉秀昭・内藤善史・中島和哉が担当した。

6　報告書の作成作業は平成12年７月３日から同年12月31日まで岡山県古代吉備文化財センターにおいて、内藤が行った。

7　報告書の作成にあたり、石材の鑑定を倉敷芸術科学大学　妹尾護氏に、土器の胎土分析を岡山理科大学自然科学研究所　白石純氏に依頼し、有益な教示を受けた。また、白石氏には玉稿をいただいた。衷心よりお礼申し上げる。

8　遺物の写真撮影については、江尻泰幸の協力を得た。

9　本書の執筆は、一次調査の概要を中野が、その他は内藤が担当し、編集は内藤が行った。

10　出土遺物・図面・写真等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）において保管している。

凡　　例

1　本報告書に記載された高度値は海抜高であり、方位は国土座標系の座標北を示す。

2　遺構番号・遺物番号は、遺跡ごとの連番である。

3　遺物番号には、材質を示すため、土器以外のものについては略号を番号の前に付した。
　石器：Ｓ　　土製品：Ｃ　　金属器：Ｍ

4　挿図中、一部の遺構番号には以下の略号を使用した。また、柱穴は番号のみ付している。
　竪穴住居：住　　建物：建　　石棺墓：墓　　土壙：土　　土器溜まり：溜

5　図版のうち遺物写真に付した番号は、挿図の遺物番号と一致する。

6　土器実測図のうち、中軸線の左右に白抜きのあるものは、復元口径の不確実なものである。

7　第２図は国土地理院発行の1/25,000地形図「湯原湖」・「横部」・「富西谷」・「美作宮原」を複製、加筆したものである。

8　報告書中に用いる時代区分は、『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』で通常使われている概念による。

目　　次

序
例　　言
凡　　例
目　　次
第１章　地理的・歴史的環境…… 1
第２章　調査の経緯と経過…… 3
　第１節　発掘調査にいたる経緯…… 3
　第２節　発掘調査の経過…… 3
　　調査の体制…… 3
　　日誌抄…… 4
第３章　下湯原Ｂ遺跡…… 5
　第１節　調査の概要…… 5
　　一次調査の概要…… 5
　　発掘調査の概要…… 6
　第２節　遺構・遺物…… 11
　　1　竪穴住居…… 11
　　2　建物…… 27
　　3　石棺墓…… 28
　　4　溝…… 29
　　5　土壙…… 32
　　6　柱穴…… 33
　　7　土器溜まり…… 35
　　8　その他の遺構…… 36
　　9　遺構に伴わない遺物…… 37
第４章　藪滝山城跡…… 41
　第１節　遺跡の概要と発掘調査…… 41
　　1　遺跡の概要…… 41
　　2　発掘調査…… 42
　第２節　遺構・遺物…… 44
　　1　郭…… 44
　　2　堀切…… 45
　　3　出土遺物…… 46
　　4　その他の遺構…… 47
第５章　小　結…… 49

付載　下湯原Ｂ遺跡出土須恵器の胎土分析…… 51

図　目　次

第１図　遺跡位置図…… 1
第２図　周辺遺跡分布図(1/25,000) …… 2
第３図　一次調査トレンチ配置図(1/5,000)
・Ｔ１平・断面図(1/100)…… 5
第４図　Ｔ３平・断面図(1/100)…… 6
第５図　Ｔ５平・断面図(1/100)…… 6
第６図　Ｔ９平・断面図(1/100)…… 6
第７図　調査区位置図(1/2,000) …… 7
第８図　Ａ～Ｆ区遺構配置図(1/300)…… 8
第９図　Ｇ～Ｌ区遺構配置図(1/300)…… 9
第10図　主要土層断面図(1/80) …… 10
第11図　竪穴住居１(1/60)・出土遺物(1/4) … 11
第12図　竪穴住居３(1/60) …… 11
第13図　竪穴住居３出土遺物(1/4)…… 12
第14図　竪穴住居４(1/60)
・出土遺物１(1/2)…… 12
第15図　竪穴住居４出土遺物２(1/4)…… 13
第16図　竪穴住居５(1/60)
・出土遺物(1/4・1/2) … 14
第17図　竪穴住居６(1/60)
・出土遺物(1/4・1/2) … 15
第18図　竈状遺構(1/30)
・出土遺物(1/3・1/4) … 16
第19図　竪穴住居７(1/60) …… 16
第20図　竪穴住居８(1/60)
・出土遺物(1/2・1/4) … 17
第21図　竪穴住居９(1/60)
・出土遺物(1/4・1/2・1/3)… 18
第22図　竪穴住居10(1/60)
・出土遺物(1/4・1/3) … 19
第23図　竪穴住居11(1/60) …… 20
第24図　竪穴住居12(1/60)
・出土遺物(1/2・1/4) … 21
第25図　竪穴住居13(1/60)
・出土遺物(1/4)…… 22
第26図　竪穴住居14(1/60)
・出土遺物(1/4・1/2) … 23
第27図　竪穴住居15(1/60)
・出土遺物(1/4)…… 24
第28図　竪穴住居16・17(1/60) …… 25
第29図　竪穴住居17
出土遺物(1/4・1/2・1/3)…… 26
第30図　竪穴住居18(1/60) …… 27
第31図　建物１(1/80)・出土遺物(1/4) …… 27
第32図　建物２(1/80) …… 28
第33図　石棺墓１(1/30) …… 28
第34図　石棺墓２(1/30) …… 29
第35図　溝１(1/30)・出土遺物(1/4) …… 29
第36図　溝２(1/30) …… 29
第37図　溝３(1/30) …… 30
第38図　溝３出土遺物(1/4)…… 30
第39図　溝３上層出土遺物(1/4)…… 31
第40図　溝４・５・６(1/30)
・溝－４出土遺物(1/4)…… 31
第41図　土壙１(1/30)・出土遺物(1/4) …… 32
第42図　土壙２(1/30) …… 32
第43図　土壙３出土遺物(1/4)…… 33
第44図　柱穴１・２群出土遺物
(1/2・1/4・1/3)…… 33
第45図　柱穴３群出土遺物(1/4・1/2) …… 34
第46図　柱穴４・５群出土遺物(1/4・1/3) … 34
第47図　土器溜まり１出土遺物(1/4)…… 35
第48図　土器溜まり２出土遺物(1/4)…… 35
第49図　土器溜まり３出土遺物(1/4)…… 35
第50図　落ち込み出土遺物(1/4)…… 36
第51図　斜面堆積出土遺物(1/4)…… 36

第52図　遺構に伴わない遺物１(1/2・1/3) … 36
第53図　遺構に伴わない遺物２(1/4)…… 37
第54図　遺構に伴わない遺物３(1/4)…… 38
第55図　調査対象範囲図(1/1,500) …… 41
第56図　Ｔ２・３断面図(1/80) …… 42
第57図　調査前地形測量図(1/400)…… 43
第58図　遺構配置図(1/400)…… 44
第59図　郭縦・横断面図(1/160)…… 45
第60図　堀切１・２地形測量図(1/200)
・断面図(1/80) … 46
第61図　出土遺物１(1/3)…… 46
第62図　出土遺物２(1/2)…… 47
第63図　土壙１(1/30) …… 47
第64図　土壙２・３(1/30) …… 48

図版目次

巻頭図版１－１　下湯原Ｂ遺跡Ａ～Ｃ区(南から)
巻頭図版１－２　下湯原Ｂ遺跡竪穴住居９
出土青銅鏡・鏡形土製品
巻頭図版２－１　藪迨山城跡全景（北上空から）
巻頭図版２－２　藪迨山城跡堀切１
中央部断面（南西から）
図版１－１　下湯原Ｂ遺跡遠景（南から）
２　下湯原Ｂ遺跡Ａ～Ｃ区（北から）
３　下湯原Ｂ遺跡Ｄ～Ｅ区（南から）
図版２－１　下湯原Ｂ遺跡Ｈ～Ｉ区（南から）
２　下湯原Ｂ遺跡Ｋ区（北から）
３　下湯原Ｂ遺跡Ｌ区（北から）
図版３－１　下湯原Ｂ遺跡竪穴住居１
覆土堆積断面（南東から）
２　下湯原Ｂ遺跡竪穴住居３(南西から)
３　下湯原Ｂ遺跡竪穴住居４（東から）
４　下湯原Ｂ遺跡竪穴住居５（西から）
図版４－１　下湯原Ｂ遺跡竪穴住居６(南西から)
２　下湯原Ｂ遺跡竪穴住居８
遺物出土状況（東から）
３　下湯原Ｂ遺跡竪穴住居９鏡形
土製品出土状況（東から）
４　下湯原Ｂ遺跡竪穴住居12
鉄鏃出土状況（東から）
図版５－１　下湯原Ｂ遺跡竪穴住居10（西から）
２　下湯原Ｂ遺跡竪穴住居14（東から）
３　下湯原Ｂ遺跡竪穴住居15（西から）
図版６－１　下湯原Ｂ遺跡竪穴住居17
遺物出土状況（北東から）
２　下湯原Ｂ遺跡竪穴住居17
刀子出土状況（西から）
３　下湯原Ｂ遺跡竪穴住居17紡錘車
出土状況（北東から）
４　下湯原Ｂ遺跡竪穴住居17(北東から)
図版７－１　下湯原Ｂ遺跡竪穴住居18（東から）
２　下湯原Ｂ遺跡建物１（北西から）
３　下湯原Ｂ遺跡石棺墓２および１と
竪穴住居10（北から）
図版８－１　下湯原Ｂ遺跡石棺墓１（西から）
２　下湯原Ｂ遺跡石棺墓２（南から）
３　下湯原Ｂ遺跡石棺墓２蓋石
除去後の状況（南東から）
４　下湯原Ｂ遺跡石棺墓２側石
除去後の状況（南東から）
図版９－１　下湯原Ｂ遺跡土壙１（東から）
２　下湯原Ｂ遺跡土器溜まり１
遺物検出作業（北から）
３　下湯原Ｂ遺跡溝１断面（東から）
図版10－１　下湯原Ｂ遺跡溝２断面（東から）
２　下湯原Ｂ遺跡溝３掘り下げ
作業（北から）
３　下湯原Ｂ遺跡溝３断面（南から）
４　下湯原Ｂ遺跡溝６断面（南東から）
図版11－１　下湯原Ｂ遺跡溝４断面（南東から）

2　下湯原Ｂ遺跡溝５断面（北西から）
3　下湯原Ｂ遺跡Ｄ・Ｅ区
埋雪状況（北から）
4　下湯原Ｂ遺跡Ｄ区除雪作業
（南東から）
図版12－１　下湯原Ｂ遺跡竪穴住居内
出土の須恵器
2　下湯原Ｂ遺跡出土の
ミニチュア土器
図版13　下湯原Ｂ遺跡竪穴住居内
出土の土師器
図版14－１　下湯原Ｂ遺跡土壙１出土須恵器
2　下湯原Ｂ遺跡土壙３出土須恵器
3　下湯原Ｂ遺跡遺構に伴わない土器
4　下湯原Ｂ遺跡溝３出土土器
図版15－１　下湯原Ｂ遺跡出土の中世土器
2　下湯原Ｂ遺跡出土の土製品
3　下湯原Ｂ遺跡出土の鉄器
図版16－１　藪逧山城跡調査前全景（南から）
2　藪逧山城跡調査前全景（北から）
3　藪逧山城跡表土除去後（北から）
4　藪逧山城跡表土除去後（西から）
図版17－１　藪逧山城跡郭横断面
南西側（北から）
2　藪逧山城跡郭縦断面
南東側（南から）
3　藪逧山城跡郭裾部硯
出土状況（南から）
4　藪逧山城跡郭裾部砥石
出土状況（南から）
5　藪逧山城跡郭裾部鉄器
出土状況（北から）
6　藪逧山城跡堀切１鉄器
出土状況（東から）
図版18－１　藪逧山城跡堀切１
南西断面（南西から）
2　藪逧山城跡堀切１
南半（南西から）
3　藪逧山城跡堀切１
北東断面（北東から）
4　藪逧山城跡堀切１
北半（北東から）
図版19－１　藪逧山城跡堀切２
中央断面（南西から）
2　藪逧山城跡堀切２
南半（南西から）
3　藪逧山城跡堀切２
北半（北東から）
4　藪逧山城跡堀切１・２
北半（東から）
図版20－１　藪逧山城跡完掘後全景
（南上空から）
2　藪逧山城跡土壙１（南東から）
3　藪逧山城跡出土遺物

表　目　次

表１　下湯原Ｂ遺跡出土金属器一覧表……　39
表２　下湯原Ｂ遺跡出土土製品一覧表……　40
表３　下湯原Ｂ遺跡出土石製品一覧表……　40
表４　下湯原Ｂ遺跡出土ミニチュア
土器一覧表……　40
表５　藪逧山城跡出土金属器一覧表……　48

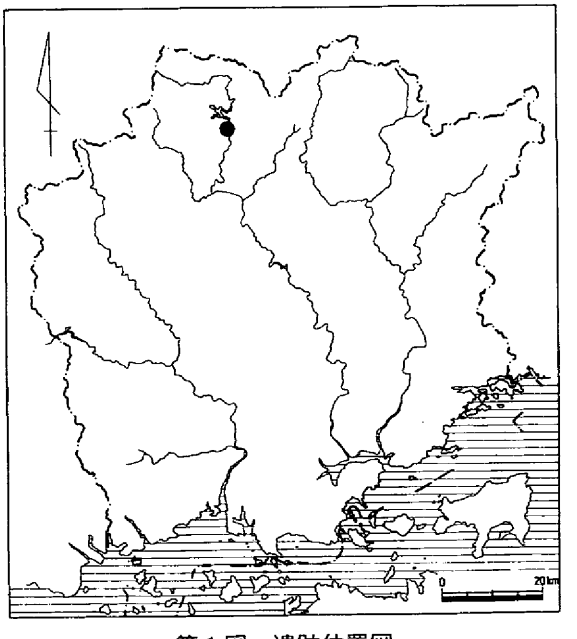
第１章　地理的・歴史的環境

下湯原Ｂ遺跡は真庭郡湯原町下湯原に、藪畳山城跡は湯原町豊栄目地に所在している。

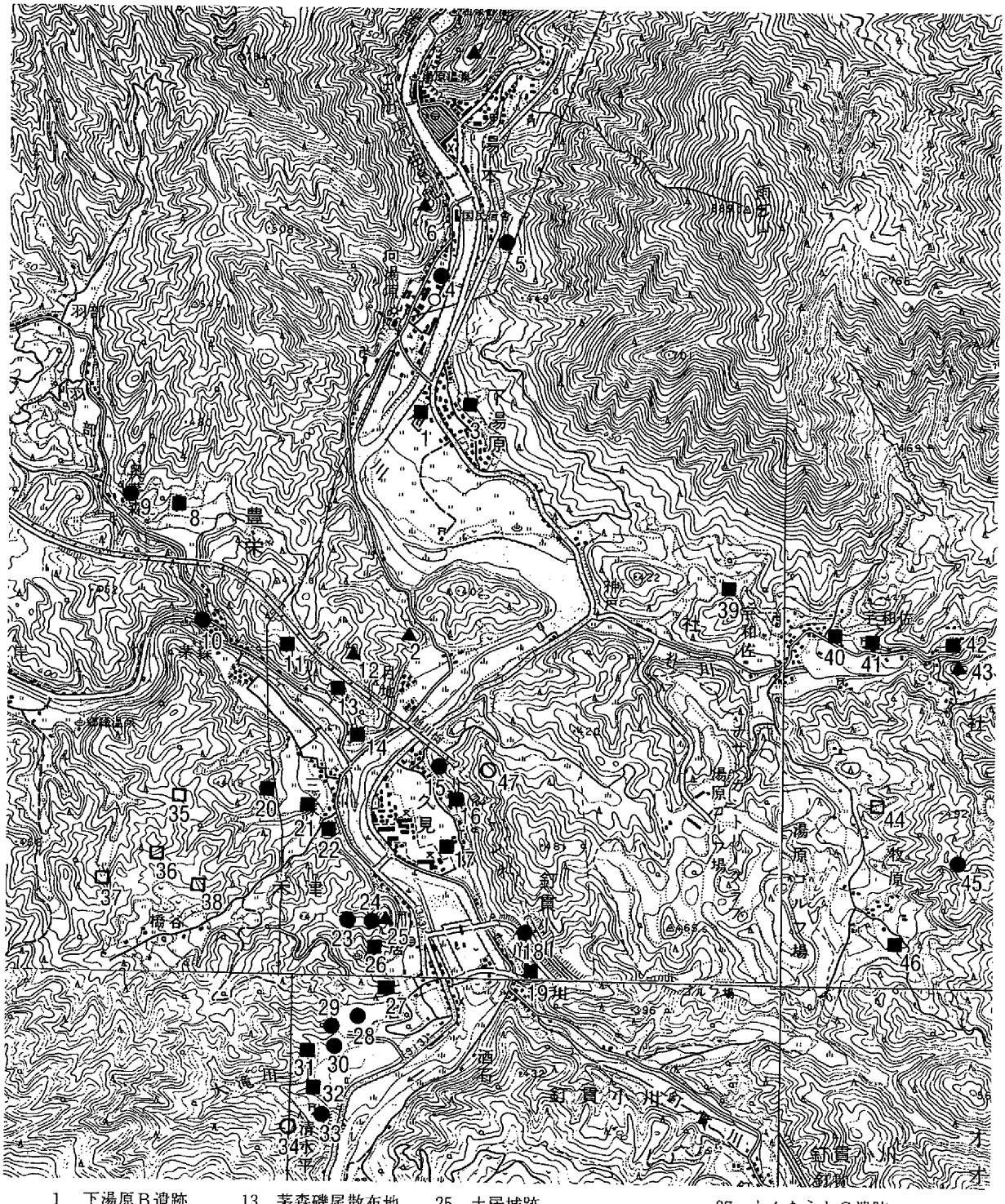
真庭郡湯原町は、岡山県北部に位置し、北を真庭郡の中和・八束・川上の３村と、西を同郡新庄・美甘の２村と、南を同郡勝山・久世の２町とまた、東を苫田郡富村と接している。中国山地中の蒜山高原に源を発する岡山県の三大河川の一つ旭川は、支流をまとめ次第に水量を増やしながら八束村から湯原町に流れ込む。この豊かな水量を発電に利する湯原ダムが昭和30年に完成し、町北部の三世七原などの一部がダム湖に沈んでいる。ダムから流れ下る旭川は、支流の田羽根川・社川・鉄山川などを合流し、湯本・下湯原・久見に町内で最も平坦な広がりをつくり、勝山町さらに久世町へと流れ下っている。湯原町は町域の大半が山で占められているが、旭川の河岸段丘やそれに合流している中小河川の周辺部など、限られた可耕地を中心とした範囲が人々の生活の場となっている。

湯原町内における最も早い時期の遺物としては、久見の清水寺遺跡や禾津の三ツ家Ａ遺跡で縄文土器が採集されている。また、社の牧原散布地ではくぼみ石が採集されるなど、遺構は明らかでないが、縄文時代後期から晩期頃にはこの地に定着しはじめたものと考えられる。弥生時代に入るとこれらの遺跡の周辺以外に、豊栄や社でも土器の散布がみられ、禾津の射的の平遺跡では、圃場整備で削られた法面などに土壙や竪穴住居が認められている。古墳時代になると集落遺跡はさらに増え、大規模なものはないものの古墳も多く築かれている。久見の古久見古墳群は、８基の小円墳からなる前期古墳で、旭川左岸の丘陵上に位置している。また、旭川右岸の禾津の丘陵上には、中期から後期の小円墳が点在している。このほか、支流の鉄山川流域にも後期古墳の存在が知られている。見明戸の福井古墳の横穴式石室には、小形の家形陶棺が用いられている。古代から中世さらには現代にかけても生活の地域が大きく移動することはなく営まれ、集落遺跡の多くは複合遺跡となっている。

一方、戦国時代には、勝山の高田城下と山陰を結ぶ伯耆街道の要衝に位置していることから、要所の独立丘陵や張り出た丘陵の先端部などに多くの山城が築かれている。旭川東岸に位置する湯本の湯山城は、社の田井城と共に宇喜多氏側の拠点である。麓からの比高差150mの尾根上に築かれ、後方に三重の堀切を配する連郭式の山城で、二川の藤森・黒杭の飯山城に在城し、旭川西岸を勢力下に置く、毛利方の部將杉原盛重の攻撃を退けている。なお、旭西に位置する豊栄の大沼山陣所跡は、湯山城を攻撃した陣跡と推定され、目地城跡も佐山氏の陣に比定されている。このほか禾津には土居屯所に比定される土居城跡が、鉄山川流域の見明戸には、鶏山屯所に比定される見明戸城山城や広段城山城が築かれている。



第１図　遺跡位置図



1　下湯原Ｂ遺跡
2　藪迩山城跡
3　下湯原Ａ遺跡
4　向湯原古墳
5　湯本火のかま古墳
6　大沼山陣所跡
7　湯山城跡
8　すくもだわ遺跡
9　奥茅森古墳
10　城御崎古墳
11　豊栄散布地
12　目地城跡
13　茅森磯尾散布地
14　目地散布地
15　古久見古墳群
16　清水寺遺跡
17　東郷屋敷遺跡
18　小川古墳
19　小川散布地
20　三ツ家Ｂ遺跡
21　三ツ家Ａ遺跡
22　三ツ家Ｃ遺跡
23　野谷１号墳
24　野谷２号墳
25　土居城跡
26　土居Ｃ散布地
27　岡の段遺跡
28　土居３号墳・土居Ａ散布地
29　土居１号墳
30　土居２号墳・岡のそね遺跡
31　土居遺跡
32　射的の平遺跡
33　大滝古墳
34　なすう谷遺跡
35　五社谷遺跡
36　かんなうとＢ遺跡
37　かんなうとＣ遺跡
38　かんなうとＡ遺跡
39　大寺遺跡
40　大御堂遺跡
41　二宮神社
42　山の神散布地
43　田井城跡
44　美泥散布地
45　塔壇寺１号墳・２号墳
46　牧原散布地
47　経塚山遺跡

第２図　周辺遺跡分布図（1/25,000）

第２章　調査の経緯と経過

第１節　発掘調査にいたる経緯

真庭郡湯原町内で進められている国道313号改良事業では、計画策定時において遺跡の存在は知られていなかった。しかし、平成７年度に湯原町で県北リゾート構想に伴う分布調査が実施された結果、同町豊栄字目地において藪畳山城跡の存在が明らかとなり、また、同町下湯原の用地内では古代から中世の土器片散布が確認された。そこで岡山県教育委員会は、下湯原散布地については遺跡の規模や性格などを把握するため、平成10年７月に用地買収などの終了している地区について確認調査を実施した。その結果、遺構の存在が明らかとなったため、平成11年３月12日付けで真庭振興局長から県教育長に発掘通知が提出された。これを受けて県文化課は、真庭振興局工務第一課と２遺跡の取り扱いについて協議を行い、記録保存の措置をとることとなった。

第２節　発掘調査の経過

発掘調査は、まず平成11年４月から調査員２名で藪畳山城跡に着手した。遺跡が急峻な尾根上に立地しているため、進入路や排土の流出を防ぐ柵などを設置し、その後検出作業を実施した。調査では、遺構面に残された株の除去や急峻な斜面に取り付いての作業など検出に困難を窮めたが、７月中旬に郭面の検出と２本の堀切をほぼ完掘し、リモコンヘリによる空中撮影を行った。

下湯原Ｂ遺跡は、平成11年８月から調査員２名（９月～３月は３名）で発掘調査に入った。通路や排土置き場の確保が必要で、一度に全体の掘削ができないため、対象域を５つ（１～５区）に分割し、確認調査で遺跡の南端が確認された１区から調査に入った。その後４・２・５区の順で飛び飛びに調査を行い、平成12年３月に３区の調査を終了した。なお、その間、立ち退き移転の遅れで確認ができていなかった５区から北側の確認調査を行い、遺跡の広がりが明らかとなったため、引き続き平成12年４月からその地区を６・７区として調査し、６月に下湯原Ｂ遺跡の調査を終了した。

報告書の作成は、調査終了後、岡山県古代吉備文化財センターにおいて12月まで１名が専従して行い、平成13年度に印刷・刊行されることになった。

調査の体制

平成10年度

岡山県教育委員会

教育長　黒瀬　定生

岡山県教育庁

教育次長　平岩　武

文化課

課長　高田　朋香

課長代理　西山　猛

参事　正岡　睦夫

課長補佐

（埋蔵文化財係長）　松本　和男

文化財保護主任　大橋　雅也

主事　三宅　美博

岡山県古代吉備文化財センター

所長　葛原　克人

次長　大村　俊臣

＜総務課＞
総務課長　小倉　昇
課長補佐（総務係長）　安西　正則
主　査　山本　恭輔
＜調査第一課＞
調査第一課長　高畑　知功
課長補佐（第一係長）　中野　雅美（調査担当）

平成11年度
岡山県教育委員会
教育長　黒瀬　定生
岡山県教育庁
教育次長　宮野　正司
文化課
課　長　松井　英治
課長代理　佐々部和生
参　事　正岡　睦夫
課長補佐
（埋蔵文化財係長）　松本　和男
文化財保護主任　大橋　雅也
主　任　奥山　修司
岡山県古代吉備文化財センター
所　長　葛原　克人
次　長　大村　俊臣
＜総務課＞
総務課長　小倉　昇
課長補佐（総務係長）　安西　正則
主　査　山本　恭輔
＜調査第三課＞
調査第三課長　柳瀬　昭彦
課長補佐（第三係長）　浅倉　秀昭（調査担当）
文化財保護主幹　内藤　善史（調査担当）
主　事　中島　和哉（調査担当）

平成12年度
岡山県教育委員会
教育長　黒瀬　定生
岡山県教育庁
教育次長　宮野　正司
文化課
課　長　松井　英治
課長代理　佐々部和生
課長代理
（埋蔵文化財係長）　松本　和男
文化財保護主査　福本　明
主　任　奥山　修司
岡山県古代吉備文化財センター
所　長　正岡　睦夫
次　長　能登原　巧
＜総務課＞
総務課長　小倉　昇
課長補佐（総務係長）　安西　正則
主　査　山本　恭輔
＜調査第三課＞
調査第三課長　柳瀬　昭彦
課長補佐（第二係長）　下澤　公明
文化財保護主幹　内藤　善史（調査・報告担当）
主　事　中島　和哉（調査担当）

日誌抄

平成10年度
7月1日　下湯原Ｂ遺跡一次調査開始
7月15日　下湯原Ｂ遺跡一次調査終了
平成11年度
4月6日　器材搬入、藪畳山城跡調査開始
7月16日　藪畳山城跡空中写真撮影
7月29日　藪畳山城跡調査終了
8月2日　下湯原Ｂ遺跡１区調査開始
10月4日　下湯原Ｂ遺跡４区調査開始
10月25日　下湯原Ｂ遺跡１区調査終了
11月5日　下湯原Ｂ遺跡２区調査開始
11月11日　下湯原Ｂ遺跡４区調査終了
11月19日　下湯原Ｂ遺跡５区調査開始
2月3日　下湯原Ｂ遺跡２区調査終了
2月7日　下湯原Ｂ遺跡３区調査開始
2月10日　下湯原Ｂ遺跡５区調査終了
3月17日　下湯原Ｂ遺跡３区調査終了
平成12年度
4月10日　下湯原Ｂ遺跡６区調査開始
5月1日　下湯原Ｂ遺跡７区調査開始
5月24日　下湯原Ｂ遺跡６区調査終了
6月23日　下湯原Ｂ遺跡７区調査終了、撤収
7月3日　報告書作成作業開始
12月28日　報告書作成作業終了

第３章　下湯原Ｂ遺跡

第１節　調査の概要

一次調査の概要

調査は、路線内の地形が一段高くなっている河岸段丘上の約200m間に９本のトレンチを設定して行った。

トレンチの規模は２×５ｍを基本としたが、Ｔ１については河岸段丘の斜面部にあたるため２×10mとした。路線内には，造成土が厚く堆積している場所もあり重機と人力を併用して調査を実施した。以下、各トレンチの概要を記す。

Ｔ１：トレンチ南端で西側に落ちる河岸段丘の下がりを確認。遺構は、溝・柱穴を検出したが時期は不明である。遺物としては、奈良時代の須恵器、土師器が少量出土した。

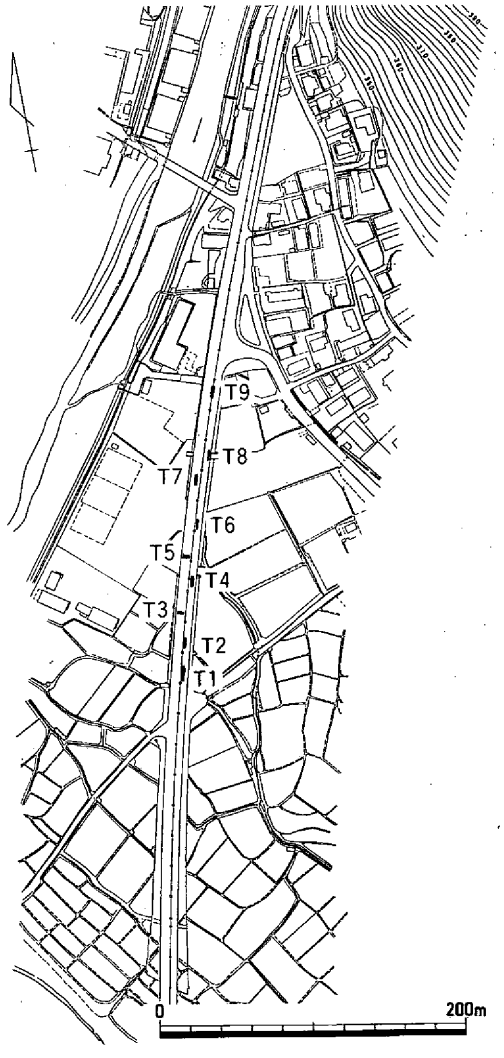
Ｔ２：遺構が確認されなかったが、基盤層は遺構の検出された周辺のトレンチと同様に安定している。

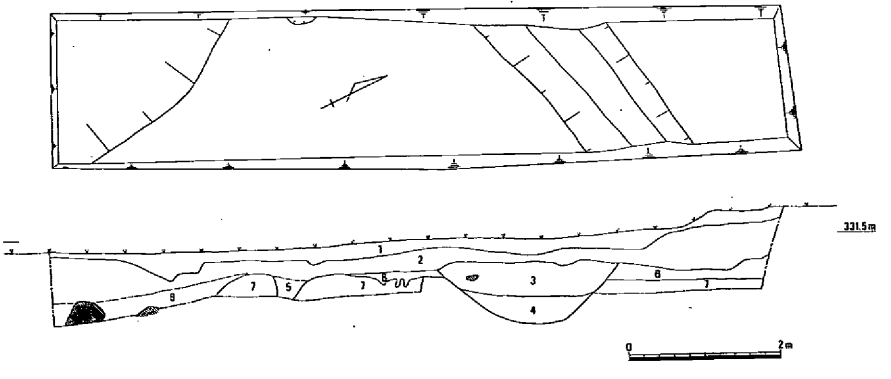
Ｔ３：第２層下で柱穴を数基確認した。

Ｔ４：Ｔ３と同じ面で柱穴を１基検出した。

Ｔ５：第２層下で竪穴住居状の落ち込みを検出した。検出状況からみて平面形は、方形ないし長方形を呈すると考えられる。

Ｔ６：Ｔ５と同一面で土壙、柱穴が多数検出された。





1　耕土
2　暗灰褐色土
3　暗黒褐色土
4　暗灰色土
5　暗黒褐色土
6　暗黒灰色土
7　暗茶灰色土

第３図　一次調査トレンチ配置図（1/5,000）・Ｔ１平・断面図（1/100）

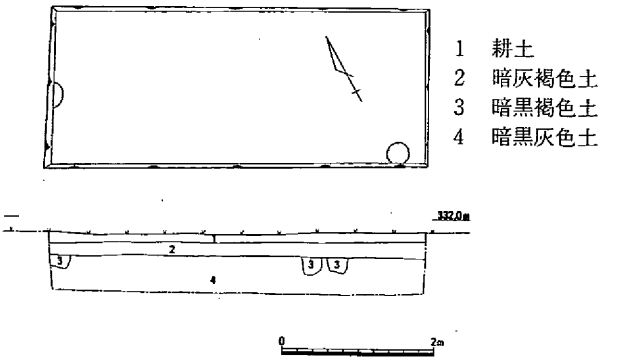
Ｔ７：南西部の一部を除きトレンチの大半は後世の攪乱を受けていた。残存部には、遺構面が二面あり、上部には溝状の落ち込み、下部には柱穴が確認された。

Ｔ８：トレンチの南側半分は後世の攪乱を下部まで受けている。残存している北側には、溝が検出された。

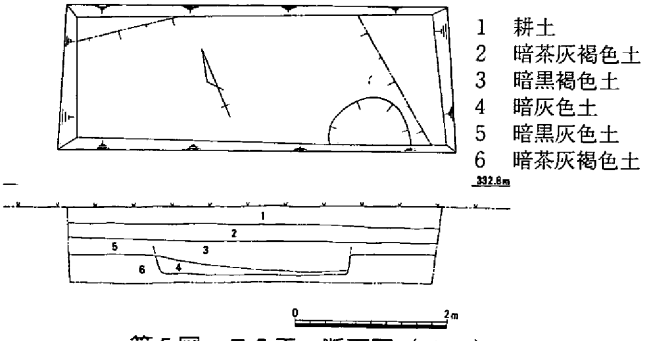
Ｔ９：第２層下で柱穴を確認した。

以上のように、Ｔ２を除き遺構の存在が明らかとなったが、遺物が出土していないため時期は不明である。各トレンチとも上層からは、少量ながら奈良時代の須恵器・土師器が出土している。なお、検出遺構面がほぼ同一のＴ１～４とＴ５～９を比べると、後者が数10cm高くなっている。地形は、概ね北側から南側に下がる。

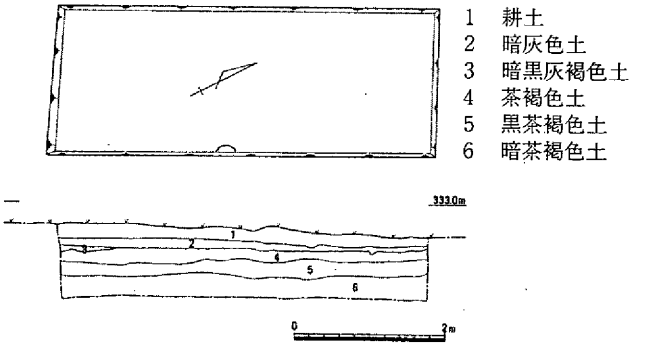
上記のように９本のトレンチを設定し調査を実施した結果、Ｔ１～Ｔ９の約200ｍ間の河岸段丘上には、濃淡は認められるものの全域にわたって遺構の存在が明らかとなった。遺構の時期は不明であるが、上層から出土している土器は少量ながらいずれも奈良時代のものであることから、検出された遺構も同時期である可能性が強いと考えられる。（中野）



第４図　Ｔ３平・断面図（1/100）



第５図　Ｔ５平・断面図（1/100）



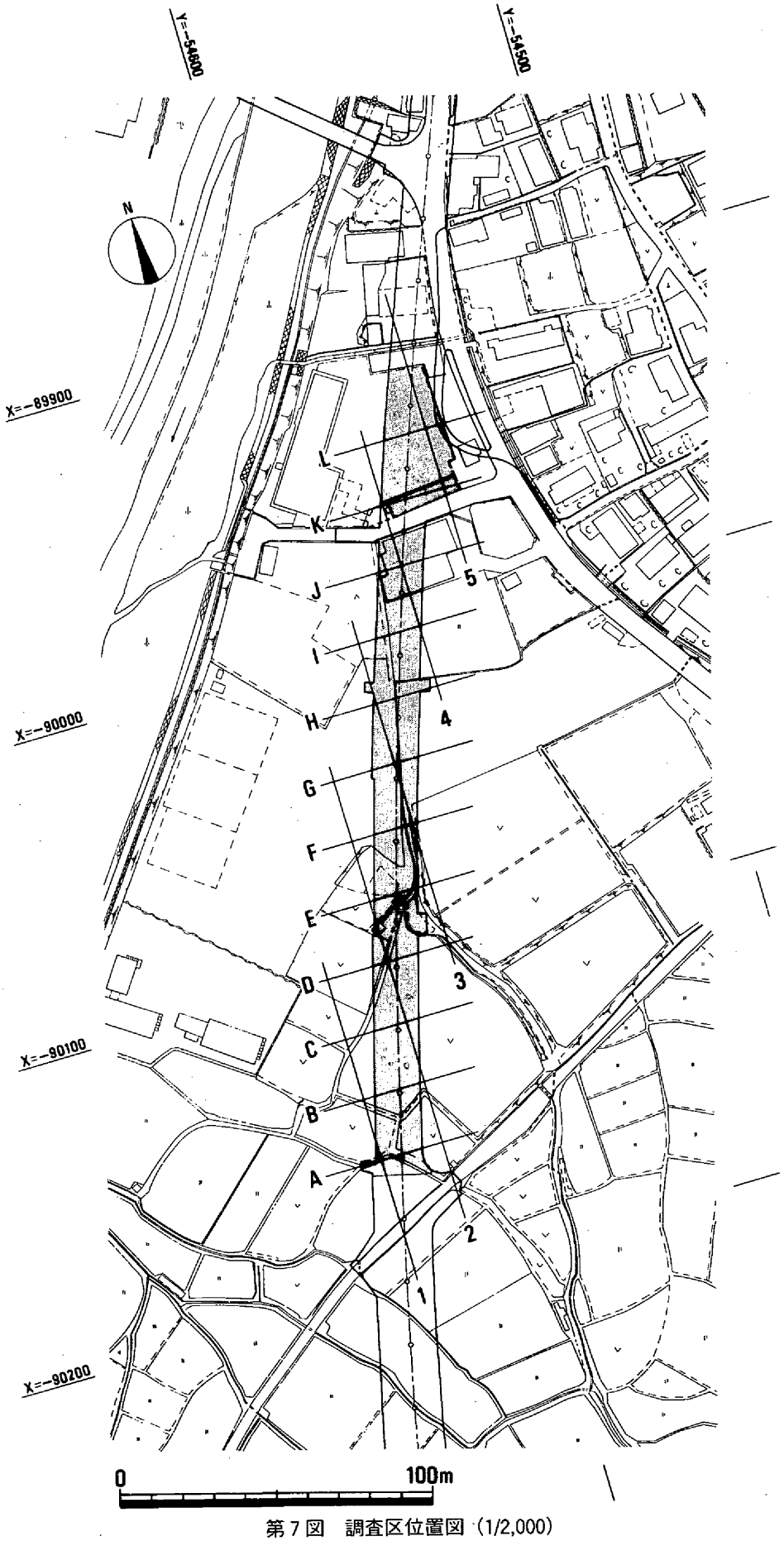
第６図　Ｔ９平・断面図（1/100）

発掘調査の概要

下湯原Ｂ遺跡の発掘調査は、対象の範囲が道路の建設予定地であることから、遺跡の一部に東西幅15ｍ前後で南北長260ｍもの非常に長大なトレンチを設定した様相を呈するものとなった。

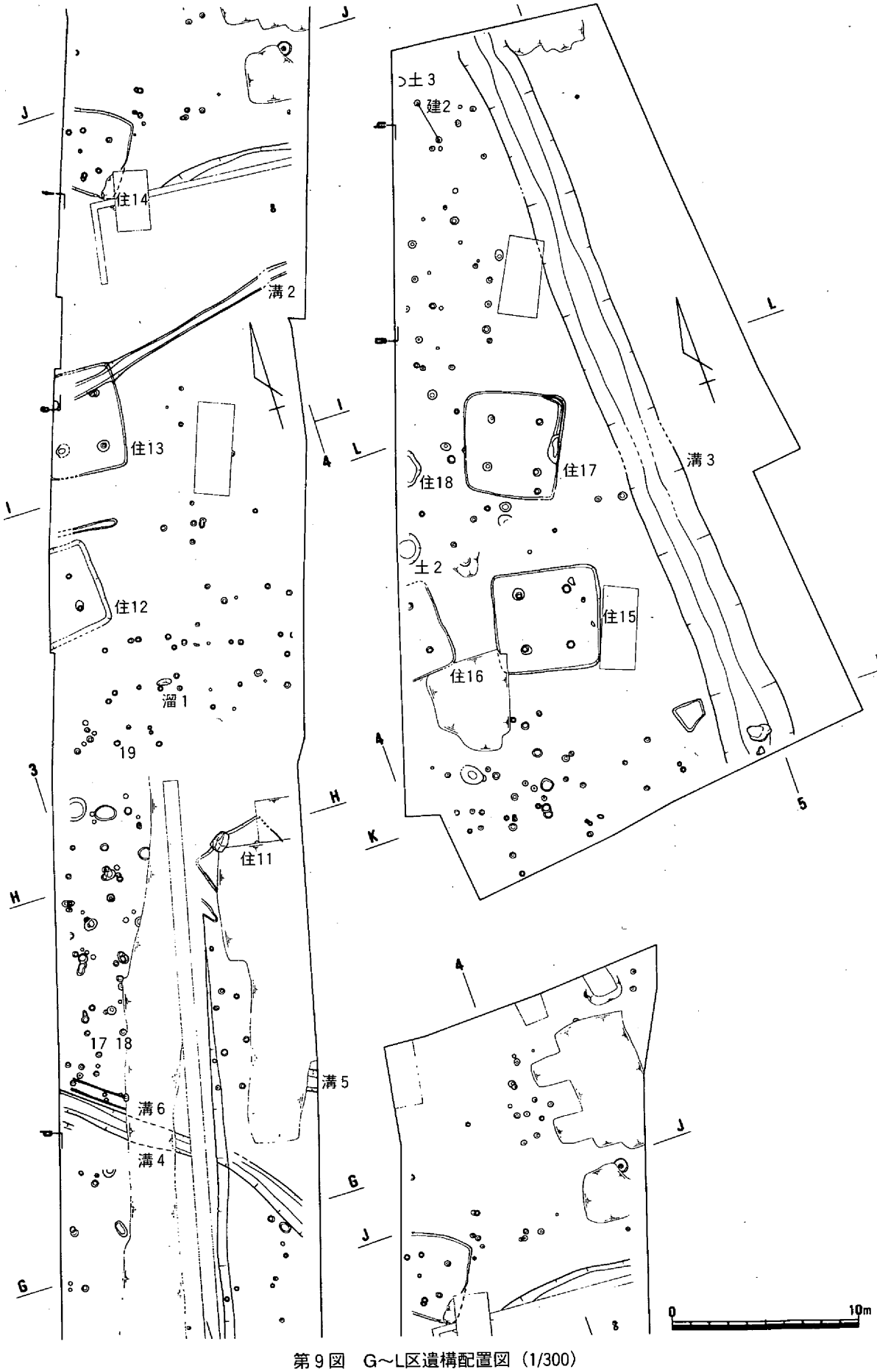
調査の結果、一部は近・現代の造成などにより削平されているものの、ほぼ全域から古墳時代後期の遺構が検出されている。おもな遺構としては、竪穴住居・掘立柱建物・石棺墓・溝などがある。このうち竪穴住居は、調査区の関係からその一部のみが検出されたものも多いが、調査区南部で10軒・北部で８軒の合わせて18軒確認されている。これらの竪穴住居のなかには、焼土と伴に完形の土器などを含む焼失住居や小形仿製鏡や鏡形土製品などが出土したもの、ミニチュアの土器が多数出土したものなどがあり、下湯原Ｂ遺跡における古墳時代後期の集落の一端が明らかとなった。また、調査区の南部では、下がりに沿って流走する溝が検出されるなど、遺跡南端の状況が明らかとなった。

古代および中世の遺構は、後世の削平が著しく、溝や土壙・柱穴などが一部で検出されたのみであり、集落の状況などを明らかにすることはできなかったが、調査区北部で検出された奈良時代後半頃の溝は、ほぼ南ー北方向に直線的に掘削された「Ｕ」字溝で、規格制をもつ遺構の可能性がある。



第７図　調査区位置図（1/2,000）

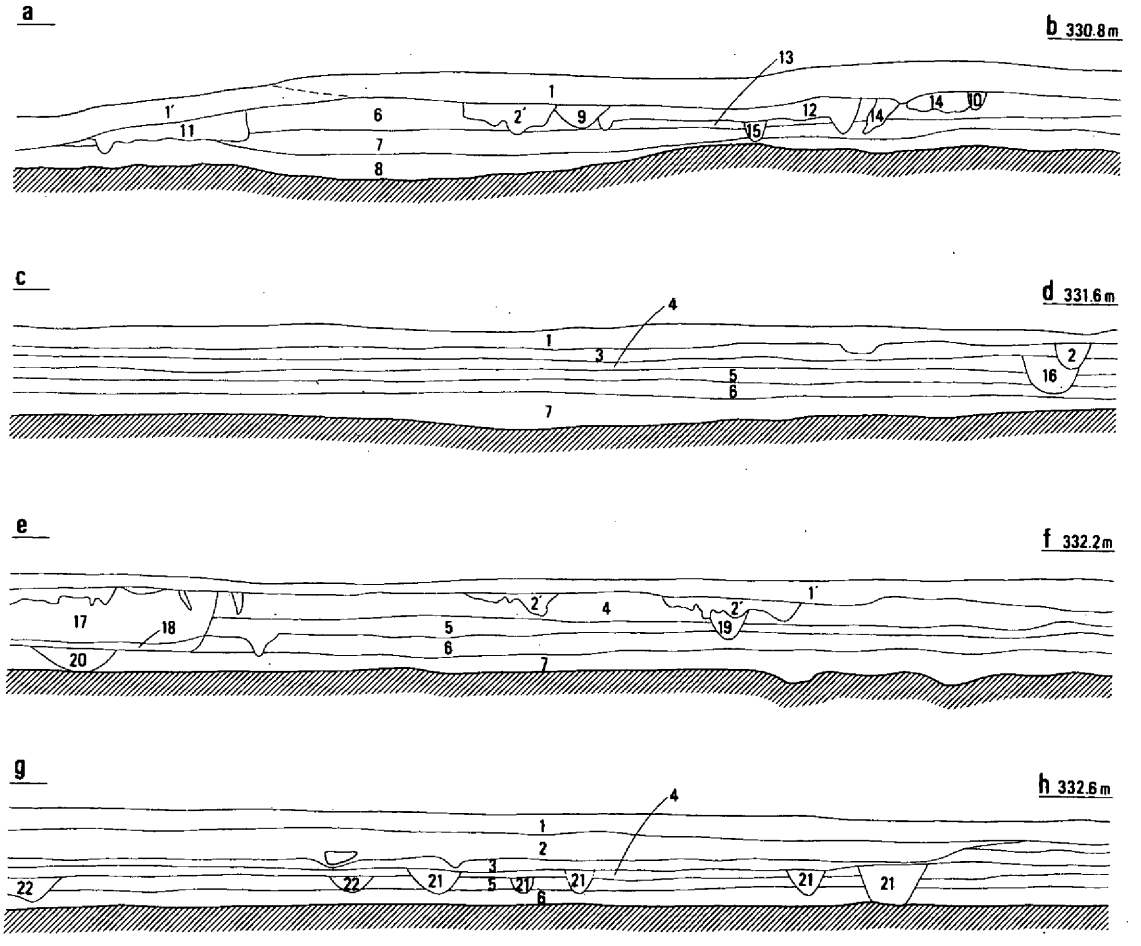
第８図　Ａ～Ｆ区遺構配置図（1/300）



第９図　G～L区遺構配置図（1/300）

下湯原Ｂ遺跡では、近・現代の造成土を除き、表土に現代の耕作土が20cm前後覆っている。その下には、Ｅ区の北半からＨ区の南半にかけてと、Ｋ区からＬ区にかけて中世包含層の黒灰褐色粘質微砂が堆積しているほかは、古墳時代の包含層である暗茶褐色微砂および黒灰色粘質微砂、黒色粘質微砂の堆積となっていて、中世および古代の遺構と古墳時代の遺構が同一の遺構面において検出されている。その下の暗茶褐色粘質微砂は、地山と考えられる基盤層である。なお、発掘調査において古墳時代中期以前の遺構は検出されず、遺物も包含層から摩滅した弥生土器が数点出土したのみである。このため古墳時代後期の遺構が検出された暗茶褐色粘質微砂および砂礫層の下層について、Ｄ区およびＧ区にトレンチを設定し、２ｍ以上の掘り下げを行ったが、暗茶褐色細砂層と黄褐色砂礫層が50～70cm程づつ互層に堆積しているのみで、遺構・遺物とも確認されなかった。

発掘調査にあたり、国土座標を基準として調査区に20m四方の方眼を組み、Ｘ軸にアルファベットで南からＡ・Ｂ・Ｃ…と、Ｙ軸に数字で西から１・２・３…と割り当て（Ｘ＝－90100‥Ｄ、Ｙ＝－54600‥３）、南西の杭を調査地区名とした。なお、本書の記載ではＹ軸の数字を省略した。



1　灰褐色粘質微砂
1’黒灰色砂質土
2　暗灰褐色微砂
2’灰褐色砂質土
3　黒灰褐色粘質微砂
4　黒灰色粘質微砂
5　黒色粘質微砂
6　暗茶褐色微砂
7　暗茶褐色粘質微砂
8　暗茶褐色砂礫層
9　黒色粘質土（焼土・炭化物含む）
10　黒色微砂
11　黒色砂質土（竪穴住居１覆土）
12　黒色粘質微砂（竪穴住居２覆土）
13　暗茶褐色粘質微砂
14　黒色砂質土
15　黒色粘質土
16　黒色粘質微砂（暗灰褐色土のブロック含む）
17　黒褐色粘質微砂（竪穴住居13覆土）
18　黒色粘質微砂（暗茶褐色土のブロック含む）
19　黒色砂質土
20　黒色粘質微砂
21　黒色粘質微砂
22　暗黒褐色粘質微砂

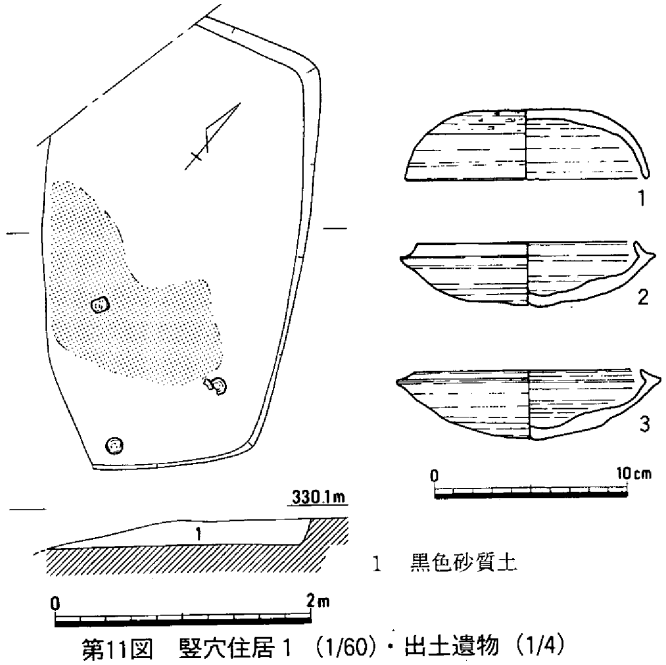
第10図　主要土層断面図（1/80）

第２節　遺構・遺物

１　竪穴住居

竪穴住居１（第11図、図版３－１）

Ａ区北部の西端において検出された遺構で、一部は用地外におよんでいる。また、遺構の西半部は中世の下がりで削平されているが、一辺 3.5m程のやや歪な隅丸方形を呈する竪穴住居が推定される。中央部を中心に堅く締まった床面が遺存しているが、柱穴および壁体溝は確認されていない。床面の高さは海抜329.8mを測り、覆土は黒色砂質土が一層である。



第11図　竪穴住居１（1/60）・出土遺物（1/4）

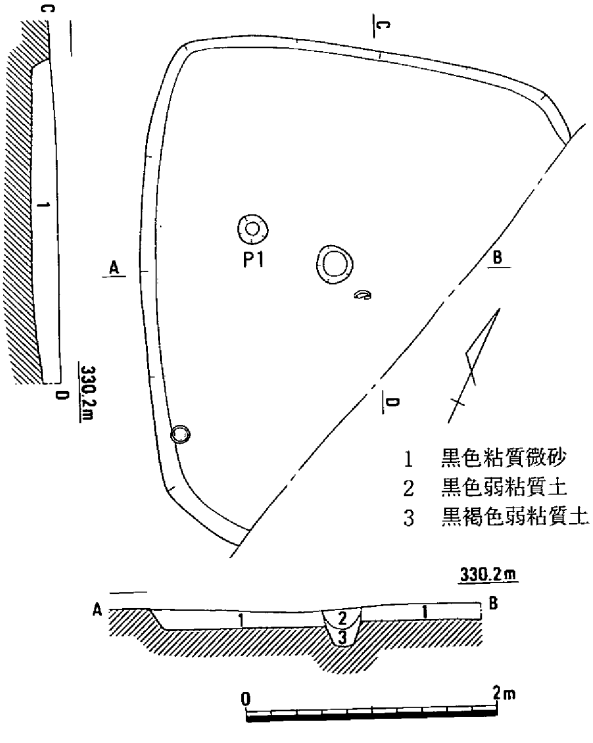
遺物は、遺存している南東部床面においてほぼ完形の杯蓋や杯身などの須恵器のほか土師器の細片が出土している。１は天井部がやや扁平な杯蓋、２・３は尖り底気味の杯身でいずれも数mmの砂粒を含む胎土である。色調は１・２が灰色を、３がにぶい黄橙色を呈しており、焼成は良好である。

時期は、出土遺物などから６世紀末から７世紀初頭頃と考えられる。

竪穴住居２（第10図）

Ａ区北部の西側溝内において南東端の一部分のみが検出された遺構である。詳細は不明なものの竪穴住居１から 2.5m程北に位置し、隅丸方形もしくは隅丸長方形の竪穴住居が推定される。床面の高さは海抜329.9mを測り、覆土は黒色粘質微砂が一層であるが、中央付近の床面は堅く叩き締められている。

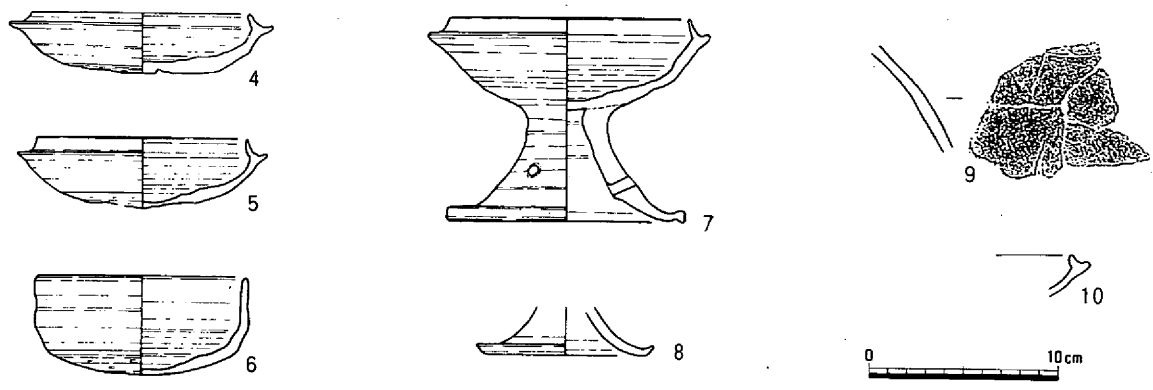
時期は、検出状況などから古墳時代後半と考えられる。



第12図　竪穴住居３（1/60）

竪穴住居３（第12・13図、図版３－２）

Ｂ区中央部の東側、竪穴住居１から８m程南東において検出された遺構で、東部４分の１程は用地外におよんでいる。検出された状況から、長辺４m・短辺 3.5m程のやや歪な隅丸長方形が推定される竪穴住居である。覆



第13図　竪穴住居３出土遺物（1/4）

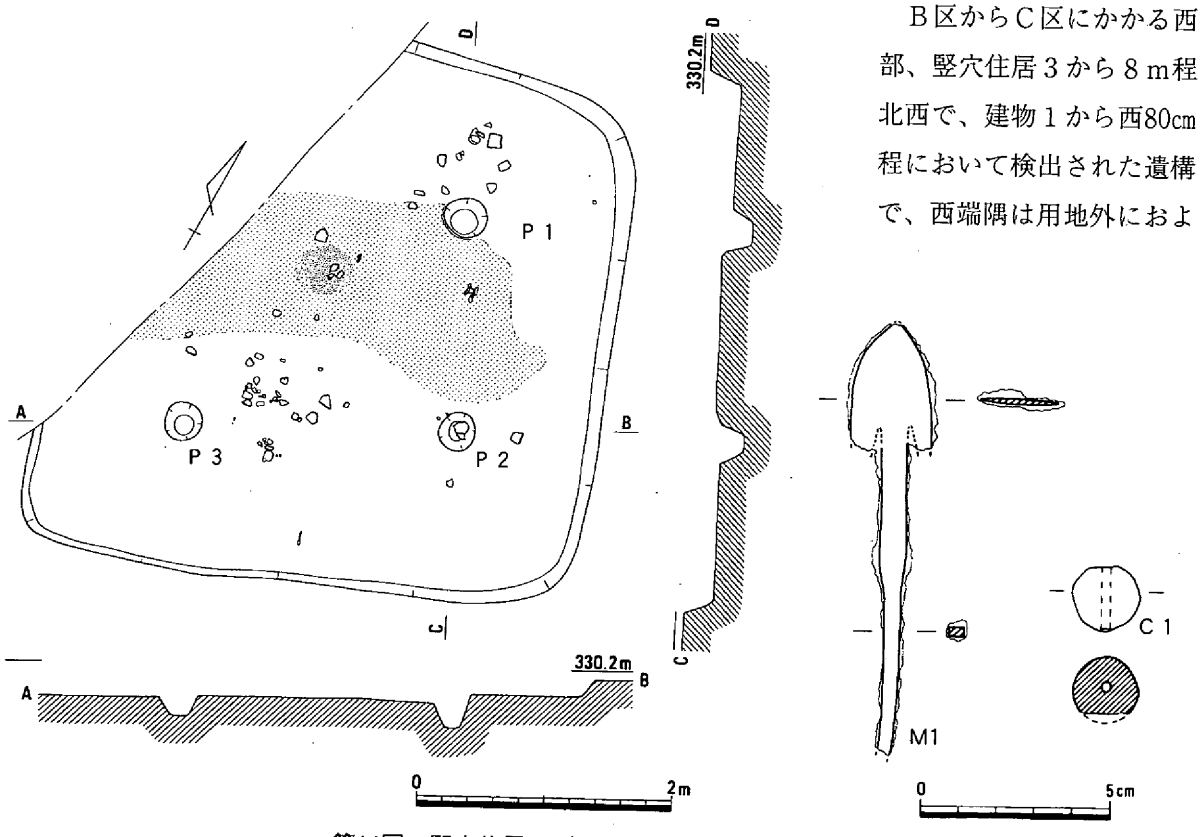
土は黒色粘質微砂が一層堆積し、床面の高さは、海抜329.9mを測る。なお、床面において検出されたＰ１は、直径25cm・深さ20cm程の柱穴状の遺構で、竪穴住居に伴う可能性もあるが主柱穴とは考えられない。また、中央部で検出された直径28cm・深さ18cm程の遺構は覆土を切り込んでいる。この竪穴住居に伴う壁体溝は確認されていない。

遺物は、ほぼ完形の高杯をはじめ杯身などの須恵器や土師器の細片が出土している。４は床面東部から出土したほぼ完形の、５は床面中央部で出土した杯身で、胎土は１㎜前後の砂粒を含み灰色を呈し焼成は良好である。また、７は南西部壁際で出土したほぼ完形の高杯で、脚裾部に３か所円孔が穿たれている。1.5㎜程の砂粒を含む胎土で、灰白色を呈し焼成は良好である。９は、壺の肩部とみられ赤褐色を呈する土師器で、外面にヘラ先による線刻が認められる土器片である。

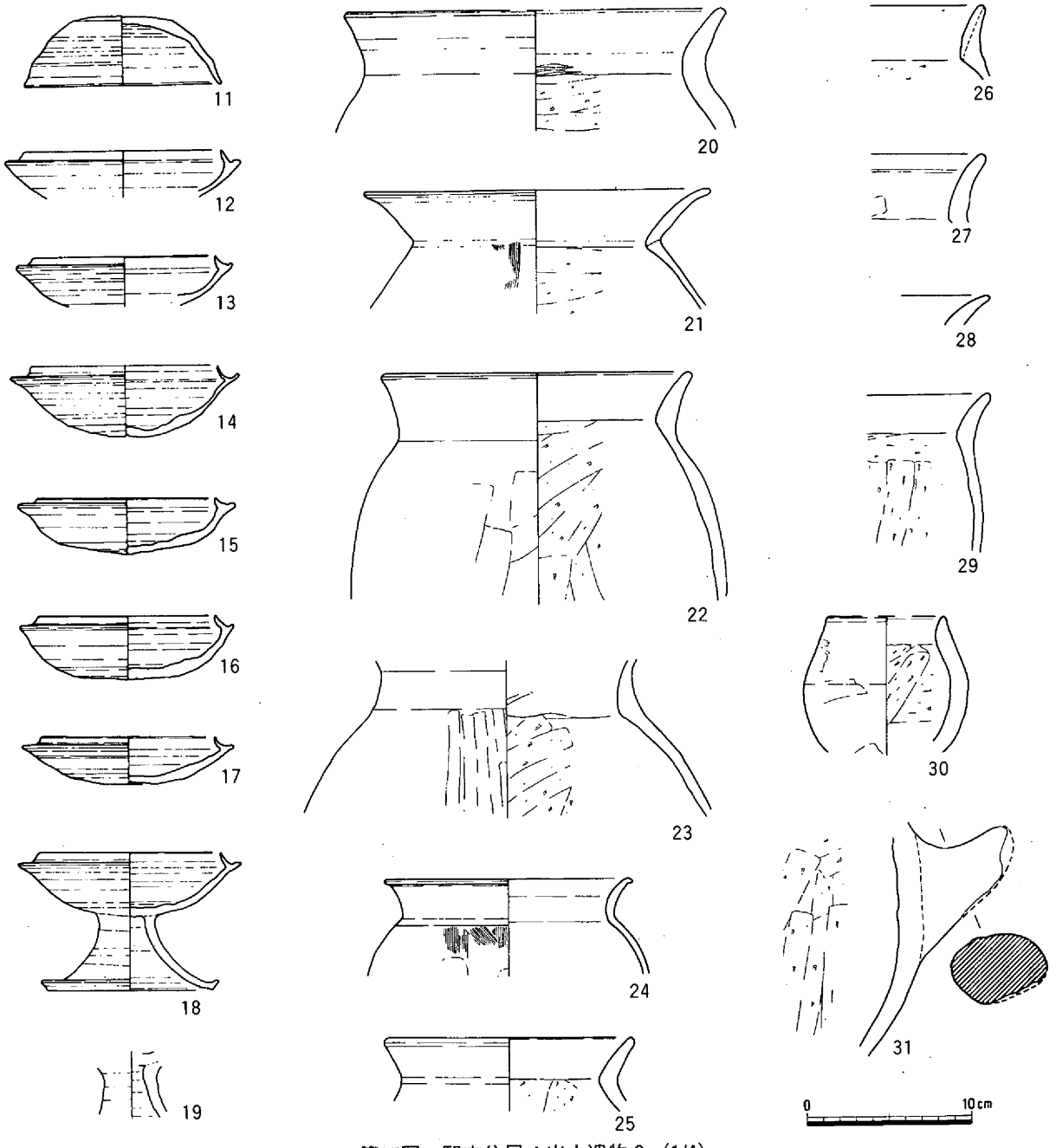
時期は、出土遺物などから６世紀後半と考えられる。

竪穴住居４（第14・15図、図版３－３）

Ｂ区からＣ区にかかる西部、竪穴住居３から８ｍ程北西で、建物１から西80cm程において検出された遺構で、西端隅は用地外におよ



第14図　竪穴住居４（1/60）・出土遺物１（1/2）



第15図　竪穴住居４出土遺物２（1/4）

んでいるが、一辺4.4ｍ程のやや歪な隅丸方形が想定される竪穴住居である。床面の高さは、海抜329.9ｍを測り、覆土は黒色粘質微砂が一層である。壁から90～100cm程内側の床面において３本の柱穴が検出された。柱穴の規模は、いずれも直径30～35cmで、床面からの深さは15～20cmを測る。なお、北西の１本は側溝内に位置していたと考えられる。これらの柱穴の内側を中心とした床面の中央部は堅く叩き締められ、その真ん中の40×50cm程の範囲に、焼土面が確認されている。そのほかに壁体溝などの施設は認められなかった。

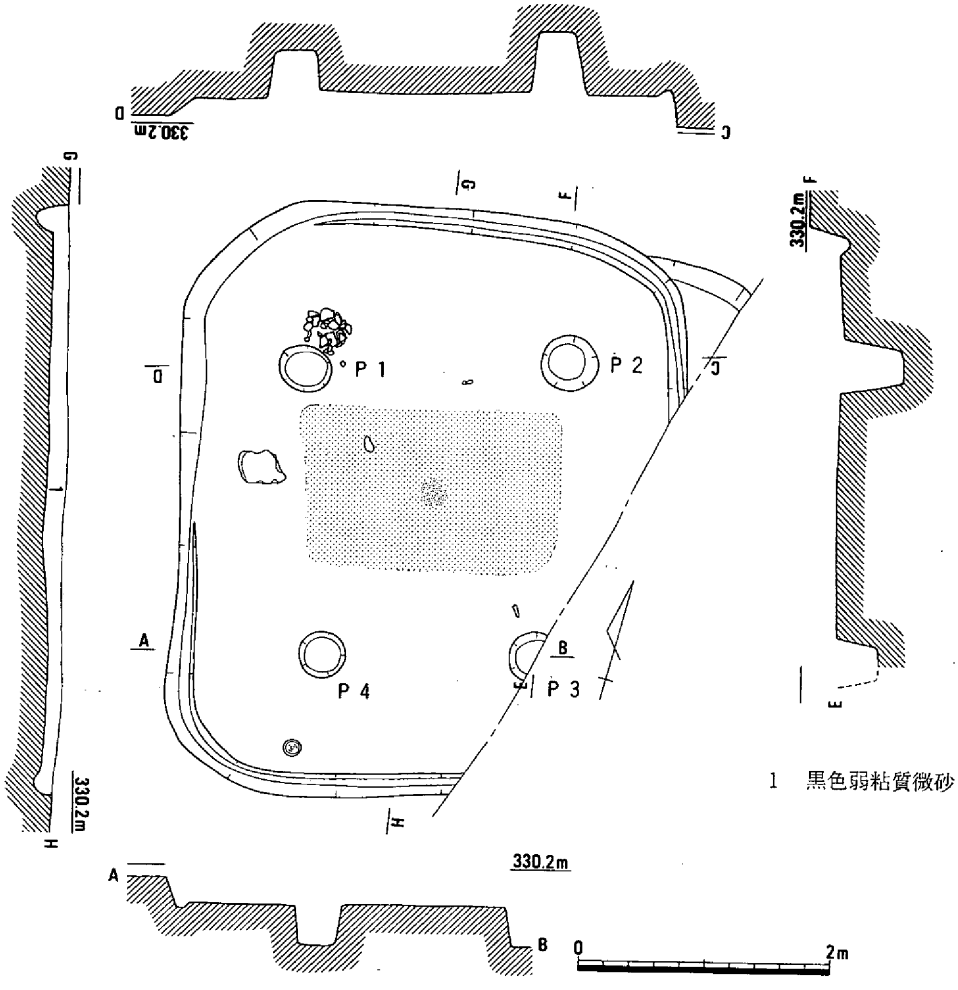
遺物は、床面を中心に覆土中から杯蓋や杯身、高杯などの須恵器や土師器の甕片が出土しているほか、鉄鏃などが出土している。Ｍ１は、南壁から20cm程内側の床面から出土した鉄鏃で、茎部など先端部は欠損している。鏃身は逆刺を有する柳葉形を呈し、頸部は錆などで関が明瞭ではないものの４cm程を測る。Ｃ１は、覆土中から出土した明赤褐色の練玉である。11は須恵器の杯蓋、12～17は須恵

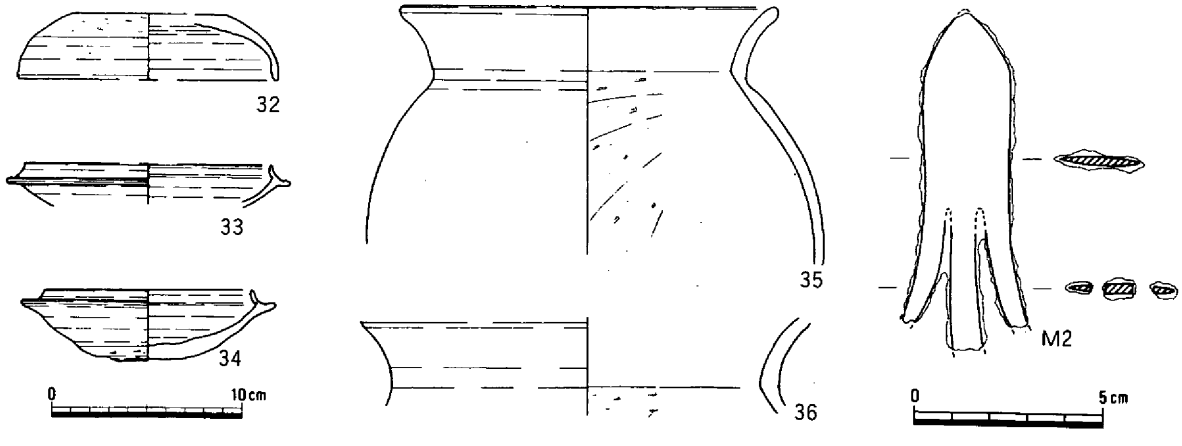
器の杯身、18・19は須恵器の高杯でいずれも２㎜前後の砂粒を含む胎土で、灰色もしくは黄灰色を呈し、焼成は良好である。14は、ほぼ完形で出土している。20～29はいずれも「く」の字状に外反する口縁をもつ土師器の甕で、屈曲部より下の内面はヘラケズリ、外面体部は縦方向のハケメ調整されているが、22・23の外面は工具によるナデである。胎土は３㎜以下の砂粒を含み、焼成は良好である。20・23～27は赤褐色、21は橙色22・28・29は褐色を呈している。31は甑の細片で１～４㎜の砂粒を含み、焼成は良好である。

時期は、出土した遺物などから６世紀末頃と考えられる。

竪穴住居５（第16図、図版３－４）

Ｃ区中央部の東側、竪穴住居６の南東２ｍ程において検出され遺構で、東端隅は用地外におよんでいる。検出された状況から、長辺4.7ｍ・短辺





第16図　竪穴住居５（1/60）・出土遺物（1/4・1/2）

４ｍ程のやや歪な隅丸長方形の竪穴住居が想定される。床面の高さは、海抜329.9ｍを測り、覆土は黒色弱粘質微砂が一層である。中央部の２×1.3ｍ程の範囲は堅く叩き締められ、ほぼ中央の25×20㎝程の範囲に焼土が確認されたものの、土壙などは伴っていない。なお、北辺から東辺および西辺南半から南辺にかけては壁に沿って幅10㎝・深さ５㎝程の壁体溝とみられる溝が検出されている。柱穴は壁から90～120㎝程内側の床面において４本検出された。柱穴の規模は、直径35～45㎝で、床面からの深さ30～50㎝を測る。なお、西辺の壁から30㎝程内側の床面で、縦30㎝・横25㎝程で、高さ10㎝弱を測る安山岩製の作業台とみられる石が確認されている。

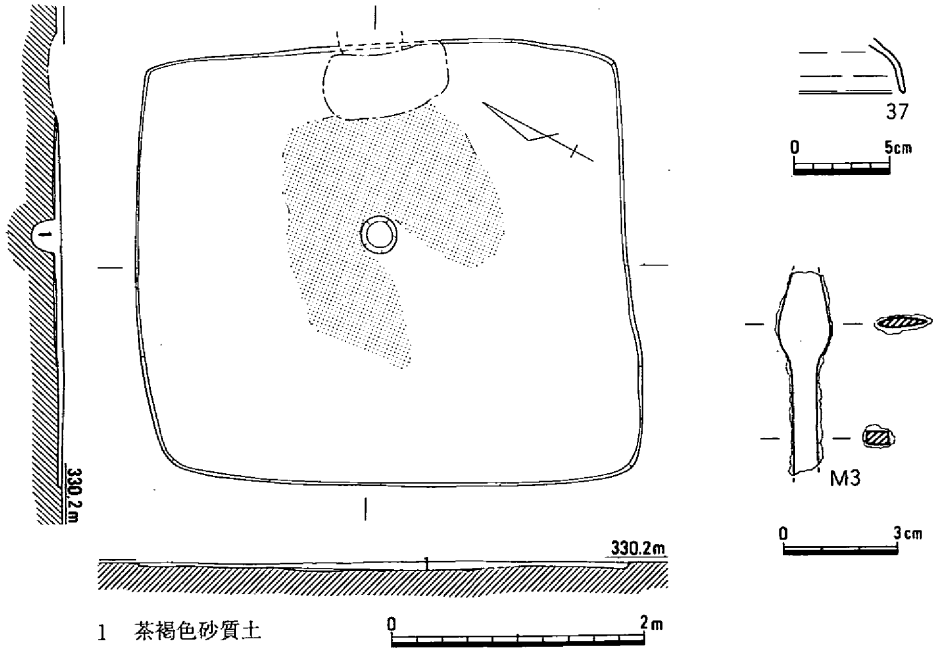
遺物は、ほぼ完形の杯身などの須恵器や土師器が出土しているほか、鉄鏃が出土している。Ｍ２は、Ｐ３からすぐ北側の床面において出土した鉄鏃で、茎部などは欠損しているがかなり強い逆刺を有する柳葉形の鏃身をもつものである。32は天井部が扁平な須恵器の杯蓋、33・34は須恵器の杯身であるが、34は南西部壁際の床面から出土したほぼ完形の土器で、砂粒を含み焼成は良好である。外面は灰白色を、内面は灰黄色を呈する。35・36は「く」の字状に外反する口縁をもつ土師器の甕で、屈曲部より下の内面はヘラケズリされている。35はＰ４のすぐ北側の床面でまとまって出土した土器で３㎜までの砂粒を含む胎土で、赤褐色を呈し焼成は良好である。

時期は、出土遺物などから６世紀末頃と考えられる。

なお、北東部においてこの遺構に先行するとみられる竪穴住居の一部が検出された。床面の高さは、海抜330.0ｍを測り、覆土は黒色粘質土が一層である。柱穴、壁体溝などは検出されず、大部分が竪穴住居５に削平されているため、規模など詳細は不明である。

竪穴住居６（第17図、図版４－１）

Ｃ区中央部やや北寄りの、竪穴住居５から北西２ｍ・竪穴住居８から南東５ｍ程において検出され遺構である。検出された状況から、長辺3.9ｍ・短辺3.4ｍ程の隅丸長方形の竪穴住居が想定される。床面の高さは、海抜330.1ｍと周りの竪穴住居より一段高い為、上面はほとんど削平されてわずか数㎝の立ち上がりが確認できたのみである。覆土は茶褐色砂質土が一層で、南西部を除く中央付近の床面は堅く叩き締められている。この竪穴住居に伴う主柱穴は検出されていないが、中央部で検出された直径28㎝・深さ24㎝程の柱穴状のものは、覆土に似た土で埋まっており、中央

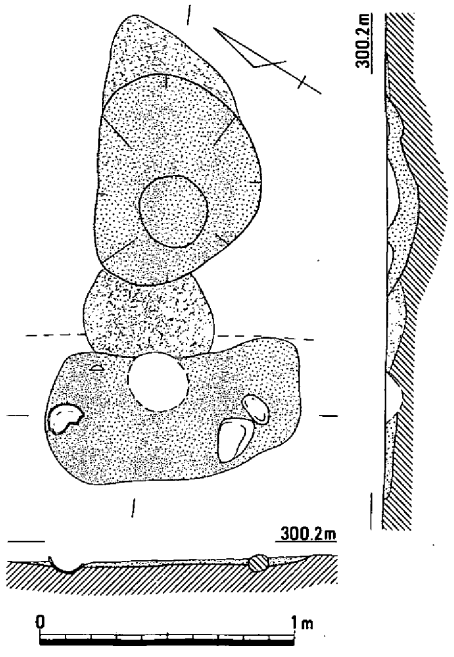


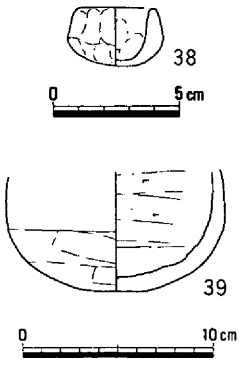
第17図　竪穴住居６（1/60）・出土遺物（1/4・1/2）

穴とも考えられる。なお、北東辺中央の壁際には焼土面が確認されている。

遺物は、覆土から若干の土器が出土しているがいずれも細片で、図示できたのは須恵器の杯蓋片37のみである。このほか、中央やや南寄りの床面で鉄鏃Ｍ３が１本出土している。先端部と茎部が欠損しているが、長さ３cm程の柳葉形の鏃身が推定される鉄鏃である。

時期は、出土遺物などから６世紀末頃と考えられる。





第18図　竈状遺構（1/30）・出土遺物（1/3・1/4）

竈状遺構（第18図）

竪穴住居６の北東辺中央部壁際において検出された遺構である。上面の削平が著しく詳細は不明であるが、竪穴住居の壁に直交して１ｍあまり外側まで焼土土壙が延びている。住居内では、壁に沿った１ｍ×50cm程の長方形の範囲が深さ５cmまでの浅い窪みとなり、そこに焼土が広がっている。火をうけ「カマド」に使われたとみられる10数cm大の石も出土している。また、壁から約30cm外側には80×60cm程の歪な楕円形を呈し、深さ13cmを測る土壙の底に厚さ５～８cmにわたり焼土の堆積が確認され、その間には「煙道」と考えられる浅い窪みに焼土が広がっている。

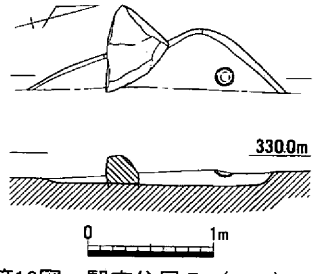
遺物は、住居内の窪みから土師器が出土している。38は口縁の一部を欠いているがほぼ完形で出土したミニチュア土器で、にぶい褐色を呈している。39は口縁が欠損している土師器の小形壺形土器で、砂粒を含み焼成は良好である。にぶい褐色を呈する。

時期は、出土遺物などから６世紀末頃と考えられる。なお、検出状況から竪穴住居３に伴う「竈」とみられるが、検出された焼土面が竪穴住居の床面より若干高い位置に広がっており断定できない。

竪穴住居７（第19図）

Ｃ区北部の東端において一部分のみが検出できた遺構で、大半は用地外におよんでいる。竪穴住居６の東・竪穴住居－５の北東４ｍ程に位置し、隅丸方形もしくは隅丸長方形の竪穴住居が推定される。床面の高さは海抜329.75ｍを測り、覆土は黒色粘質微砂が一層である。検出できた部分が僅かで、柱穴などは見つかっていない。また、壁体溝も確認されなかった。床面から10cm程の覆土中から須恵器の杯身などが出土している。

時期は、出土遺物などから６世紀末頃と考えられる。



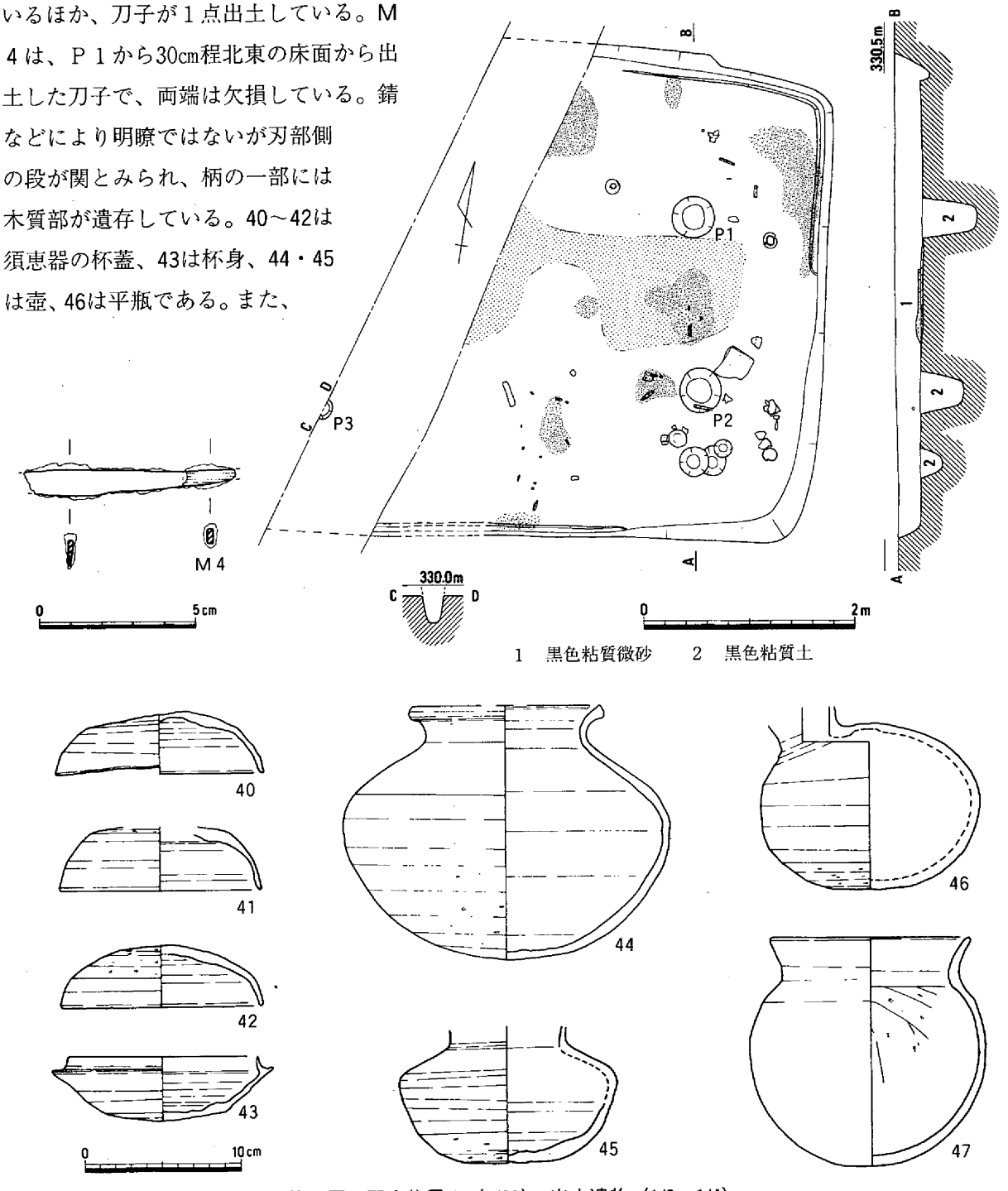
第19図　竪穴住居７（1/60）

竪穴住居８（第20図、図版４－２）

Ｃ区からＤ区にかかる西部、竪穴住居６から２ｍ程北西において検出された遺構で、西側３分の１は用地外におよんでいる。南北 4.8ｍ・東西5.5ｍ以上の隅丸長方形が想定される竪穴住居で、床面の高さは、海抜330.15ｍを測る。覆土は黒色粘質微砂が一層であるが、床面の中央部付近は堅く叩き締

められている。壁から100cm程内側の床面において２本の柱穴が検出された。柱穴の規模は、直径40cm、床面からの深さ40～50cmを測る。なお、南西の側溝内に底面の高さがほぼ同様の柱穴Ｐ３が検出されている。北辺から東辺北半および南辺中央部にかけては壁に沿って幅10～15cm・深さ10cm程の壁体溝とみられる溝が検出されている。また、床面中央部では直径20cm程の「火処」とみられる焼土が確認されている。Ｐ２のすぐ北東の床面で、一辺30cm・高さ10cm程の作業台と考えられる玢岩製の石が確認されている。なお、壁際を含め床面上には厚さ10～20cmにおよぶ焼土塊や炭化材が散在していることなどから、この竪穴住居は火災により放棄されたものと考えられる。

遺物は、ほぼ完形の杯蓋・杯身をはじめ壺などの須恵器や土師器の甕などが床面を中心に出土しているほか、刀子が１点出土している。Ｍ４は、Ｐ１から30cm程北東の床面から出土した刀子で、両端は欠損している。錆などにより明瞭ではないが刃部側の段が関とみられ、柄の一部には木質部が遺存している。40～42は須恵器の杯蓋、43は杯身、44・45は壺、46は平瓶である。また、



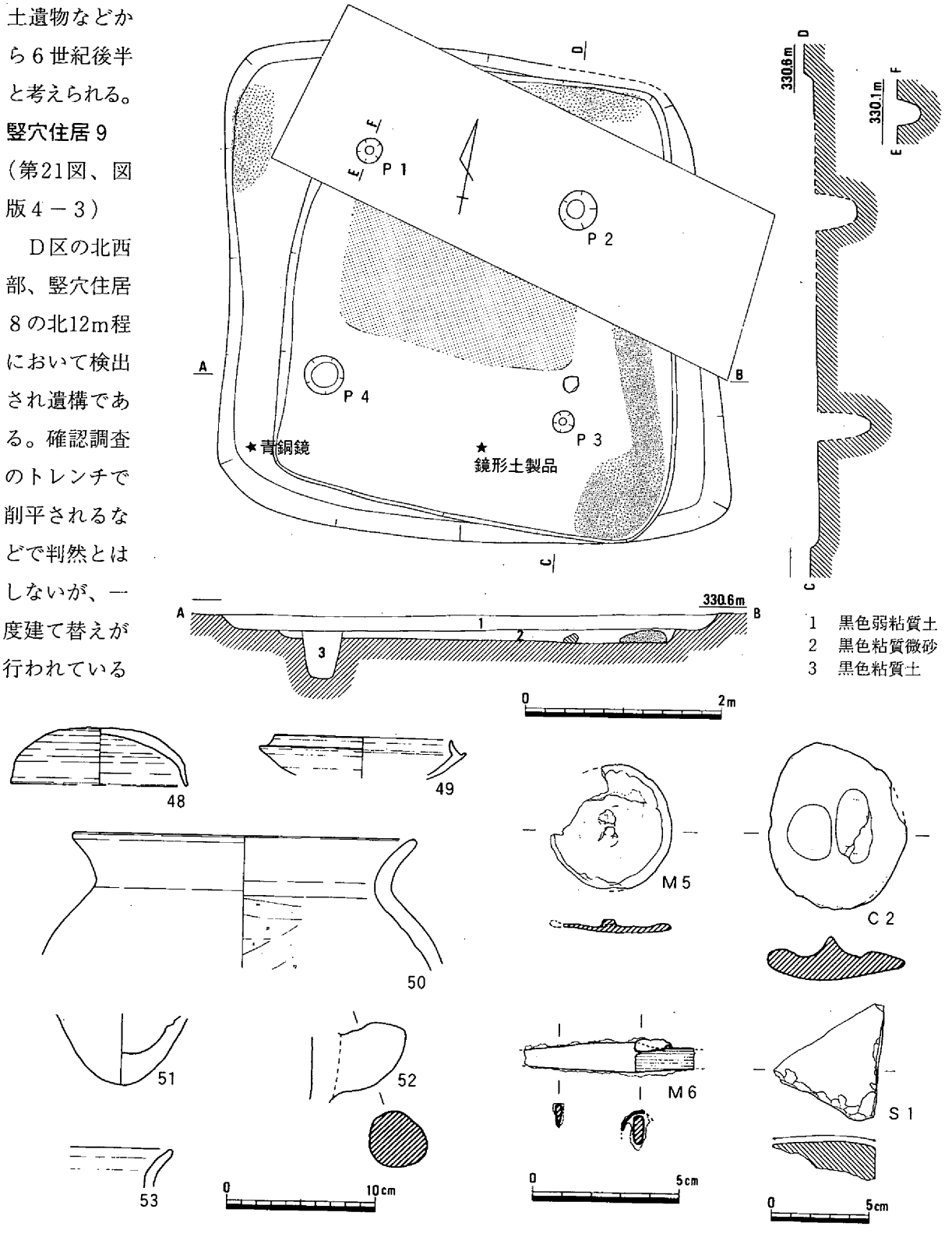
第20図　竪穴住居８（1/60）・出土遺物（1/2・1/4）

47は土師器の甕である。40・41・44・47は南東部から、42・45・46は北東部の床面から43は覆土中から出土している。40・43は完形で、45～47は一部欠損があるもののほぼ完形にちかい形で出土したもので、いずれも２㎜前後の砂粒を含む胎土で、焼成は良好である。40～43・45・46は灰色ないし黄灰色を、44は灰白色を呈している。また、47の外面は工具ナデがられ、にぶい赤褐色を呈する。

時期は、出土遺物などから６世紀後半と考えられる。

竪穴住居９（第21図、図版４－３）

Ｄ区の北西部、竪穴住居８の北12m程において検出され遺構である。確認調査のトレンチで削平されるなどで判然とはしないが、一度建て替えが行われている



第21図　竪穴住居９（1/60）・出土遺物（1/4・1/2・1/3）

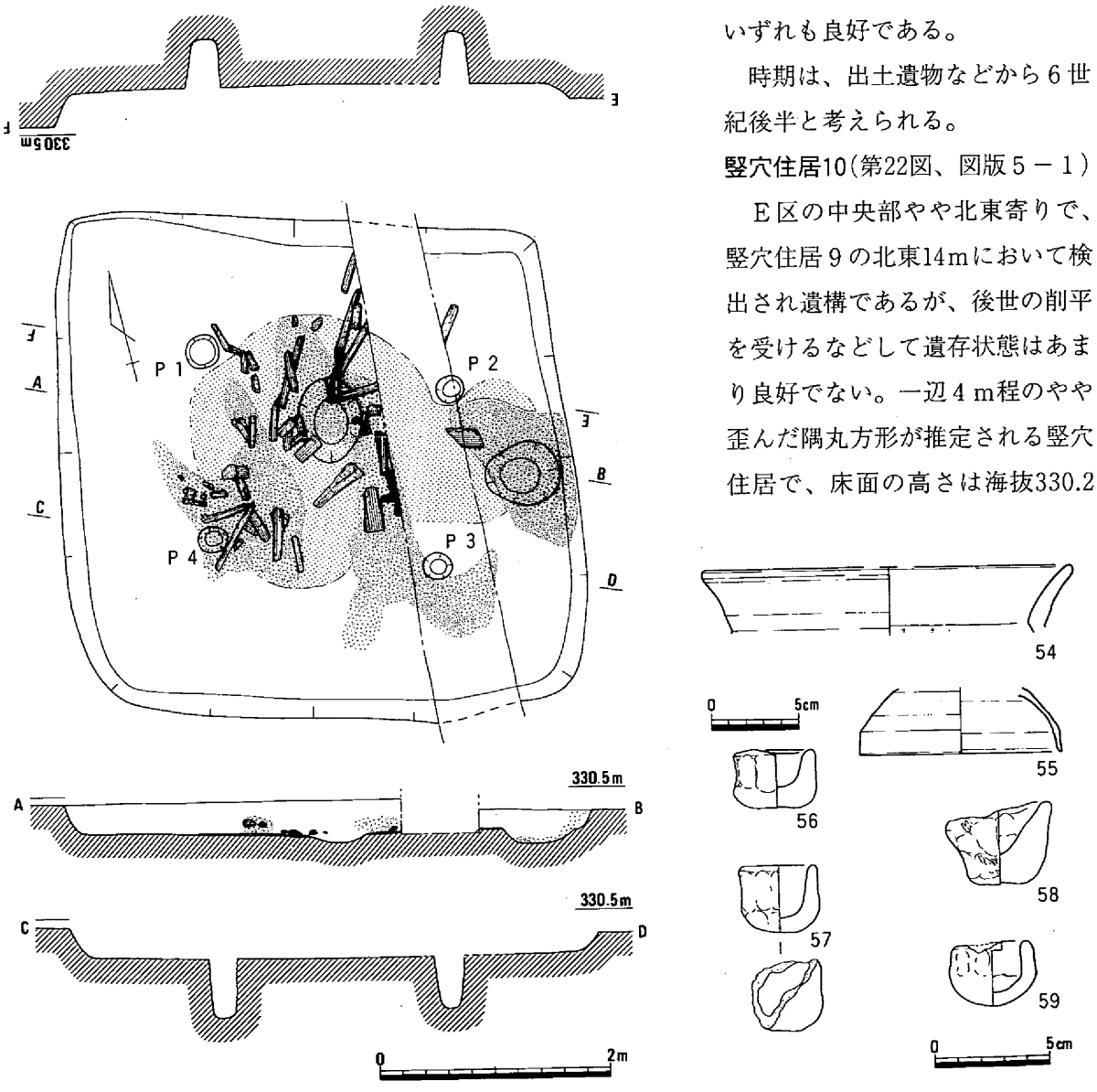
竪穴住居と考えられる。規模は、一辺4.5m程の隅丸方形が想定され、床面の高さは、海抜330.35mと周りの竪穴住居より一段高くなっている。覆土は黒色弱粘質土が一層で、壁から90～100cm内側の床面で４本の柱穴が検出されている。検出された柱穴の規模は、最も良好に検出されたＰ１で直径40cm・床面からの深さ50cmを測り、底の高さは４本ともほぼ同じである。なお、これらの柱穴の内側を中心とした中央部は堅く叩き締められている。また、西側北部から北側および東側の壁際に沿って厚さ10数cmにおよぶ焼土の堆積が確認された。

遺物は、床面を中心に覆土中から杯蓋や杯身などの須恵器や土師器片が出土しているほか、小形の銅鏡や刀子などが出土している。Ｍ５は南西角の覆土中から出土した小形仿製鏡で、裏面に模様のない直径4.3cm程の素文鏡、Ｍ６は両端が欠損しているものの柄の一部と木質部が遺存している刀子である。Ｃ２は南壁から90cm程の覆土中から出土した、表裏に指紋の痕が著しい鏡形土製品で明赤褐色を呈している。また、Ｓ１は白色流紋岩製の砥石片である。48は灰黄色を49は灰白色を呈する須恵器の杯蓋・杯身である。50～53はいずれも土師器で、52は甑の把手部分である。50が黄褐色を呈するほかは赤褐色を呈している。焼成はいずれも良好である。

時期は、出土遺物などから６世紀後半と考えられる。

竪穴住居10（第22図、図版５－１）

Ｅ区の中央部やや北東寄りで、竪穴住居９の北東14mにおいて検出され遺構であるが、後世の削平を受けるなどして遺存状態はあまり良好でない。一辺４m程のやや歪んだ隅丸方形が推定される竪穴住居で、床面の高さは海抜330.2



第22図　竪穴住居10（1/60）・出土遺物（1/4・1/3）

ｍ程を測り、覆土は黒褐色粘質土が一層である。壁から100cm程内側の床面で４本の柱穴が検出されている。柱穴の規模は直径30cm程の円形で、床面からの深さは50cm前後を測る。この他中央部には、75×55cm程の楕円形で５cm程の浅い窪みが、また、出入り口が推定される東辺中央部壁際には、75×55cmの規模で床面からの深さ15cm程の土壙が設けられている。なお、柱穴の内側を中心とした中央部の床面は堅く叩き締められ、中央から東辺にかけてのかなり広い範囲には、焼土や炭が、柱材などとみられる炭化材とともに確認されたことから、焼失住居と考えられる遺構である。

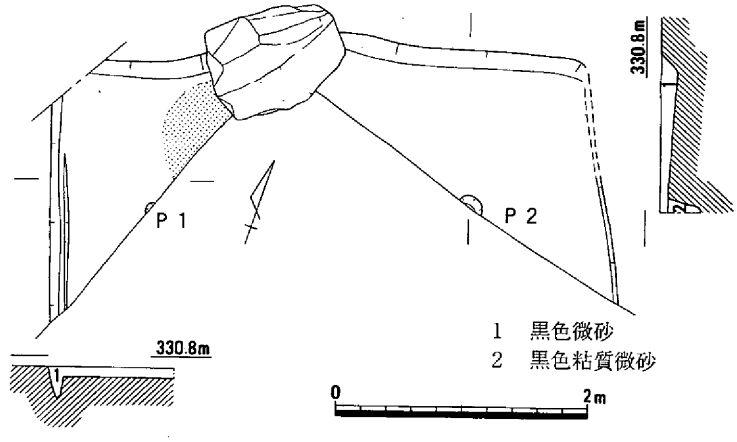
遺物は、須恵器や土師器などの土器が少量出土しているほか、祭祀に使用されたとみられるミニチュア土器が出土している。54は「く」の字状に外反する甕の口縁部片で褐色を呈している。55は須恵器の杯蓋である。56～59はいずれも手捏ねのミニチュア土器で57は意図的に打ち壊されているものである。砂粒を多く含む胎土で56が橙色のほかは明褐色を呈している。

時期は、出土遺物などから６世紀末から７世紀初頭頃と考えられる。

竪穴住居11（第23図）

Ｇ区の北東部、Ｈ区との境で検出された遺構で、大半は後世の削平を受けていてごく一部のみが遺存していた遺構である。壁から100cm程内側において柱穴が２本検出され、部分的であるが堅く叩き締められた床面が検出されたことから、一辺４ｍ程の隅丸方形もしくは隅丸長方形の竪穴住居が想定される。柱穴は、直径25cm以上を測る円形で、床面からの深さは30cm程を測る。上面もほとんど削平されており、わずか数cmの立ち上がりが確認できたのみであるが、床面の高さは海抜330.65ｍを測り、覆土は黒色微砂が一層である。なお、北辺中央部にある大きな石は、動かされることなくそのまま壁面に利用されたものと考えられる。

時期は、明確な出土遺物がなく断定はできないが、検出状況などから古墳時代後半頃と推定される。

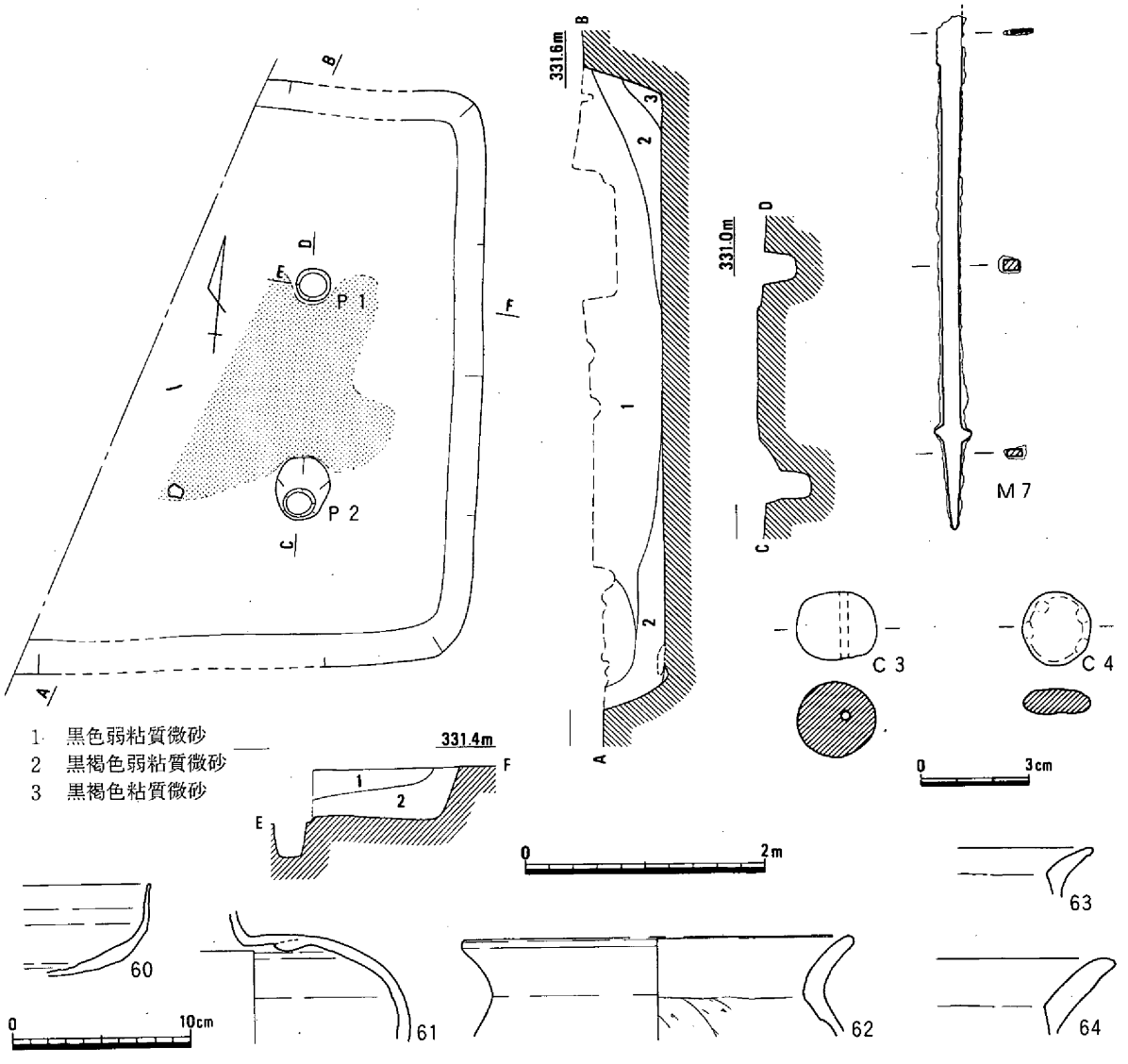


第23図　竪穴住居11（1/60）

竪穴住居12（第24図、図版４－４）

Ｈ区の北西部、竪穴住居13の南３ｍ程において検出された遺構である。西側３分の１は用地外におよんでいるが、一辺4.8ｍ程の隅丸方形もしくは隅丸長方形の竪穴住居が想定される。床面の高さは、海抜330.8ｍを測り、壁から120cm程内側の床面において２本の柱穴が検出された。柱穴の規模は、直径約30cm、床面からの深さ40～50cmを測る。覆土は三層確認されているが、１層の黒色弱粘質土は締まりのない土で、二次堆積とも考えられる。柱穴の内側を中心とした床面の中央部は堅く叩き締められているが、焼土面は確認されていない。

出土遺物としては、床面および覆土中から須恵器や土師器などの土器片のほか鉄鏃や練玉などがある。Ｍ７は、中央部の床面近くから出土した鉄鏃である。先端部が欠損しており鏃身部の形状は明らかでないが、片刃で長い頸部と茎部の間に突起状の関部を有する長頸鏃が想定される。Ｃ３・Ｃ４



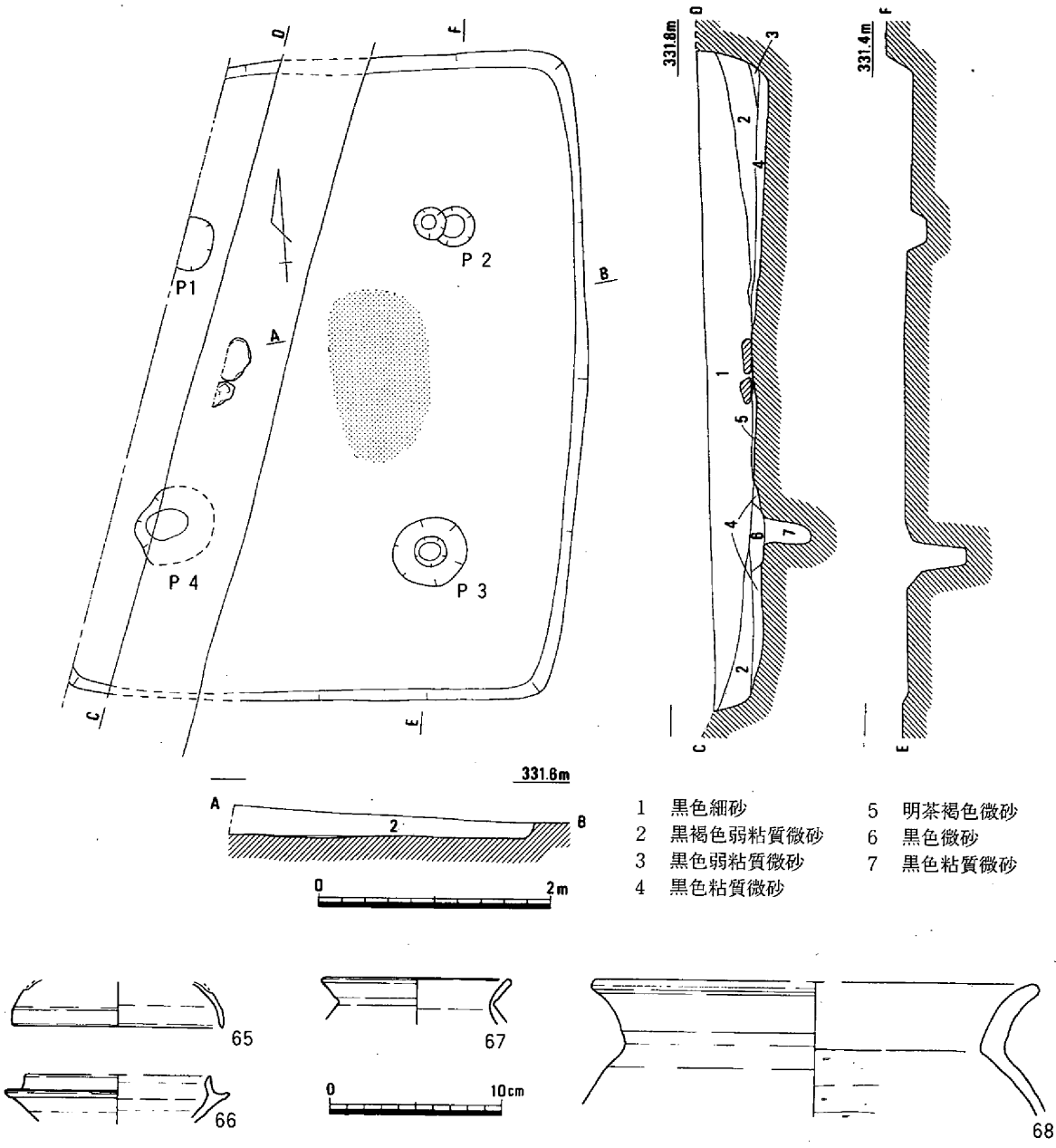
第24図　竪穴住居12（1/60）・出土遺物（1/2・1/4）

は、いずれも南部の覆土中から出土した練玉と円形土製品でにぶい褐色を呈している。土器はいずれも細片で、60・61は須恵器、62～64は土師器である。60は杯で灰白色を呈し、焼きがやや甘い。61は黄灰色を呈する平瓶である。62～64はいずれも「く」の字状に外反する甕の口縁部片でにぶい褐色を呈し、焼成は良好である。

時期は、出土遺物などから６世紀後半と考えられる。

竪穴住居13（第25図）

Ｉ区の南西部において、竪穴住居12の北３ｍ程に隣接して検出された遺構で、西端部は用地外におよんでいるが、南北5.5ｍ・東西4.5ｍ程の隅丸長方形の平面形を呈する竪穴住居である。床面の高さは、海抜331.0ｍを測り隣接する竪穴住居12の床面より20cm程高くなっている。壁から100cm程内側の床面において３本の柱穴が検出され、さらに、北西の壁際において残る１本の柱穴と考えられる東側の肩部が確認されている。柱穴の規模は、Ｐ３・Ｐ４が直径約60cm、床面からの深さ50cmを測るものの、Ｐ２は直径35cm・深さ20cm程を測るのみである。覆土は三層確認されているが、１層の黒色弱粘質土は締まりのない土で、二次堆積も考えられる。柱穴の内側を中心とした床面の中央部は堅く叩き



第25図　竪穴住居13（1/60）・出土遺物（1/4）

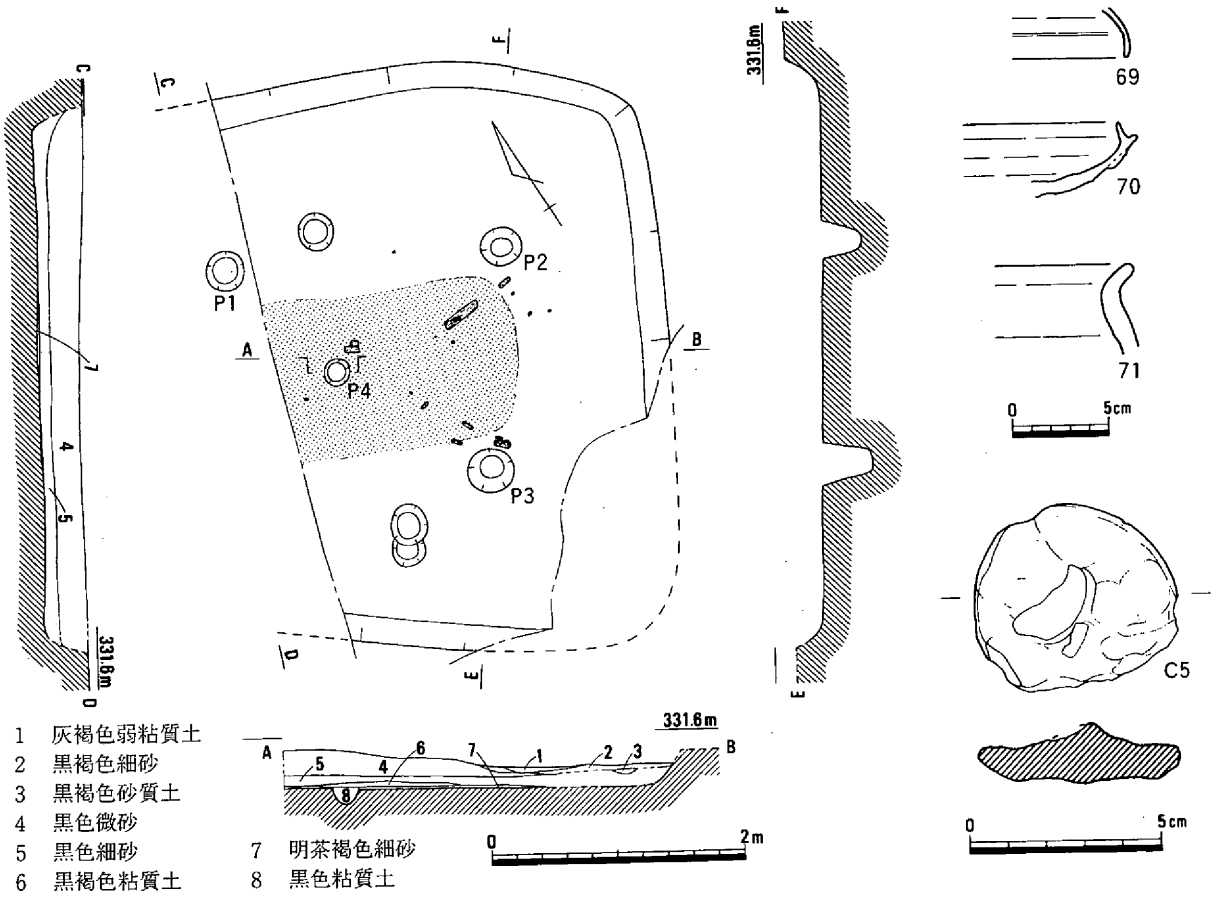
締められ、中心部では焼土が確認されている。

遺物は、覆土中から須恵器や土師器などの土器が出土しているが、いずれも細片である。65～67は須恵器で、65は灰白色を呈する杯蓋、66は灰黄色を呈する杯身であるが細片で口径は推定である。また、67は灰白色を呈する口縁部片である。なお、68は「く」の字状に外反する土師器の甕片で、にぶい褐色を呈し、焼成は良好である。

時期は、出土遺物などから６世紀後半と考えられる。

竪穴住居14（第26図、図版５－２）

Ｉ区の北西端、竪穴住居13から９ｍ程北において検出された遺構である。西部は用地外におよび、南東部は後世に削平されるなどしていて遺存状態はあまり良好ではない。検出状況などから一辺4.5ｍ程のやや歪んだ隅丸長方形状の平面形を呈する竪穴住居が想定される。床面の高さは、海抜331.2



第26図　竪穴住居14（1/60）・出土遺物（1/4・1/2）

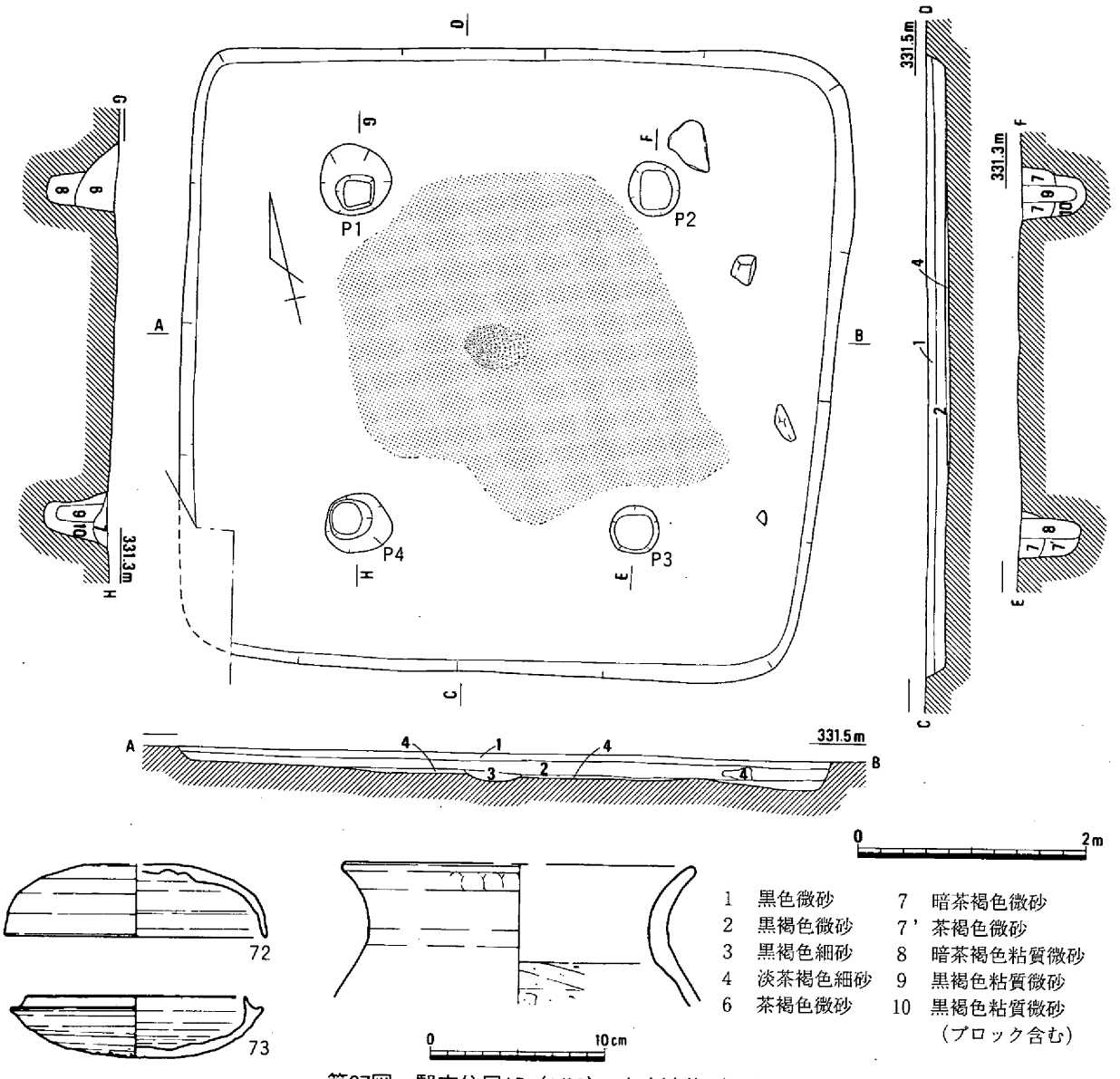
ｍで竪穴住居13の床面より20cm程高くなっている。床面および側溝中において６・７本の柱穴状の遺構が検出されているが、壁から110～120cm程内側に位置するＰ１・Ｐ２・Ｐ３が主柱穴と考えられる。これらの柱穴の規模は、直径35cm前後で、床面からの深さは30～40cmを測る。また、この柱穴の内側を中心とした床面の中央部は堅く叩き締められている。覆土は二層あり、上層の４層は黒色微砂が、下層の５層には黒色細砂が堆積している。なお、床面では建築材とみられる炭化物が、中心部から放射状に検出されていることから焼失住居が考えられる。

遺物は、須恵器などの土器片が出土しているほか、鏡形土製品が覆土中から出土している。69・70は須恵器の杯蓋・杯身で、黄灰色を呈し焼成は良好である。70の外面には釉の付着が認められる。71は土師器の口縁片で褐色を呈し焼成は良好である。いずれの土器も細片で口径は不明である。Ｃ５の鏡形土製品はにぶい黄橙色を呈し、表面の上半部に黒斑が認められる。下半の一部が欠損している。

時期は、出土遺物などから６世紀後半と考えられる。

竪穴住居15（第27図、図版５－３）

Ｋ区のほぼ中央部において、竪穴住居16から東２ｍ、竪穴住居17から４ｍ程南に検出された遺構で、南西角の一部が後世の削平を受けているものの、ほぼ全体の検出ができた竪穴住居である。一辺5.5ｍ程の規模で隅丸方形の平面形を呈するもののやや歪である。検出面から床面までの深さは20cm程を測り、覆土は二層に分かれる。上層の１層は黒色微砂、下層の２層は黒褐色微砂でいずれも炭を含んでいる。床面の高さは、竪穴住居17の床面とほぼ同様の海抜331.2ｍを測る。壁から100～120cm程内側の床面において主柱穴と考えられる４本の柱穴が検出されている。これらの柱穴の規模は、直径45



第27図　竪穴住居15（1/60）・出土遺物（1/4）

～50cmで、床面からの深さはいずれも60cm程を測る。また、この柱穴の内側を中心とした床面の中央部は堅く叩き締められ、中心にある40×60cm程の浅い窪みに焼土の散布が確認されている。なお、Ｐ２の北東側においては、30×40cm程の三角形状を呈する厚さ約20cmを測る半花崗岩製の作業台とみられる石が検出されている。

遺物としては、ほぼ完形に復元されたの杯身を含む須恵器のほか土師器などの土器がある。72は覆土中から73は南東部の床面などから出土した須恵器の杯蓋と杯身で、灰色を呈している。74は覆土中から出土した土師器の甕片で赤褐色を呈し焼成は良好である。

時期は、出土遺物などから６世紀後半と考えられる。

竪穴住居－16（第28図）

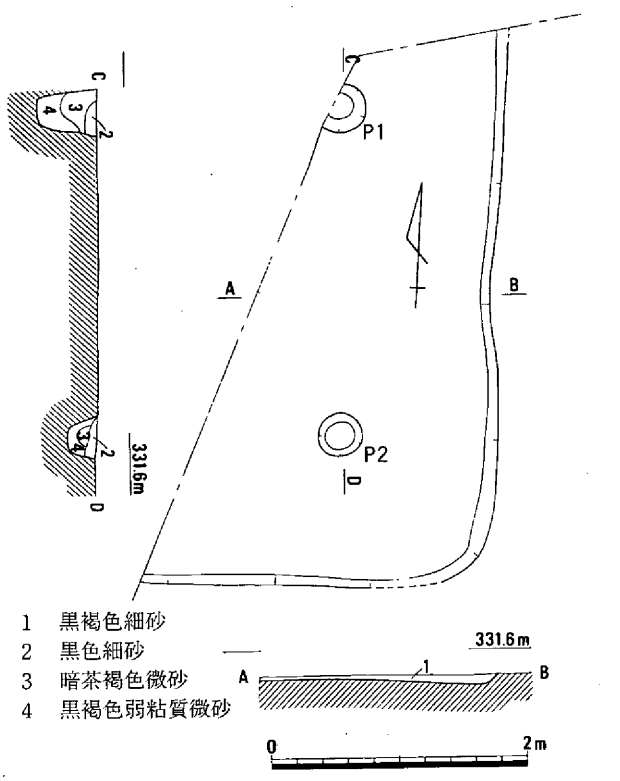
Ｋ区の中央部西端、竪穴住居15の西2.5m、竪穴住居18から５m程南において検出された遺構である。西側５分の３は用地外におよんでいるが、一辺５m程の隅丸方形もしくは隅丸長方形の竪穴住居が想定される。床面の高さは海抜331.4mを測り、周りの竪穴住居より一段高い。壁から100cm程内側

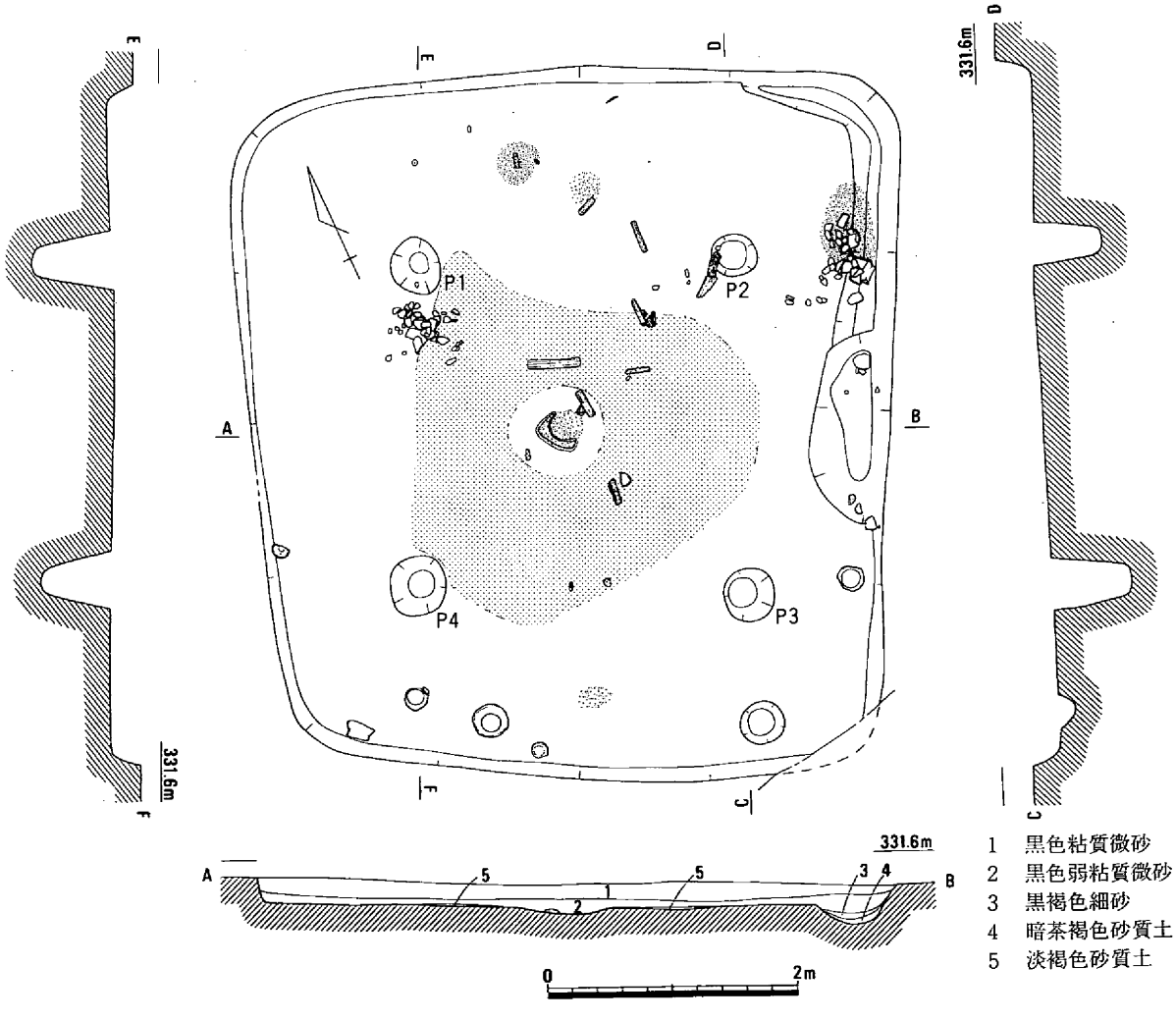
の床面において直径30cm程の柱穴が２本検出された。床面からの深さは、Ｐ１は50cmを測るが、Ｐ２は30cmとやや浅い。

遺物は、土師器の細片が出土しているのみで時期も明らかでないが、検出状況などから古墳時代後期と考えられる。

竪穴住居17（第28・29図、図版６－１～４）

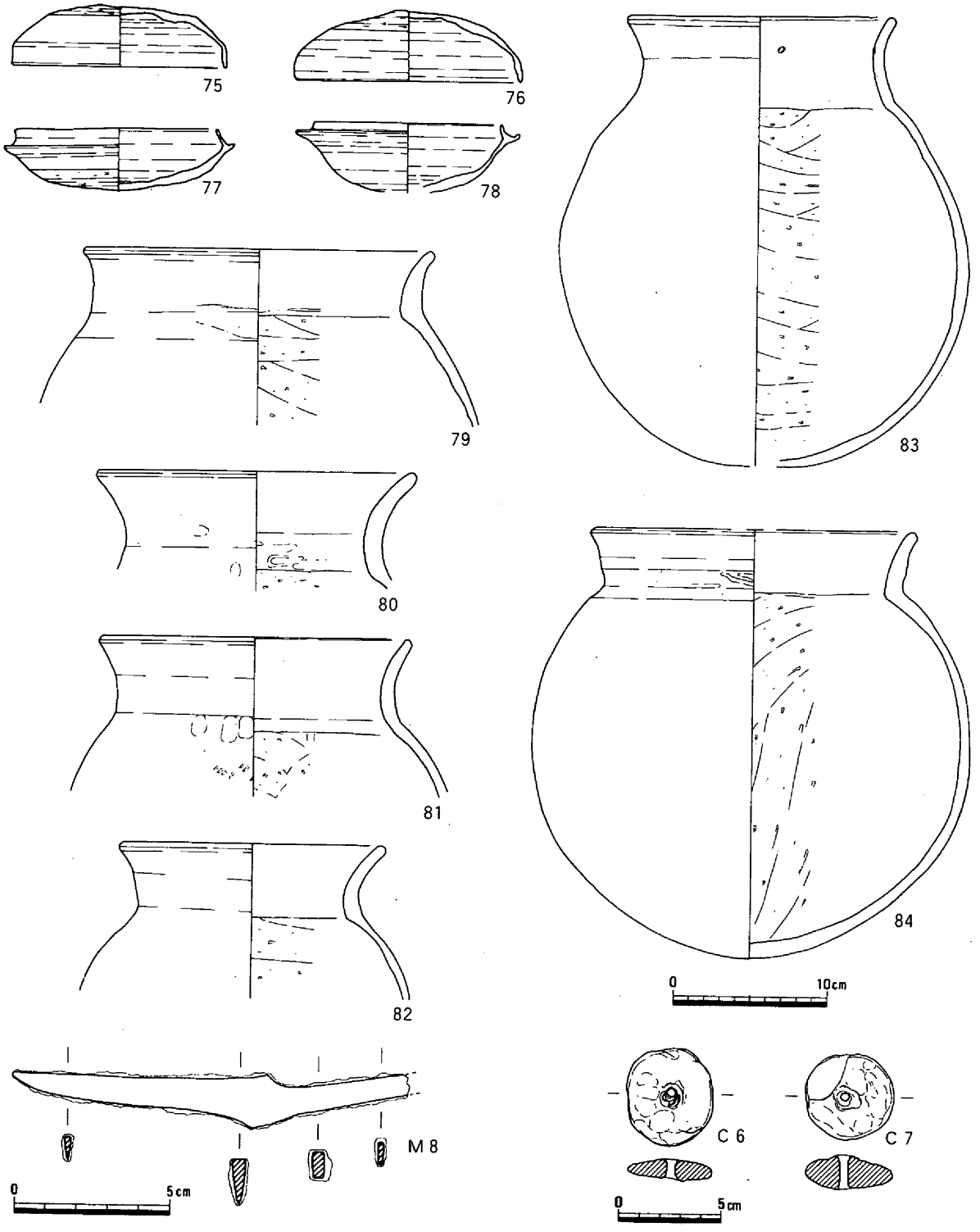
Ｋ区の中央部北端の竪穴住居15から北４ｍ、竪穴住居18の東２ｍ程において検出された遺構で、南の角を側溝で削平したものの、遺構全体が検出できた竪穴住居である。規模は、南北5.75ｍで、東西は北辺側が5.35ｍ・南辺側が4.8ｍ程を測り、やや歪な隅丸台形状を呈する。検出面から床面までの深さは25cm前後を測り、床面の高さは竪穴住居15の床面とほぼ同様の海抜





第28図　竪穴住居16・17（1/60）

331.2ｍである。覆土は二層あり、１層に黒色粘質微砂が２層に黒色弱粘質微砂が堆積し、２層には炭が多く含まれている。なお、床面の焼土や炭化材の散布状況などから焼失住居と見られる。壁から100～120㎝程内側の床面において主柱穴と考えられる４本の柱穴が検出されている。これらの柱穴の規模は、直径35～50㎝で、床面からの深さは55～70㎝程を測る。出入り口の想定される東辺の壁際中央部には150×60㎝程の規模で、深さ15㎝程の土壙が設けられ、ここから北東角には幅70㎝・深さ８

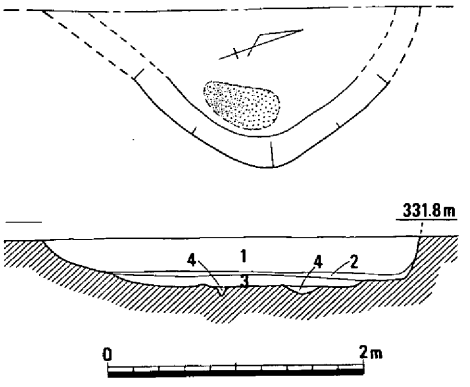


第29図　竪穴住居17出土遺物（1/4・1/2・1/3）

cm程の溝が壁に沿って検出されている。柱穴の内側を中心とした床面の中央部は堅く叩き締められ、中心にある30×40cm程の浅い窪みに炉壁状の塊を含む焼土の散布が認められる。

出土遺物としては、ほぼ完形の杯身を含む須恵器や土師器などの土器のほか、刀子や土製の紡錘車がある。75は西壁際の77は南壁際の床面から出土した須恵器の杯蓋と杯身で黄灰色を呈し焼成は良好である。79・81・82は南西部の壁際付近から80・83は東辺の土壙および溝上面から、84はＰ１南側のいずれも床面で出土した土師器の甕で口縁端部が緩やかに外反している。81がにぶい黄橙色、83の外面が褐色を呈するほかは赤褐色を呈し、焼成は良好である。Ｍ８は北辺中央部の壁際付近の床面において出土した鉄製の刀子で、関から外反りで柄が取り付いている。柄頭を欠くが切部長８cmを測る。Ｃ６・Ｃ７は北辺西よりの床面から出土した土製の紡錘車で灰黄褐色を呈している。

時期は、出土遺物などから６世紀後半と考えられる。



第30図　竪穴住居18（1/60）

1　黒色弱粘質微砂　3　黒色粘質微砂
2　黄褐色粘質微砂　4　茶褐色細砂

竪穴住居18（第30図、図版７－１）

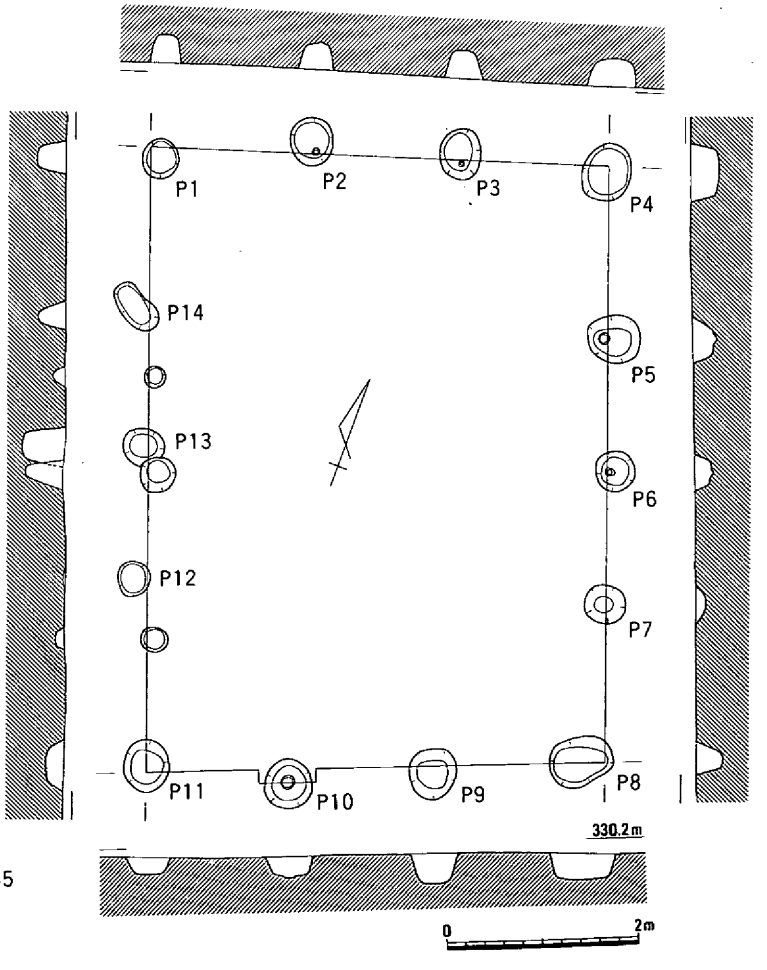
Ｋ区の北西端部、竪穴住居15の西２ｍ、竪穴住居16から５ｍ程北において検出された遺構であるが、大半が用地外のため規模などは不明なものである。床面は海抜331.35ｍ程を測る２層の黄褐色土を含む黒色粘質微砂と考えられ、竪穴住居15より一段高い。

床面において焼土が検出されているのみで時期も明らかでないが、検出状況などから古墳時代後期と考えられる。

２　建物

建物１（第31図、図版７－２）

Ｃ区の南部中央付近において検出された遺構で、竪穴住居５の西1.5ｍ・竪穴住居４の東3.5ｍに位置し、14本の柱で構成される４×３間の掘立柱建物である。



第31図　建物１（1/80）・出土遺物（1/4）

桁行は6.4ｍ・

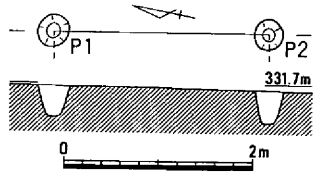
梁間は4.8ｍの規模であるが、柱間は130cm前後を測り均等ではない。柱穴は直径50cm程の円もしくは楕円の平面形で、埋土は黒褐色粘質土である。検出面からの深さは、10～40cmと様々で柱穴の底の高さは330.0～329.8ｍを測る。なお、Ｐ５・10などでは直径25cm程の柱痕が確認されており、同規模の柱材を使用した掘立柱建物が推定される。建物の軸線は南ー北方向から約20°西に振っており、周囲の竪穴住居の方向に沿って建てられたものと考えられる。遺物は、Ｐ２・10・14から土師器の細片が、Ｐ３から灰色を呈する須恵器の口縁部片85が出土しているのみである。

時期は、出土遺物などから６世紀後半と考えられる。

建物２（第32図）

Ｌ区の北西端において柱穴が２本並んで検出された遺構で、調査区外に続く掘立柱建物が想定される。検出された柱穴は直径35cm程の円形で、検出面からの深さは34cmを測り、暗茶褐色粘質微砂が堆積している。両者の柱間は約200cmで、軸線は南ー北方向から10°程西に振っている。

遺物は、Ｐ１から土師器が出土しているが細片で、時期は判然としない。検出状況などから奈良時代まで下がる可能性がある。

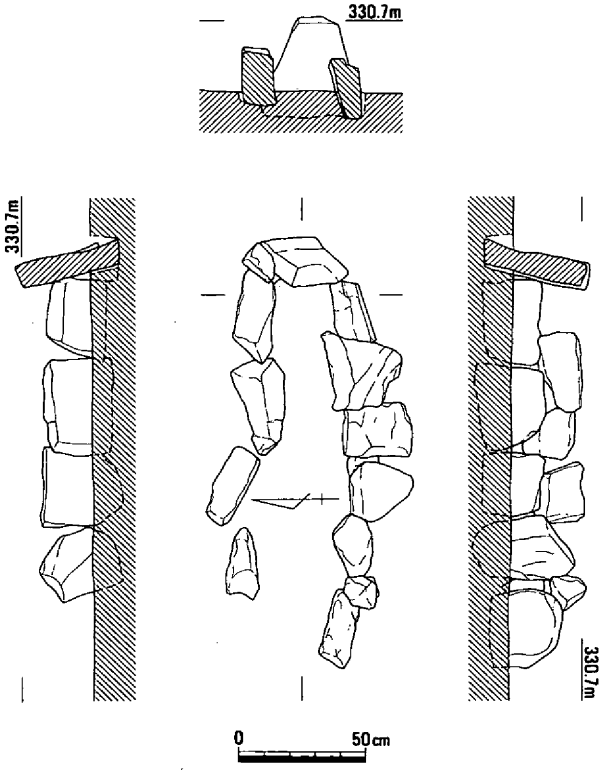


第32図　建物２（1/80）

３　石棺墓

石棺墓１（第33図、図版８－１）

Ｅ区の北東部、竪穴住居10の南西部において検出された遺構で、竪穴住居10の埋没後に構築された石棺墓と考えられる。上面および西部は後世の削平が著しく詳細は不明であるが、幅25cmで長さ150cm以上の規模が想定され、石棺の軸線はほぼ東ー西方向である。東小口は、長さ40cm・幅30cm・厚さ10cm程の石１石を縦に据えている。南側壁は、基底部で５石を内彎気味に並べている。東から３石までは長さ30cm程の石を横に据え、その上に厚さ15cm程の石を載せ、４石目は長さ40cm程の石を縦に据えて、海抜330.4ｍ程の床面からの高さを小口側と合わせている。北側壁は、4石遺存しているのみで、西側の２石はやや移動しているものとみられる。東から２石は長さ30cmと40cm程の石を直線的に横に据えているが、上に載せ高さを合わせたとみられる石は残っていない。石材の大半はアプライトであるが、流紋岩や黒色安山岩も使われている。なお、西側の小口石や天井石も遺存しておらず、床面や暗黒灰褐色粘質土の埋土中において遺物などは全く出土していないが、検出状況などから箱式石棺状の構築物が考えられる。



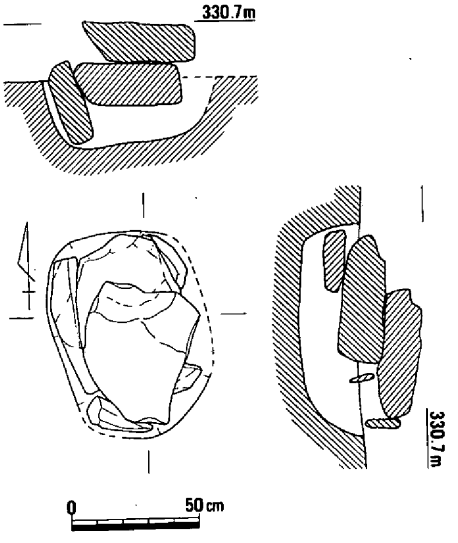
第33図　石棺墓１（1/30）

時期は、竪穴住居10の埋没後につくられて

いることから７世紀初頭以降である。

石棺墓２（第34図、図版８－２～４）

Ｅ区の北東部、竪穴住居10の西部北端で石棺墓１から2.5ｍ程北において、竪穴住居10の埋没後に構築された遺構である。上面が削平されているため判然としないが、南北80cm・東西60cm程のやや歪な楕円形で、検出面からの深さ約25cmを測る土壙の壁に石を立て掛け、その上を蓋石で覆っている。西側壁には長さ50cm・幅30cm・厚さ10cm程の板石を横に据えているが、南壁および北東壁には蓋石を支えるように石を立て掛けている。その上に長さ50cm・幅30cm程で、厚さ10～15cmの石を重ねて載せられ、床面まで10数cmの非常に狭い空間がつくられているのみである。石材の大半は、アプライトであるが、流紋岩や黒色安山岩もみられる。暗黒灰褐色粘質土の埋土中において遺物などはなく性格は不明なものであるが、小児用などの石棺墓が想定される。



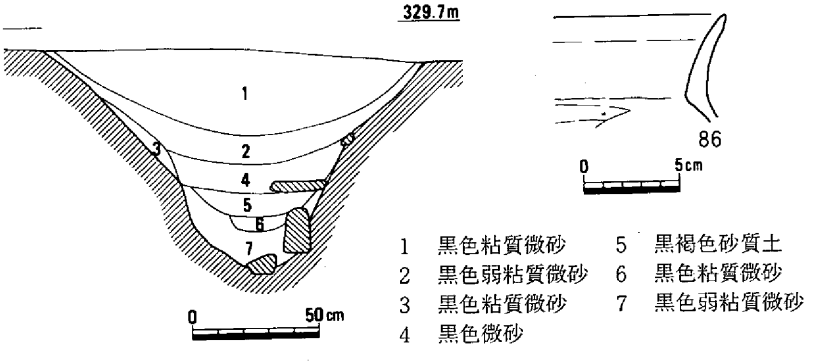
第34図　石棺墓２（1/30）

時期は、検出状況などから７世紀初頭以降と考えられる。

４　溝

溝１（第35図、図版９－３）

Ａ区の中央部において検出された遺構で、遺跡の南端肩部に沿うように流路をとる溝である。規模は、肩部が後世の削平を受けているものの幅300cm・深さ95cm以上を測り、断面は「Ｖ」字に近い形状を呈している。なお、溝の底の高さは、東側で海抜328.9ｍ・西側で328.5ｍ程で、ほぼ東から西に向かって流走するものと推定される。埋土は、黒色粘質微砂がレンズ状に堆積しているが、下層の５～７層を中心に大小の礫が非常に多く埋没している。　埋土中からは、土器の細片が若干出土しているのみである。86は上層から出土した土師器で明黄褐色を呈し焼成は良好であるが、細片で口径は不明である。

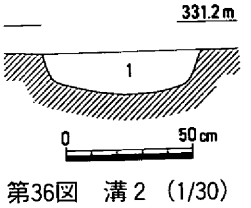


第35図　溝１（1/30）・出土遺物（1/4）

時期は、下層などに遺物がないため明確ではないが、検出状況などから古墳時代後期と考えられる。

溝２（第36図、図版10－１）

Ｉ区の南半において検出された遺構で、東－西方向で直線的に流路をとる溝である。上面は削平されていると見られるが、最も遺存しているところで幅90cm・深さ30cmを測り、断面は皿状を呈する。溝の底の高さは、概ね海抜330.9ｍ前後で顕著な差異は認められず、流走方向は不明である。埋土は黒色粘質微砂が一層で、遺物は出土していない。



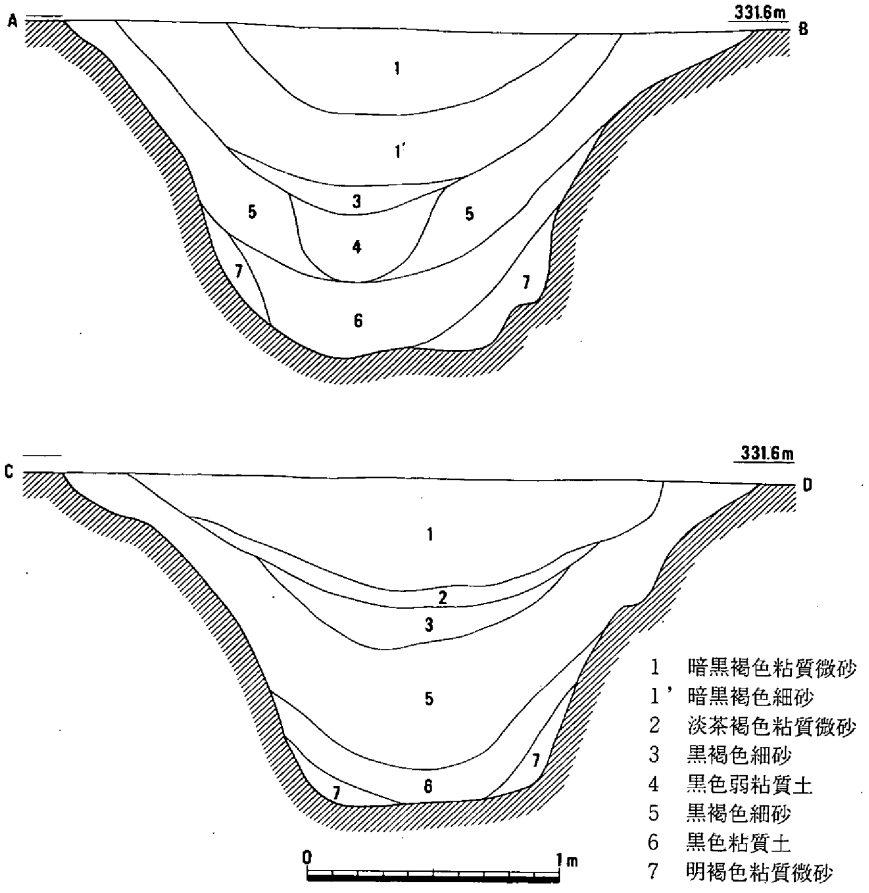
第36図　溝２（1/30）

時期は、出土遺物がないため明確ではないが、竪穴住居13がこの溝の

埋没後に建てられていることから、６世紀後半以前のそう遠くない時期が推定される。

溝３（第37～39図、図版10－２・３）

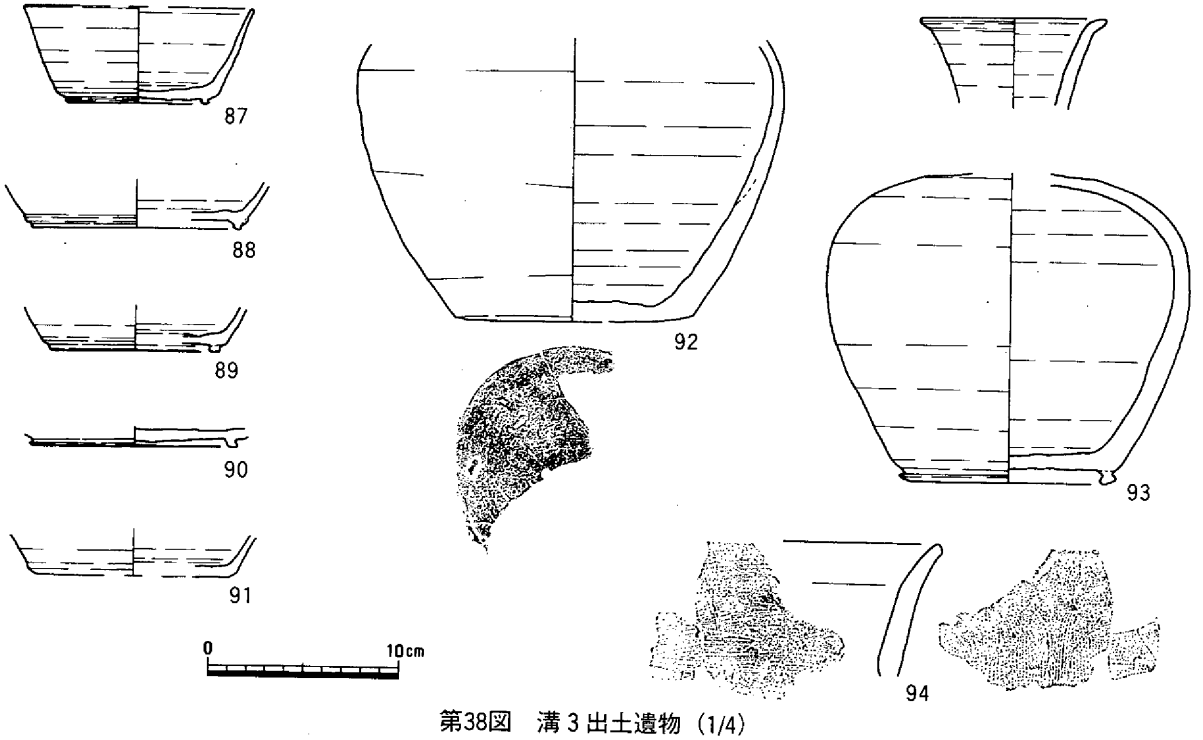
Ｋ区からＬ区にかけての中央やや東寄りにおいて検出された遺構で、ほぼ南－北方向に直線的な流路をもつ溝である。規模は、幅250～350cm・深さ150cm程を測り、南へ行くに従って次第に幅が広くなっている。断面は、北部でやや緩やかに立ち上がる「Ｕ」字形を呈しているが、南部ではその立ち上がりがかなり緩やかなものになっている。



第37図　溝３（1/30）

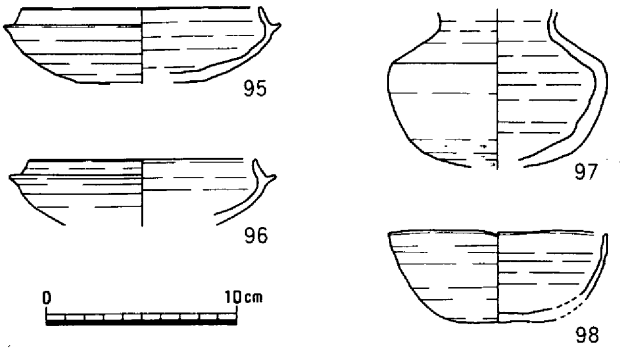
溝の底の高さは、海抜330.1～330.2mで顕著な差はないが、北から南への流走が推定される。

埋土は、一部にブロック状の土が認められるが、上層・下層とも黒色土および黒褐色土などがレン



第38図　溝３出土遺物（1/4）

ズ状に堆積している。なお、上層（１～３層）の埋土中からは、６世紀後半の須恵器を中心に古墳時代後期の土器が認められる。また、南部のかなり広い範囲で確認された２層の淡茶褐色粘質微砂は、竪穴住居床面の土に類似しているもので、これら上層は二次堆積の要素が強い。



第39図　溝３上層出土遺物（1/4）

遺物は、溝の底を含め下層からも多くの須恵器などの土器が出土している。87～90は灰色を呈する高台付きの須恵器の杯身、91は灰黄色を呈する土師器の皿で、焼成は良好であるがいづれも細片である。92は須恵器の壺で、底には「大井□」の文字がヘラ描きされている。色調は灰色を呈するが、一部に自然釉がかかり焼成は良好である。93は須恵器の長頸壺で、底部に高台が貼り付けられている。灰色を呈し焼成は良好である。94は外面に粗い花文状の線刻が施され、内面にも線刻が認められる土師器の甕の口縁部片で、にぶい黄橙色を呈し焼成は良好である。

この遺構は、検出状況などから「堀」状の溝が想定されるものの、全体の状況は不明である。時期は、出土遺物などから奈良時代後半頃と考えられる。なお、上層から出土した須恵器のうち95・96は杯身、98は歪んだ椀でいづれも灰色を呈し焼成は良好である。また、97は壺または瓶とみられ褐灰色を呈している。

溝４（第40図、図版11－１）

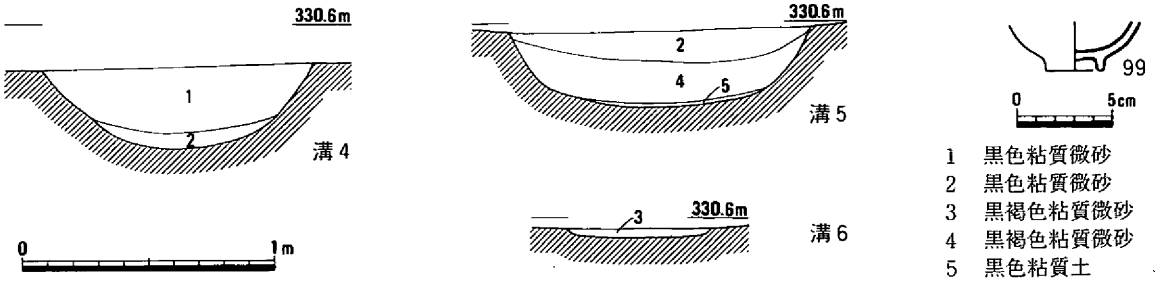
Ｇ区の南半において検出された南東から北西方向にやや湾曲して流走している溝である。規模は、幅130cm・深さ35cmを測り、断面は皿状を呈する。溝の底の高さは海抜330.1ｍ程で、埋土は黒色粘質微砂が、底部には粘質が強い土が堆積している。

遺物としては、陶磁器の細片が若干出土しているのみで、99は18世紀前葉から中葉の肥前系の白磁もしくは染付の底部片である。時期は、出土遺物などから18世紀中葉以降と考えられる。

溝５（第40図、図版11－２）

Ｇ区の南半部、溝４の北５ｍ程において検出された遺構であるが、後世の削平により僅か60cm程を確認したのみで詳細は不明である。検出状況などから幅110cm・深さ30cm程の東－西方向に流路をとる溝が想定される。断面は皿状を呈し、溝の底の高さは海抜330.3ｍ程である。埋土は上層に黒色粘質微砂が、下層に黒褐色粘質微砂がレンズ状に堆積し、底部付近は粘質が強くなっている。

遺物がなく時期などは不明であるが、検出状況などから、溝４に近い時期が想定される。



第40図　溝４・５・６（1/30）・溝４出土遺物（1/4）

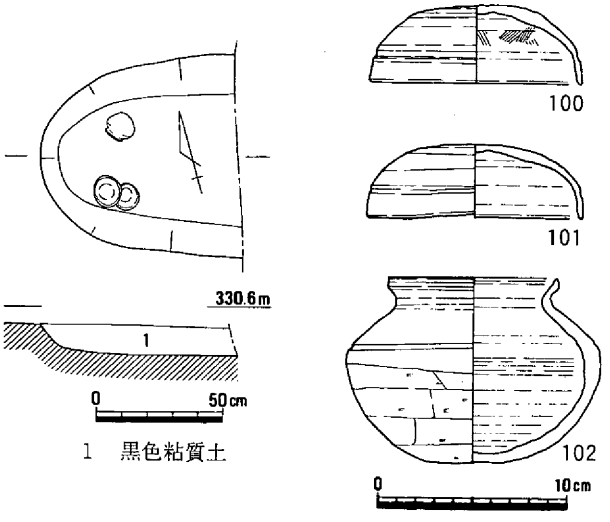
溝６（第40図、図版10－４）

Ｇ区の中央西部において、溝４に沿うように検出された遺構である。大半は削平され、幅60cm・深さ５cm程の東－西方向に流路をもつ溝の底部が想定される。溝の底は海抜330.5m程で溝４より40cm程高くなっている。時期は、近世と考えられるが、遺物がなく詳細は不明である。

５　土壙

土壙１（第41図、図版９－１）

Ｅ区の中央部やや北寄りで、竪穴住居10の北西部において検出された遺構であるが、東部が竪穴住居により削平されているため詳細は不明である。遺存しているのは、幅80cm・長さ80cm程の半楕円形であるが、楕円もしくは長楕円の平面形を呈する土壙が想定される。検出面から底面までの深さは10数cmを測り、ほぼ平坦な底の高さは、海抜330.4m程である。埋土には黒色粘質土一層が埋積し、西端近くの底面では完形の須恵器３点が出土している。100・101はいづれも完形の須恵器の杯蓋で、灰色を呈し焼成は良好であるが、101の口縁部はかなり歪んでいる。102は口縁端部を少し上方につまみあげているほぼ完形の須恵器の壺で、肩部に沈線が１条巡っている。灰色を呈し、焼成は良好である。



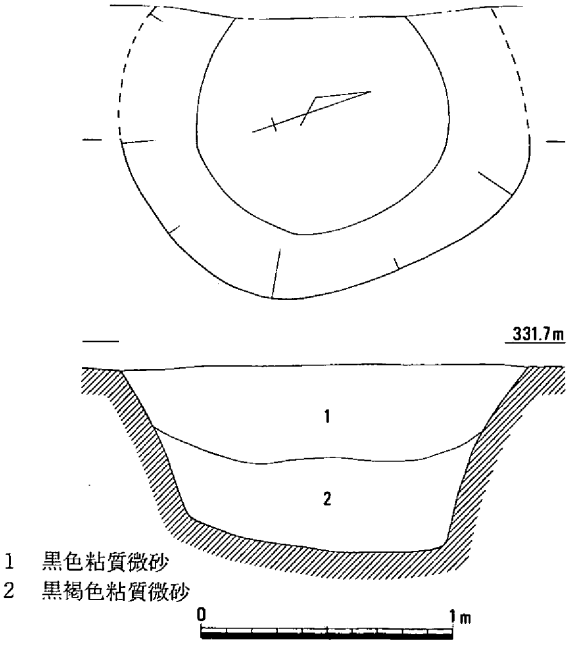
第41図　土壙１（1/30）・出土遺物（1/4）

この土壙は、検出状況などから土壙墓の可能性も考えられるもので、時期は、出土遺物などから竪穴住居10に先行する６世紀後半と考えられる。

土壙２（第42図）

Ｋ区の北部西端において検出された遺構で、竪穴住居16の北１m、竪穴住居18の南２mに位置している。遺構の西部は調査区外におよぶものの、直径150cm程の不正円の平面形が想定される。また、上面も後世の削平を受けているが、検出面からの深さは75cmを測る土壙で、ほぼ平坦な底面の高さは海抜330.9m程である。埋土は上層に黒色粘質微砂が、下層に黒褐色粘質微砂が埋積している。井戸などが想定される形状を呈しているが、水などを溜めていた様子はなく、性格は不明である。

出土遺物がないため詳細な時期は不明であるが、検出状況などから古墳時代後期から奈良時代頃ではないかと考えられる。

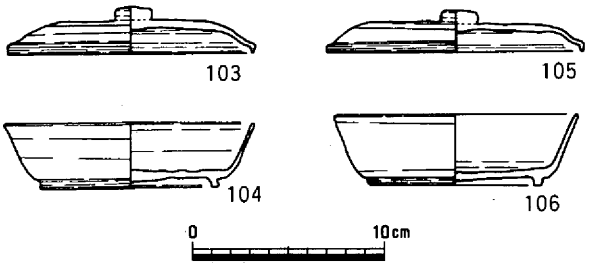


第42図　土壙２（1/30）

土壙３（第43図）

Ｌ区の北西端において検出された遺構で、建物２

の北１ｍに位置している。遺構の大部分は削平され、僅かに床面の一部が遺存しているのみで、規模や形状などは不明な土壙である。海抜331.7ｍ程の底面に杯蓋が置かれ、その上に杯身を被せた状態で２組の須恵器が出土している。埋土は、暗褐灰色粘質微砂が確認されているのみである。遺物は、103と104、105と106がそれぞれセットで出土している。いづれもほぼ完形で、杯蓋の摘みは少し扁平になっている。杯身は高台が貼り付けられ、口径は13cm弱である。なお、103・104の口縁部付近には一部自然釉が認められる。色調は、103が灰黄褐色、104が灰色、105が黄灰色、106が灰黄色を呈し焼成は良好である。



第43図　土壙３出土遺物（1/4）

時期は、出土遺物から奈良時代後半と考えられる。

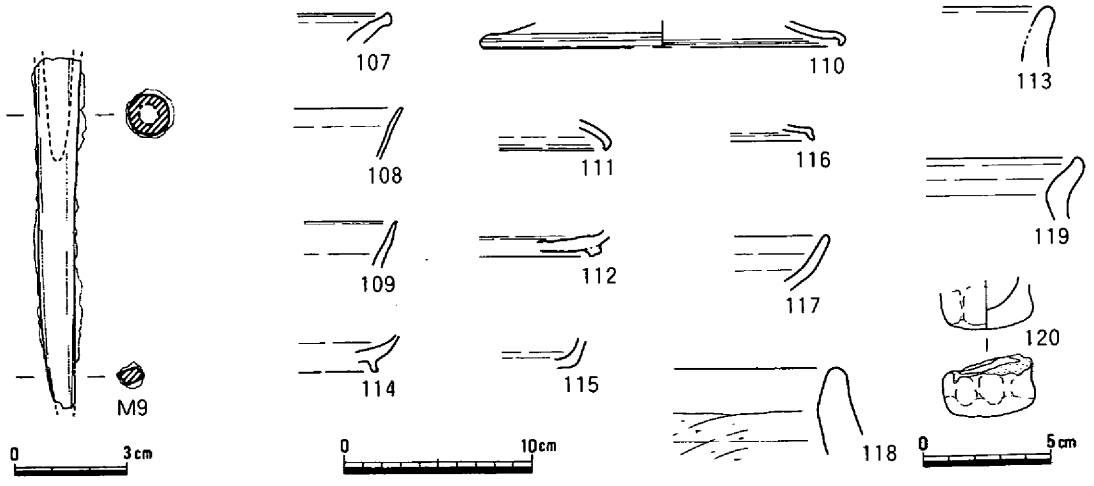
6　柱穴

下湯原Ｂ遺跡の発掘調査では、竪穴住居・建物などに伴わない柱穴が数多く検出されている。これらの中には、今回の調査ではまとめることのできなかった建物や、竪穴住居の上面が削平され、柱穴の一部のみが遺存して検出されたものなどが含まれるが、位置的に比較的集中して検出されているものについて柱穴群としている。

柱穴１群（第44図）

Ｂ区において竪穴住居２～４に囲まれた範囲に100本以上の柱穴が検出された柱穴群である。このうちＰ１は径40cm・深さ25cmで土師器の口縁片107が、Ｐ２は径40cm・深さ25cmで須恵器の口縁片108が、Ｐ３は径45cm・深さ25cmで須恵器の口縁片109が出土している。埋土はいずれも黒色粘質微砂で、柱穴の底の高さは海抜329.8ｍ前後である。時期は、古墳時代後期頃と考えられる。

Ｐ４は径28cm・深さ25cmで須恵器の杯蓋片110が、Ｐ５は径30cm・深さ20cmで須恵器の杯蓋片111が、Ｐ６は径30cm・深さ20cmで須恵器の杯身片112と用途不明な鉄片Ｍ９が出土している。また、Ｐ７は径25cm・深さ25cmで土師器の口縁片113が出土している。埋土はいずれも黒色粘質微砂で、柱穴の底の高さは海抜329.8～329.9ｍである。時期は、奈良時代後半頃と考えられる。

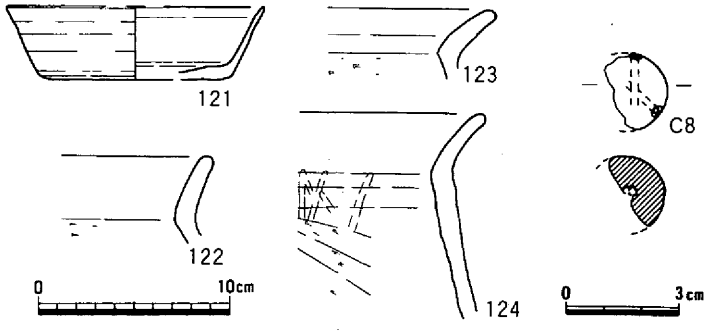


第44図　柱穴１・２群出土遺物（1/2・1/4・1/3）

柱穴２群（第44図）

Ｃ区の建物１周辺からＤ区北東部の竪穴住居９にかけて100本近くの柱穴が検出されている。このうちＰ８は建物１の柱穴Ｐ13を切って検出されたもので、径40cm・深さ40cmを測り、須恵器の底部片114が出土している。Ｐ９は建物１の南側で検出され、径45cm・深さ20cmを測り、土師器の底部片115が、Ｐ10は建物１の西側で検出され、径40cm・深さ20cmを測り、土師器の口縁部片117・118が出土している。Ｐ11は竪穴住居９の南辺を切って検出された柱穴で、径35cm・深さ35cmを測り、土師器の口縁部片119と120が出土している。埋土はいずれも黒色粘質微砂で、柱穴の底の高さはＰ８が海抜329.6m、Ｐ９・10が海抜329.8m程である。また、Ｐ11は海抜330.0mである。

時期は、奈良時代後半頃と考えられる。



第45図　柱穴３群出土遺物（1/4・1/2）

柱穴３群（第45図）

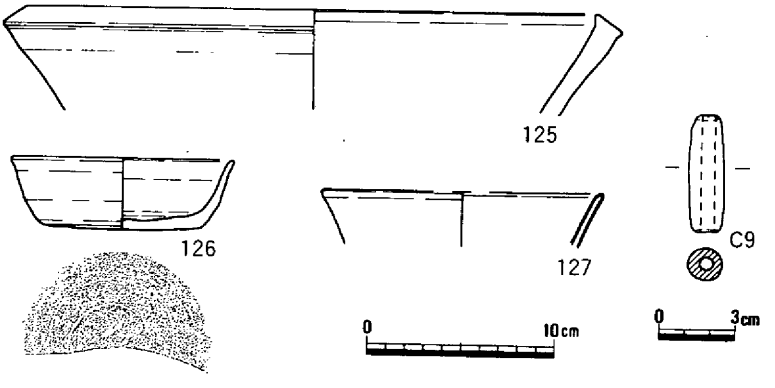
Ｆ区の南西部を中心に40本ほどの柱穴が検出されているものの、後世の削平が著しく遺存していない柱穴がかなりあると考えられる。Ｐ12は径50cm・深さ25cmで土師器の口縁片124が、Ｐ13は径40cm・深さ20cmで土師器の口縁片122が出土している。Ｐ14は径30cm・深さ15cmで、半分程欠損した練玉Ｃ８が出土している。この練玉は、２方向からの穿孔が認められる。Ｐ15は径40cm・深さ50cmで土師器の口縁片123が出土している。埋土はいずれも黒色粘質微砂で、柱穴の底の高さはＰ12～Ｐ14が海抜330.2m前後、Ｐ15が海抜330.１mである。

Ｐ16はＦ区の南西端で検出された柱穴で、径30cm・深さ20cmを測り、須恵質の杯身片121が出土している。埋土は黒色粘質微砂で、柱穴の底の高さは海抜330.3mである。

時期は、古代末から中世初頭頃と考えられる。

柱穴４・５群（第46図）

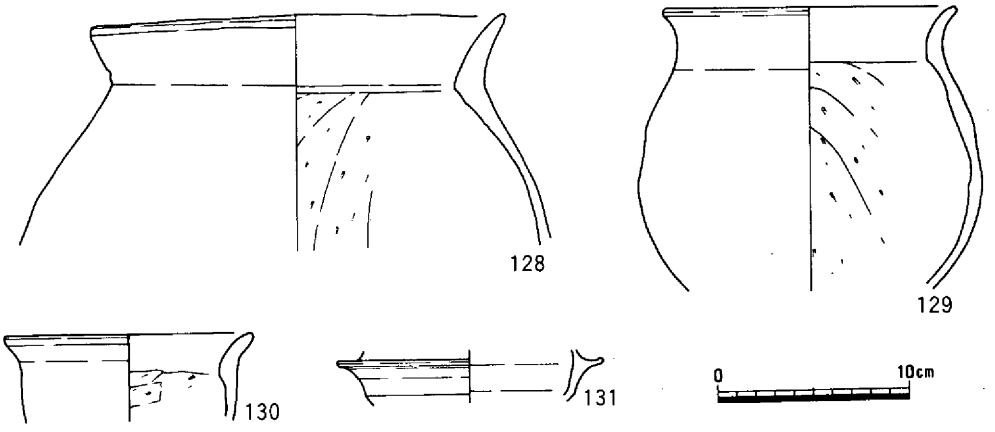
柱穴４群では、Ｇ区の北部を中心に50本以上の柱穴が検出されている。後世の攪乱によりかなりの遺構が削平されていると考えられる。Ｐ17は径30cm・深さ25cm程の規模で土錘Ｃ９が、Ｐ18は径35cm・深さ30cm程の規模で、青磁碗の口縁片127が出土している。埋土は黒色粘質微砂で、柱穴の底の高さは海抜330.4mである。時期は、出土遺物から中世と考えられる。



第46図　柱穴４・５群出土遺物（1/4・1/3）

柱穴５群では、Ｈ区の中央部を中心に50本程の柱穴が検出されている。Ｐ19は径35cm・深さ35cm程の規模で、黒色粘質微砂が埋積し、埋土中から土師質の擂り鉢

125・須恵器の杯身126などの土器片が出土している。時期は、中世初頭頃と考えられる。



第47図　土器溜まり１出土遺物（1/4）

7　土器溜まり

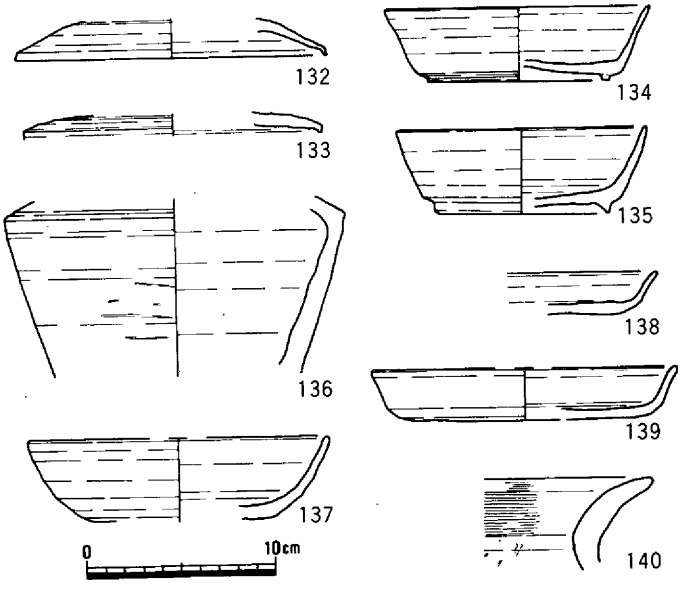
土器溜まり１（第47図）

Ｈ区の中央部やや南よりで海抜330.9ｍ前後の遺構検出面において、150×100cm程の範囲に土器がまとまって出土している遺構である。128～130は土師器の甕で、体部内面はヘラケズリ、外面は工具ナデにより仕上げられている。色調は128・129が明赤褐色を、130にぶい黄褐色を呈し、焼成は良好である。129の外面には煤の付着が認められる。131は須恵器の杯身であるが細片で径などは推定である。灰色を呈し、焼成は良好である。

時期は、いずれも古墳時代後期である。

土器溜まり２（第48図）

Ｄ区の北西部に位置する、竪穴住居９南部上面に堆積している黒色粘質土中から古代の土器がまとまって出土している。132・133は杯蓋、134・135・137は杯身、136は壺の体部、138は皿状を呈するいずれも須恵器片で、灰色もしくは灰黄色を呈し、焼成は良好である。139は土師皿、140は土師甕の口縁部片で、橙色を呈し焼成は良好である。

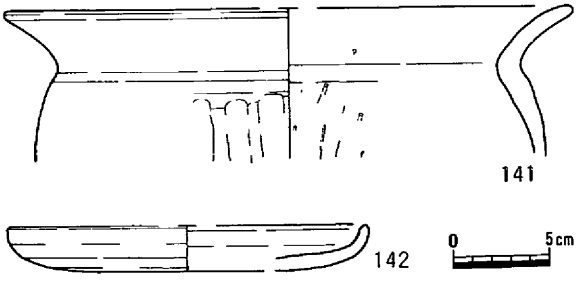


第48図　土器溜まり２出土遺物（1/4）

時期は、出土遺物などから奈良時代後半頃と考えられる。

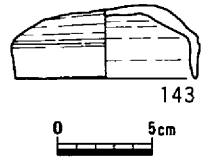
土器溜まり３（第49図）

Ｃ区北東部で、竪穴住居６と７の間において60×50cm程の範囲に数点の土器片がまとまって出土している遺構である。141は土師器の甕片で、体部内面はヘラケズリ、外面は工具ナデされている。にぶい褐色を呈し、外面に煤の付着が認められる。焼成は良好である。142は土師皿片とみられ、明赤褐色を呈し、焼成は良好である。時期は、出土遺物などから奈良時代後半頃と考えられる。



第49図　土器溜まり３出土遺物（1/4）

8　その他の遺構

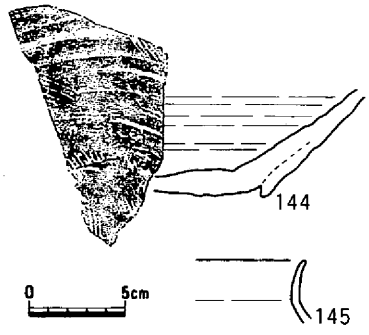


第50図　落ち込み出土遺物（1/4）

落ち込み（第50図）

Ｃ区の西端からＤ区の北東部にかけて、南東側が15～20cm程低くなる段差が確認されている。性格などは不明であるが、この下がりの堆積土中から若干の土器片が出土している。143は口径9.5cmを測るほぼ完形の須恵器の杯蓋で、色調は灰色を呈し一部に自然釉が認められる。

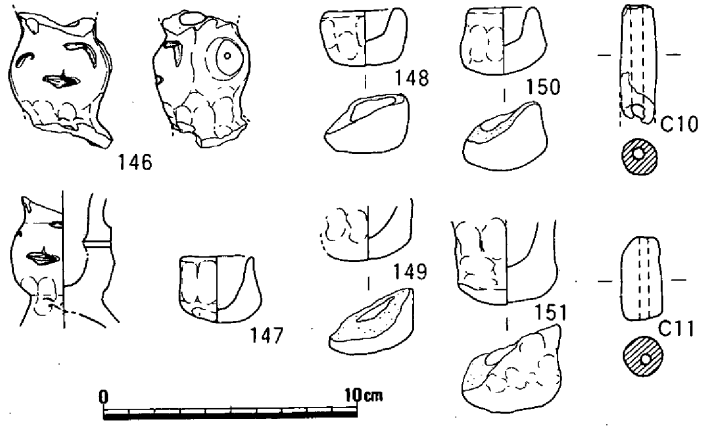
時期は、古墳時代後半である。

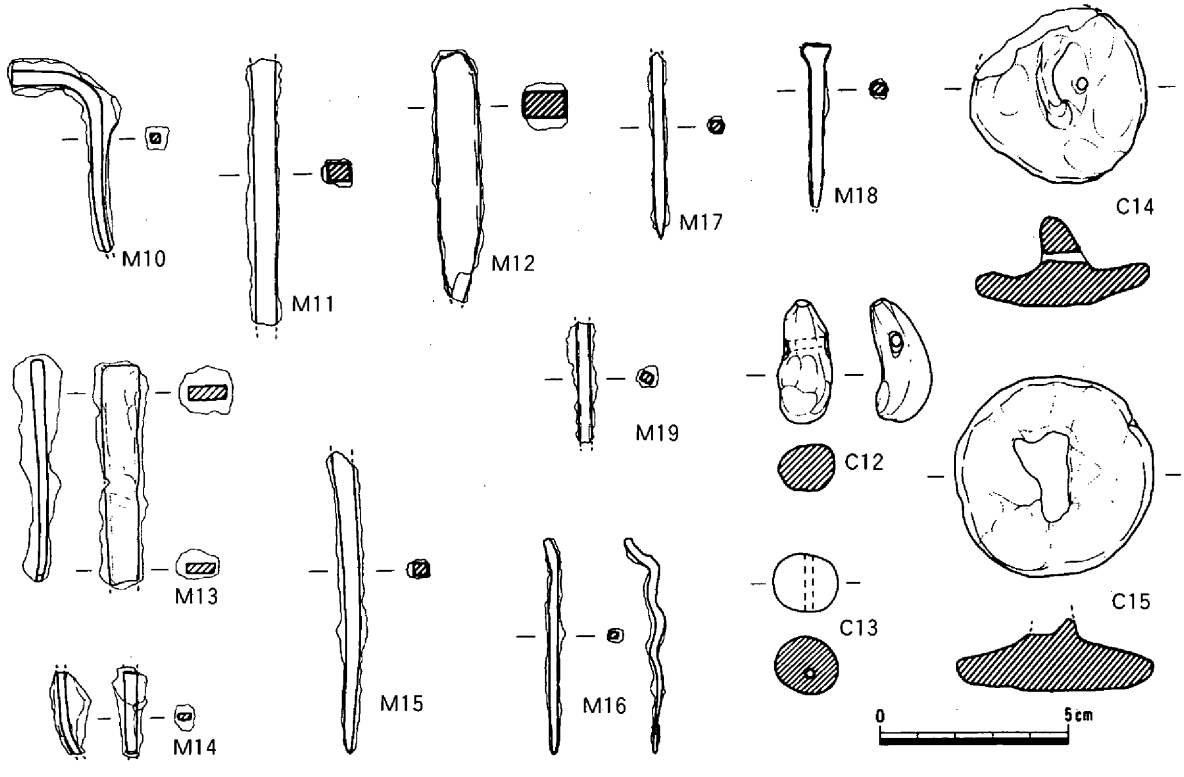


第51図　斜面堆積出土遺物（1/4）

斜面堆積（第51図）

Ａ区の中央付近から南は、遺構面が次第に削平されている斜面で、Ａ区南端部より南側は急激に基盤層が落ち込む遺跡の端部が確認されている。この斜面の堆積土からは、若干の土器片が出土している。144は中世後半期と考えられる備前焼の擂り鉢片であるが、内面は非常によく摩耗し、砥石に転用していたと考えられる。また、145は黄灰色を呈する須恵器の口縁部片で、焼成はいずれも良好である。

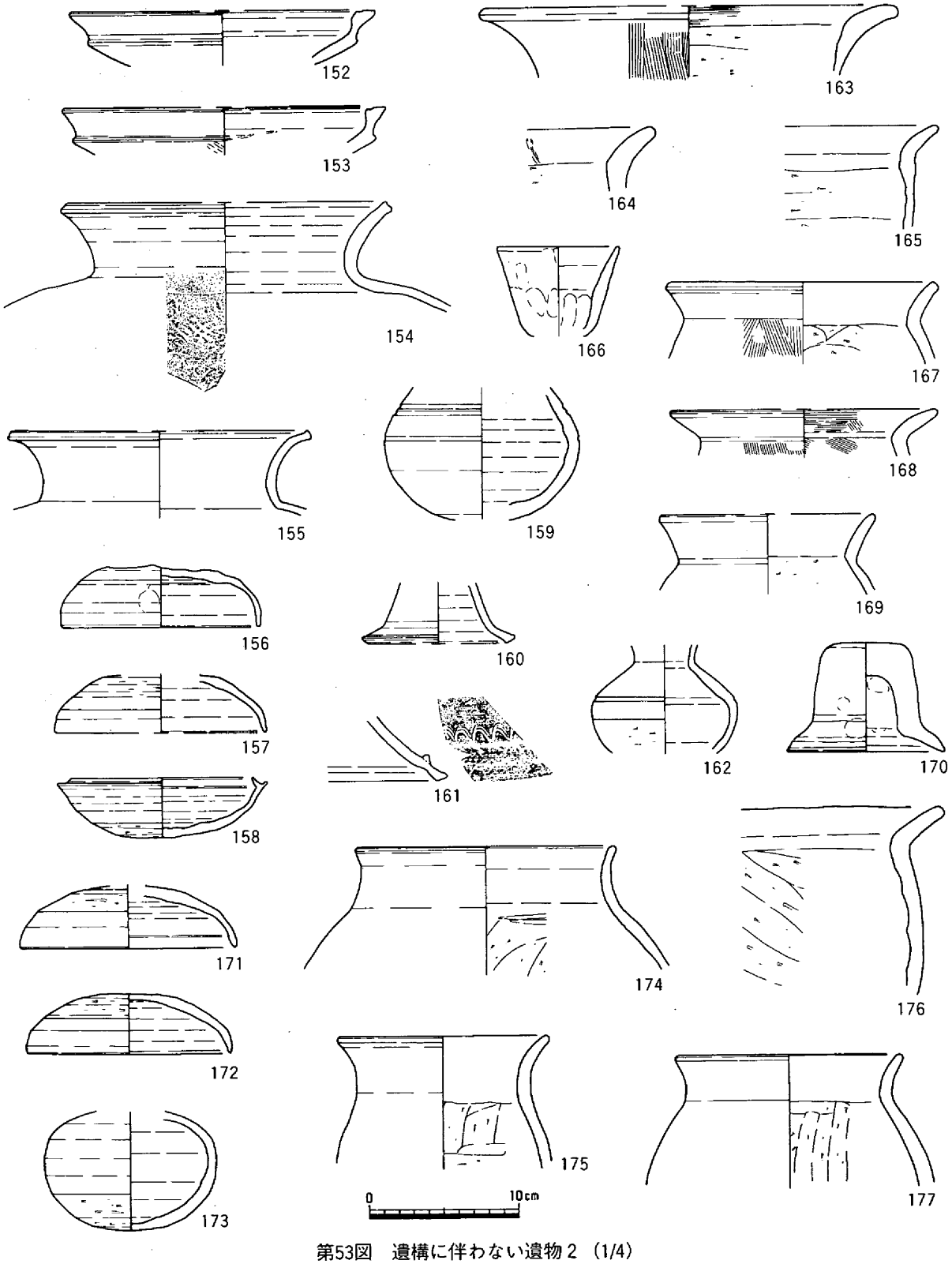




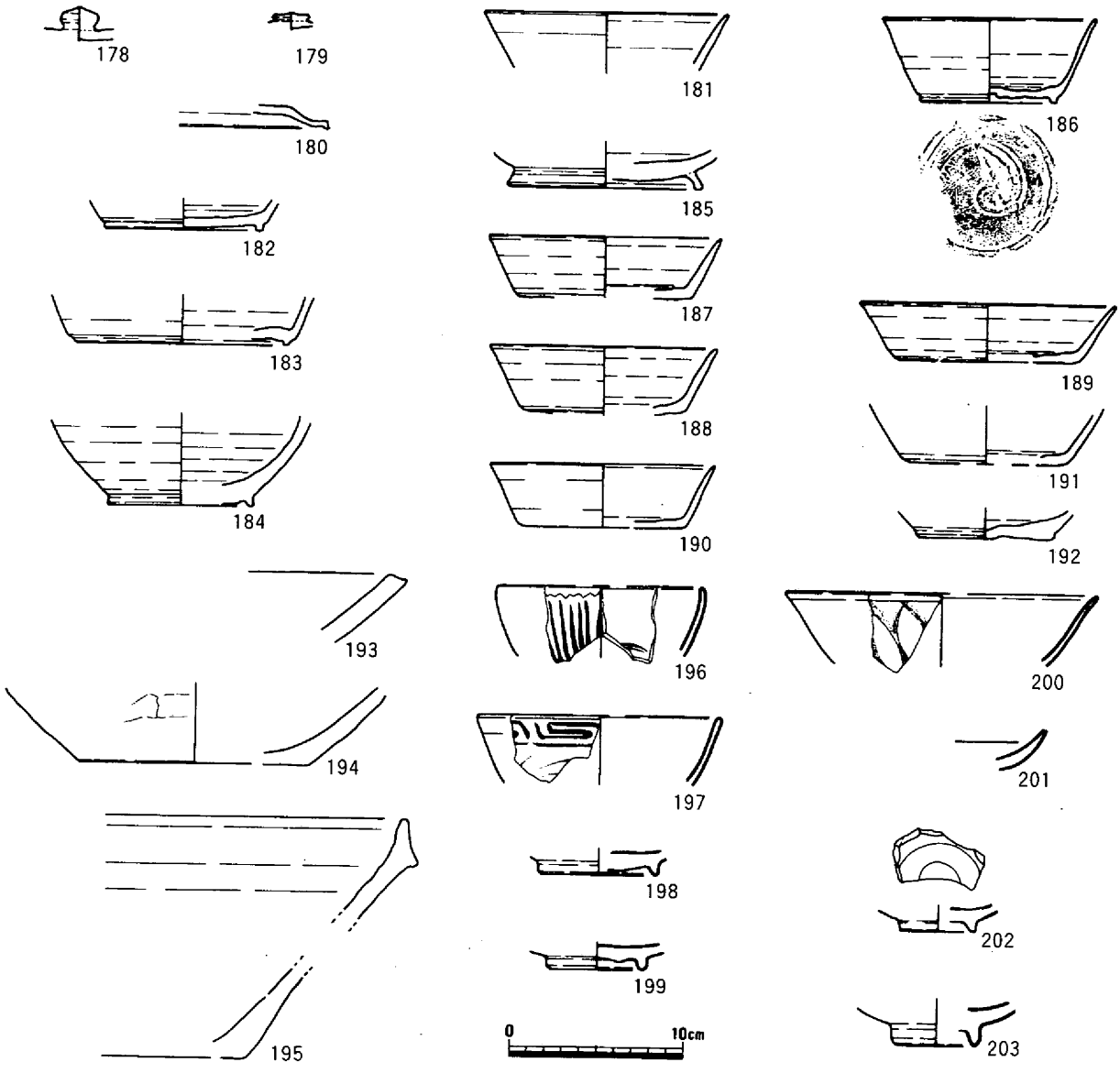
第52図　遺構に伴わない遺物１（1/2・1/3）

9　遺構に伴わない遺物（第52～54図）

第52図は、遺構に伴っていない遺物のうちミニチュア土器、鉄器および土製品である。146はＬ区の黒色土から出土した台付き壺の想定されるミニチュア土器であるが、欠損しており判然としない。



第53図　遺構に伴わない遺物２（1/4）



第54図　遺構に伴わない遺物３（1/4）

体部の１か所に穿孔があり瑙とも考えられる。なお、体部外面は調整時の砂粒の動きにより顔面を思わせるものである。148はＡ区、147・149はＣ区、150はＥ区151はＬ区のいずれも黒色土から出土しているミニチュア土器で、148～151は意図的に打ち壊されていたものとみられる。

M10はＡ区、M11はＣ区、M12はＥ区の黒色土から出土している釘である。M13・M14は直接接合できないが、Ｈ区の側溝掘り下げ中に出土した鉈で、竪穴住居12に伴う可能性がある。また、M15・M16はＨ区から、M17・M18はＩ区の黒色土から出土している釘である。

Ｃ10はＧ区、Ｃ11はＨ区の包含層から出土した土錘である。Ｃ12はＫ区の黒色土から出土した土製の勾玉、Ｃ13はＤ区の黒褐色土から出土した練玉である。また、Ｃ14・Ｃ15はＫ区およびＬ区の黒色土から出土している鏡形土製品である。

第53図は、包含層などから出土した弥生土器および古墳時代の須恵器・土師器である。また、第54図は、古代の須恵器・土師器および中世の陶磁器である。下湯原Ｂ遺跡の調査では、弥生時代の遺構は全く検出されなかったが、包含層などにおいて若干の土器が出土している。いずれも細片で、図示できたのは152・153の２点のみである。いずれも上方に立ち上がる口縁端部を肥厚し、端面に３条の

凹線を巡らせている高杯で、にぶい橙色を呈し焼成は良好である。

154はＣ区、155はＥ区の包含層から出土した須恵器の壺、156～161は、Ｂ・Ｃ区から出土した須恵器の杯、高杯などである。このうち156の杯蓋と158の杯身は、側溝掘り下げ中に出土したもので竪穴住居などの遺構に伴っていたと考えられる。162～167・170はＣ区およびＥ・Ｆ区の包含層から出土した土師器の甕などである。なお、162は黄灰色を呈する須恵器の169は赤褐色を呈する土師器の甕、壺もしくは甑とみられるが、Ｅ区の石棺墓１周辺の黒色土から出土している。

171～177はＫ・Ｌ区の黒色土から出土している須恵器の杯蓋・壺と土師器の甕である。このうち172・173は南北に流走する溝３の東側から出土したものである。

178～190は古代の須恵器である。このうち178・179はＢ・Ｃ区から出土した杯蓋の摘み片、180・181はＦ区で出土した杯蓋・杯身、182～185はＣ区で出土した杯身および底部片である。また、186～189はＬ区から、190はＨ区から出土した杯身である。

191・192は古代の土師器で、191はＥ区から、192はＣ区から出土している。

193はＨ区から出土した土師質の捏ね鉢または擂り鉢でにぶい黄橙色を呈する。194はＧ区から出土した土師質の擂り鉢でにぶい黄橙色を呈する。ともに中世の初め頃と考えられる。

195はＥ区の包含層から出土した備前焼の擂り鉢で、にぶい赤褐色を呈している。

196～199はいずれもＡ～Ｃ区の包含層から出土した青磁の碗である。196は線描蓮弁文をもつが、蓮弁と山形の剣頭との単位に乱れがある。197は外面口縁付近に雷文帯をもっている。198・199はケズリ出し高台の底部片である。198は釉が畳付を越えて高台内面の途中までかかっており、外底の釉を輪状に削り取っている。199は全面に施釉されている。

200はＧ区から出土した青磁の碗で、口縁が少し外反し、外面に蓮弁文をもつている。

201はＨ区から出土した碗の細片であるが、釉薬が明オリーブ灰色を呈し、高麗もしくは李朝の青磁とみられるものである。

202・203はＤ区から出土した白磁碗の底部片で、高台はケズリ出しである。202の内底面は釉薬が輪状に削り取られている。203の釉薬は黄褐色を呈している。

表１　下湯原Ｂ遺跡出土金属器一覧表

図	番号	地区	遺構	器種	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	時期	備考
14	1	Ｂ区	竪穴住居４	鏃	鉄	113.5	21.5	3.2	15.24	６世紀末頃	
16	2	Ｃ区	竪穴住居５	鏃	鉄	88.5	23.5	2.8	25.68	６世紀末頃	
17	3	Ｃ区	竪穴住居６	鏃	鉄	53.5	13.5	3.8	6.62	６世紀末頃	
20	4	Ｄ区	竪穴住居８	刀子	鉄	67.5	8.5	2.2	4.73	６世紀後半	木質部残存
21	5	Ｄ区	竪穴住居９	鏡	青銅	42.0	41.5	4.5	8.30	６世紀後半	
21	6	Ｄ区	竪穴住居９	刀子	鉄	58.0	10.5	3.8	5.22	６世紀後半	木質部残存
24	7	Ｈ区	竪穴住居12	鏃	鉄	143.0	10.5	3.0	8.69	６世紀後半	
29	8	Ｋ区	竪穴住居17	刀子	鉄	127.0	16.5	4.0	19.61	６世紀後半	
44	9	Ｂ区	Ｐ６		鉄	92.5	12.0	11.8	24.54		
52	10	Ａ区	包含層	釘	鉄	52.0	14.5	2.2	9.50		
52	11	Ｃ区	包含層	釘	鉄	70.0	7.0	4.5	16.10		
52	12	Ｅ区	包含層		鉄	67.0	11.5	7.0	23.59		
52	13	Ｈ区	包含層	鉋	鉄	60.0	10.0	3.6	11.94	６世紀後半	竪穴住居12
52	14	Ｈ区	包含層	鉋	鉄	22.5	3.5	1.5	1.30	６世紀後半	竪穴住居12
52	15	Ｈ区	包含層	釘	鉄	80.0	6.0	3.2	8.92	古墳時代後半	
52	16	Ｈ区	包含層		鉄	57.5	5.0	2.0	1.54		
52	17	Ｉ区	包含層	釘	鉄	77.0	4.0	3.0	3.68		
52	18	Ｉ区	包含層	釘	鉄	43.5	8.0	7.8	1.59		

表２　下湯原Ｂ遺跡出土土製品一覧表

図	番号	地区	遺　構	器　種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重　量(g)	孔　径(mm)	時　期	備　考
14	1	Ｂ区	竪穴住居４	練玉	17.5	18.0	15.0	3.6	2.5	６世紀末頃	一部欠損
21	2	Ｄ区	竪穴住居９	模倣鏡	56.5	46.5	15.0	26.4		６世紀後半	一部欠損
24	3	Ｈ区	竪穴住居12	練玉	19.5	22.5	21.5	9.1	2.5	６世紀後半	
24	4	Ｈ区	竪穴住居12	円形土製品	21.0	19.0	7.5	2.7		６世紀後半	
26	5	Ｉ区	竪穴住居14	模倣鏡	52.5	49.0	16.0	33.1		６世紀後半	1/4欠損
29	6	Ｋ区	竪穴住居17	紡錘車	48.5	42.0	10.5	19.1	4.5	６世紀後半	
29	7	Ｋ区	竪穴住居17	紡錘車	43.0	42.0	17.0	23.8	4.0	６世紀後半	
45	8	Ｆ区	Ｐ14	練玉	20.5	16.5	18.5	4.8	2.0	古墳時代後半	2方向から穿孔
46	9	Ｇ区	Ｐ17	土錘	46.5	14.5	13.0	7.9	5.0		
52	10	Ｇ区	包含層	土錘	47.5	14.5	13.5	9.6	4.5		
52	11	Ｈ区	包含層	土錘	33.5	16.5	16.0	8.3	3.5		
52	12	Ｋ区	包含層	勾玉	33.0	14.5	140	5.8	6.0	古墳時代後半	
52	13	Ｄ区	包含層	練玉	15.5	17.0	15.5	3.6	2.0	古墳時代後半	
52	14	Ｌ区	包含層	模倣鏡	46.5	46.5	23.0	22.7		古墳時代後半	
52	15	Ｋ区	包含層	模倣鏡	53.0	53.0	19.0	35.6		古墳時代後半	

表３　下湯原Ｂ遺跡出土石製品一覧表

図	番号	地区	遺　構	器　種	材　質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重　量(g)	時　期	備　考
21	1	Ｄ区	竪穴住居９	砥　石	白色流紋岩	59.5	56.5	19.0	58.8	６世紀後半	

表4　下湯原Ｂ遺跡出土ミニチュア土器一覧表

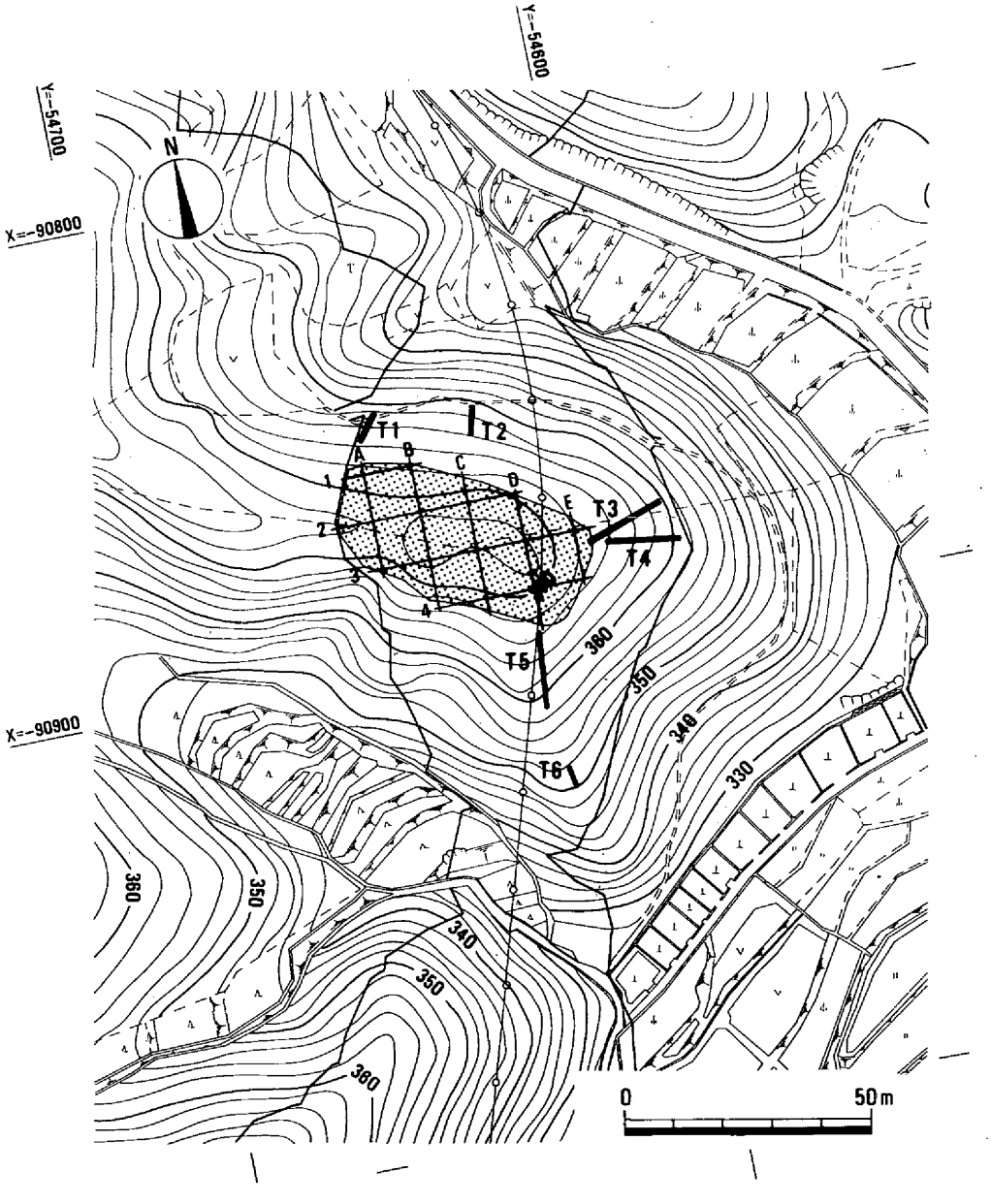
図	番号	地区	遺　構	器　種	口　径(mm)	底　径(mm)	器　高(mm)	重　量(g)	実測番号	備　考
18	38	Ｃ区	竈状遺構	小形壺	30.0		23.0		18	完形
22	56	Ｅ区	竪穴住居10	小形壺	33.0	20.0	25.5		20	完形
22	57	Ｅ区	竪穴住居10	小形壺	30.0	21.0	29.0		19	欠損品　3/5
22	58	Ｅ区	竪穴住居10	小形壺	42.0		35.0		21	完形
22	59	Ｅ区	竪穴住居10	小形壺	31.0	32.0	28.0		22	完形
44	120	Ｄ区	Ｐ10	小形壺		40.5			24	欠損品　1/2
51	146	Ｌ区	包含層	台付き壺？	55.0		38.0	51.4	13	
51	147	Ｃ区	包含層	小形壺	28.0	24.5	26.0		15	完形
51	148	Ａ区	包含層	小形壺	25.5		23.0		14	欠損品　2/3
51	149	Ｃ区	包含層	小形壺					16	欠損品　1/3
51	150	Ｅ区	包含層	小形壺	24.0		27.0		17	欠損品　2/3
51	151	Ｌ区	包含層	小形壺					23	欠損品　3/5

第４章　藪迨山城跡

第１節　遺跡の概要と発掘調査

１　遺跡の概要

藪迨山城跡は、中国山地に源を発する旭川上流域の右岸側で、『作陽誌』において佐山氏陣の「目地堡」に比定されている目地城跡から北東200ｍ程に位置し、北西から南東に向かって突き出た小尾



第55図　調査対象範囲図（1/1,500）

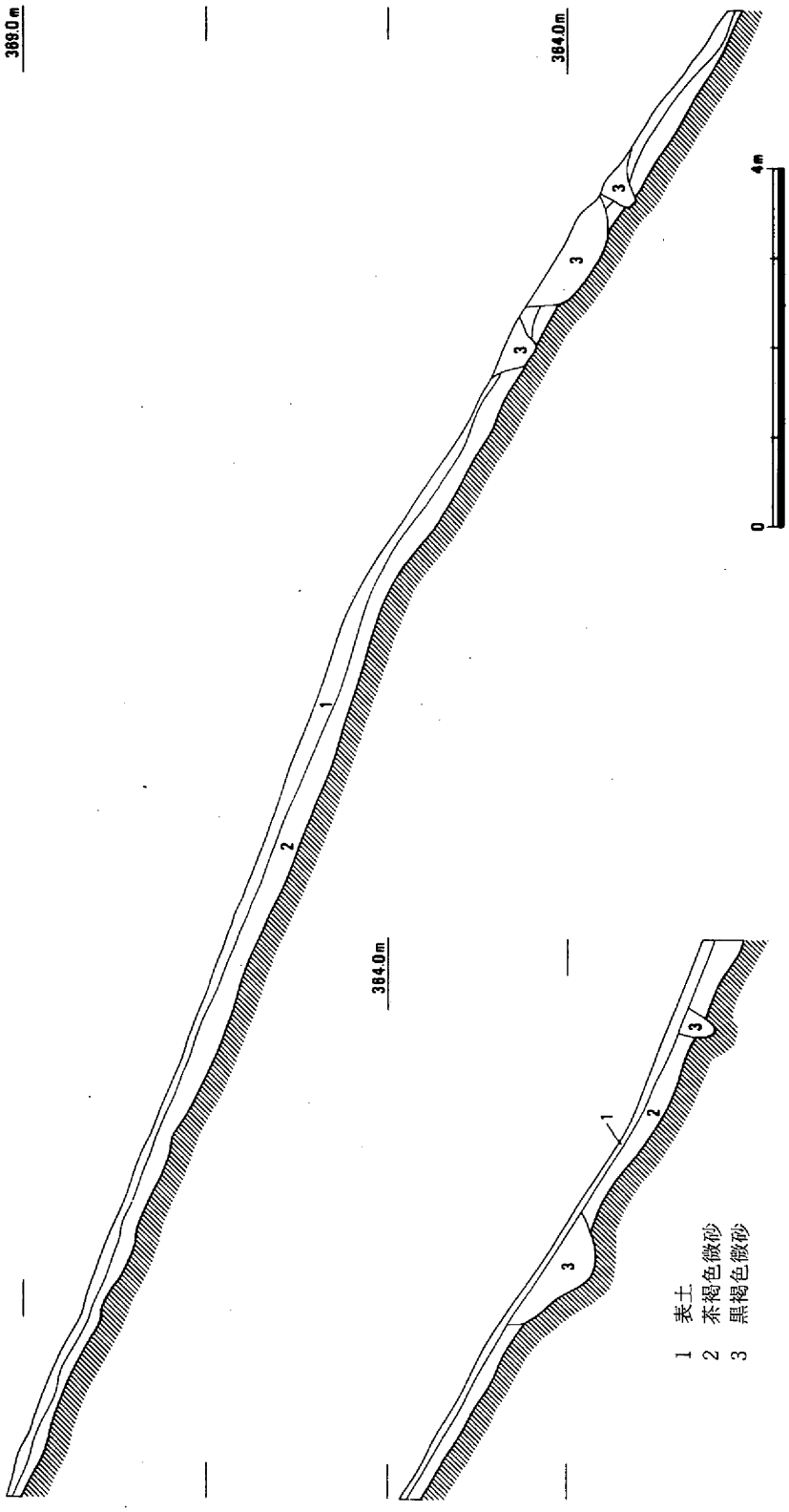
根の先端部に築かれた山城である。頂部は、海抜374m程で旭川河岸からの比高差は約55mある。この山城から南方を望めば、勝山の高田城下から北へさかのぼる伯耆街道の湯原市街地への入り口にあたり、美甘村から流れ下る鉄山川が旭川に合流する禾津方面が一望のもとに見渡せる。また、北方に目を転じると宇喜多直家の部将浮田盛重らがいて毛利氏側などの攻撃を退けた「湯山城」をはじめ、北方からの進入路が一望できる要衝に位置している。

尾根先端部の北・東・南側はいずれも急な斜面であるが、とりわけ南側は急峻である。また、西側を二重の堀切により仕切られ連絡を断たれている頂部は、東西20m・南北10m程の範囲が概ね平坦面となっている。なお、北側斜面では、等高線の間隔が若干広がるところが認められるが、犬走りなどには程遠いものである。

2　発掘調査

調査対象地が急峻な斜面の頂部であることから、まず、調査地に至る作業通路の確保に着手した。その後、転落と排土の流出を防止するための柵を対象地を取り囲むように設置して発掘調査に入ることとなった。

頂部を中心とした対象範囲は、一部岩の露呈しているところもみられるが、ほぼ全面を覆っている表土の除去を行い、尾根上全面に

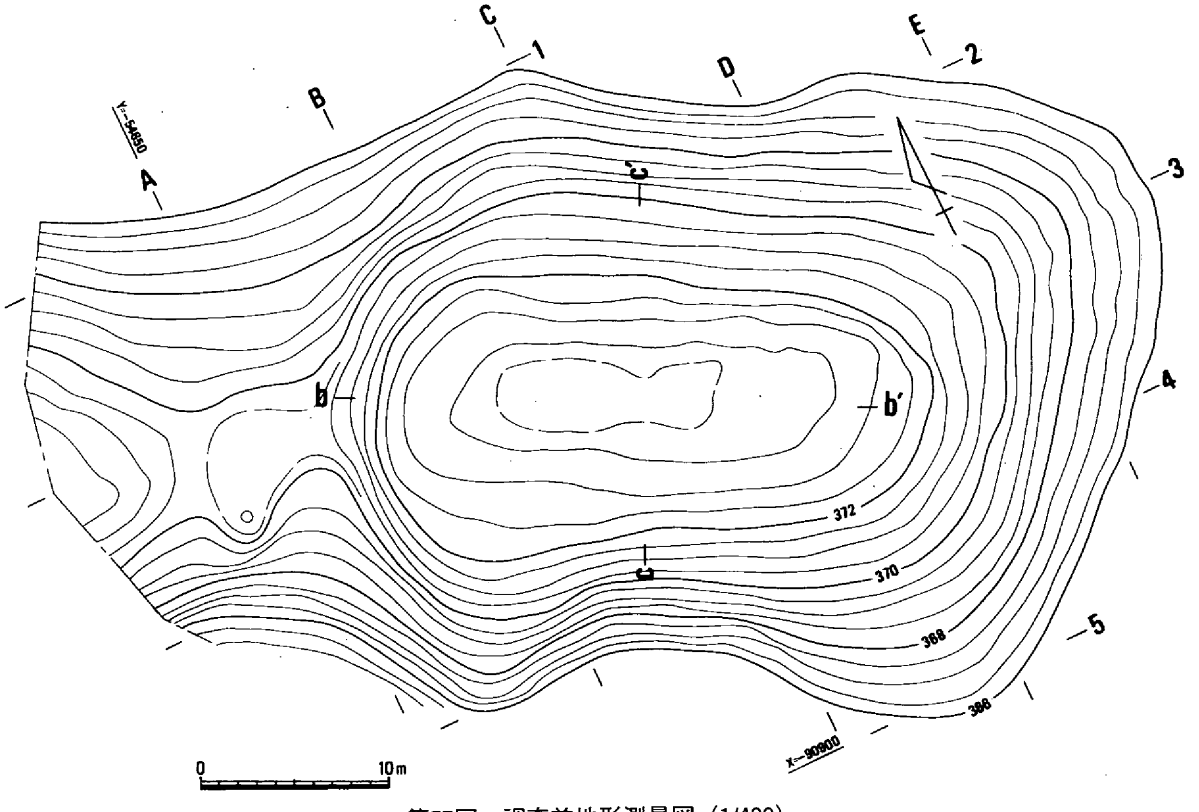


第56図　T2・3断面図（1/80）

植林されていた杉の株を掘り起こしながら発掘調査を行った。しかし、急斜面の作業では、安全帯を使用するなどして調査を進めたが、場所によっては足場の確保もままならない状況での作業となり困難を窮めた。また、この発掘調査と並行し、地形が少し張り出している部分を中心に６本のトレンチを設定し、遺構の確認調査を実施した。なお、堀切の検出では、当初の想定を越えて延びていることが明らかとなり、一旦排土していた土をさらに下方に移動して検出作業を行うこととなった。

調査の結果、山城に関する遺構としては尾根先端頂部の平坦面と、鞍部に設けられた２本の堀切が明らかになったほか、北および北東斜面で２か所小規模ながら緩斜面の平坦部分が検出された。このほか頂部および鞍部において、築城前の遺構である土壙３基が検出されている。

斜面部のトレンチは、Ｔ１が調査対象地西端の北斜面に用地境に沿って全長7.5ｍで、Ｔ２が北斜面中央部で等高線の間隔がやや広い部分に全長７ｍの規模で設定した。また、Ｔ３・４は調査対象地北東角から東斜面に、Ｔ３は18.5ｍ、Ｔ４は16ｍの規模で、Ｔ５は南東角から南斜面東端の等高線が少し突き出た部分に全長18.5ｍ、Ｔ６はＴ５の下方に5.5ｍ程の幅はいずれも１ｍの規模で設定した。



第57図　調査前地形測量図（1/400）

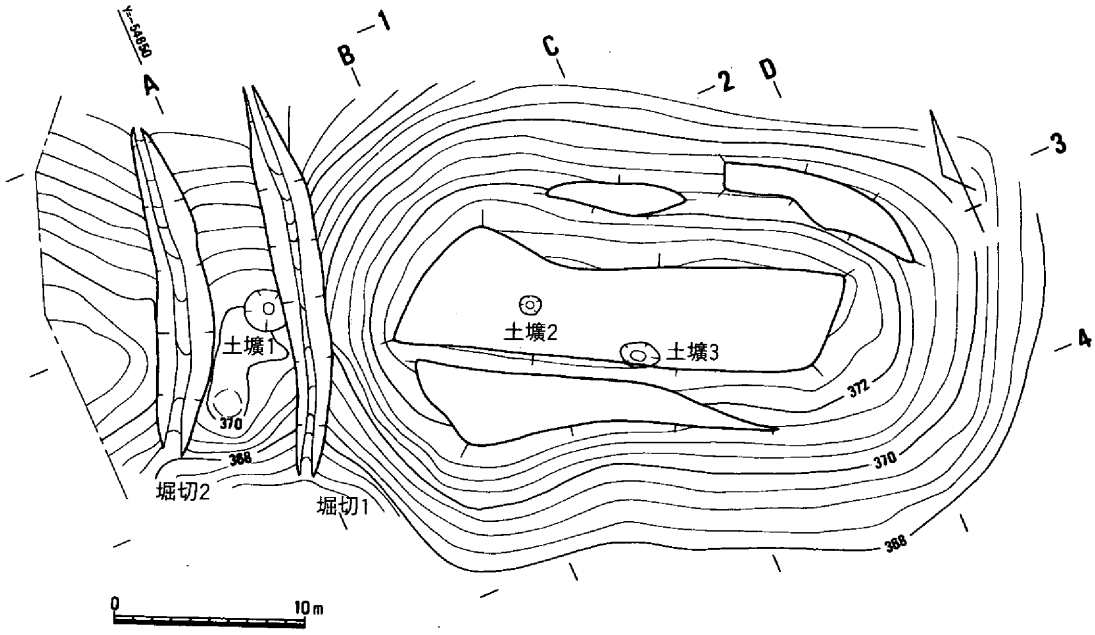
その結果、いずれのトレンチでも表土が５～10cm堆積し、その下にＴ１で30cm程、Ｔ２～Ｔ４でも15～20cm程茶褐色微砂が堆積しているものの、遺構・遺物とも全く認められなかった。また、Ｔ５・６では、表土の下がすぐ地山の土になっていて、斜面部の下方にまでは遺跡の広がらないことが明らかになった。なお、Ｔ３・４のトレンチでは、昭和20 年代に進められた湯原ダム建設資材の搬入のため設置されたケーブルの軌道跡が確認された。

発掘調査にあたり、国土座標のＸ軸に数字（－90900＝５）を、Ｙ軸にアルファベット（－54650＝Ｂ）をあて、調査対象地に10ｍ四方の方眼を組み、北西隅の杭を調査地区名とした。

第２節　遺構・遺物

１　郭（第58図・59図）

尾根先端の頂部全体である２Ｂ区の南東部から３Ｄ区の北西半にかけての東西22m・南北8.5～11m程の範囲が、ほぼ平坦な面となっており郭面が考えられる。少し高く突出した部分の削平や、窪んだ部分への盛り土など若干の成形は認められるが、大きく改変された跡は認められず、自然の地形に規制された不正形の平坦面で、南側の３分の１程は盛り土が流失した可能性が考えられるものの、約10cmの段差で緩斜面となっている。また、端部を削り出している跡や土を盛り上げた土塁も確認されず、自然のままの急斜面に移行している。平坦面上は、10cm前後腐葉土などの表土層で覆われ、その下は大半の部分で黄褐色砂質土および黄褐色砂礫層の地山になっているが、中央部の地山面が少し窪んだ部分から緩斜面にかけては、やや粘質の強い黄褐色砂質土の堆積が確認され、造成されたものと考えられる。なお、横断面の斜面に堆積している３層の黄褐色粘質微砂は流土とみられるが、４層の黄灰色粘質微砂は盛り土である。



第58図　遺構配置図（1/400）

この平坦面は、水平な部分があまり広く認められない。東西の縦方向では中央部を中心に比較的なだらかであるが、南北の横方向は盛り土が流失したものか頂部を中心に緩やかな斜面となっており、全体的には蒲鉾状を呈している。中央部にあたる２Ｃ区の南東部から３Ｄ区の北西部は最も高く海抜373.7mを測るが、端部に向かって緩やかに下がって行き、西端部の２Ｂ区で海抜372.9mを、東端部の３Ｄ区では海抜372.4mを測る。また、２Ｃ区南東部の北端は海抜373.2m、３Ｃ区中央の南端は海抜372.8m程である。

郭から一段下がった北側の斜面には、２Ｃ区の中央東部から２Ｄ区の中央西部にかけての７×２m程の範囲と、２Ｄ区の中央部から３Ｅ区にかけての11×３m程の範囲に、斜面ではあるが小規模な

「犬走り」状の平坦面が検出されている。前者は海抜372.1ｍから371.7ｍに、後者は海抜371.9ｍから370.7ｍに位置し、両者には少し段差が認められる。性格は不明である。なお、これらの平坦面上において、郭に伴う柱穴や土壙などの遺構は全く検出されていない。また、遺物は、郭の南部や斜面から硯の一部や砥石片、鉄釘などが若干出土しているのみで、時期が決められるものは出土していない。

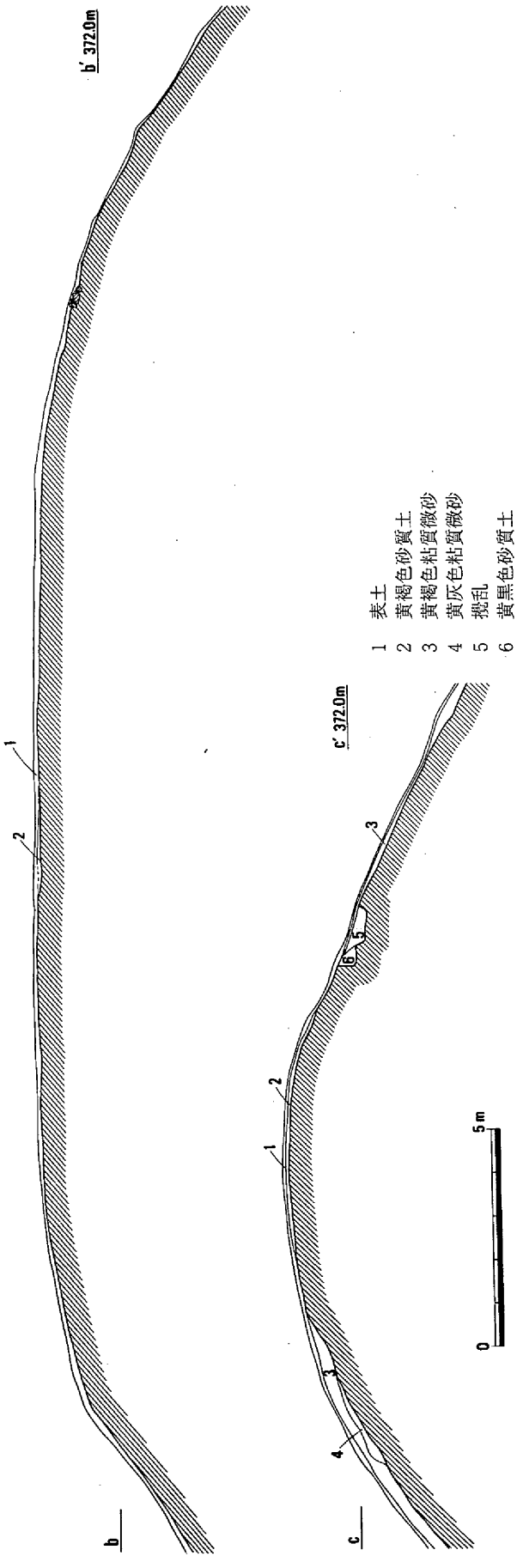
郭には建物や柵などの構造物や貯蔵穴などは設けられていない。また、規模も小さいことから、長期にわたり大勢が籠もることは不可能なもので、山城と称するより見張りを目的とする出城的要素が強い遺構と考えられる。

2　堀切

堀切１（第60図、図版18）

１Ｂ区の中央部北端から３Ａ区の北東部にかけて、平坦部のすぐ裾部を南北に深く切り開いている堀切である。規模は、全長22ｍにおよび、幅は2.5ｍ程で、最も深い尾根鞍部の頂上付近では深さ１ｍ以上を測る。頂上付近の断面は、非常に急峻な「Ｖ」字形を呈するいわゆる「薬研堀」であるが、両端部に向かい肩部から底までの比高差は漸減し、少しづつ緩やかな傾斜になっている。底面は幅30cm前後でほぼ平らな面にになっている。底面の高さは、中央部が海抜369.0ｍ程で最も高く、両端部に向かい次第に低くなっている。南端部で海抜366.6ｍ、北端部で海抜365.7ｍを測る。なお、堀切の底などに柱穴は認められなかった。

埋土は、上層の第２層に茶褐色微砂がレンズ状に堆積し、その下の第４・５層に黄褐色粘質微砂が、底面から法面に沿



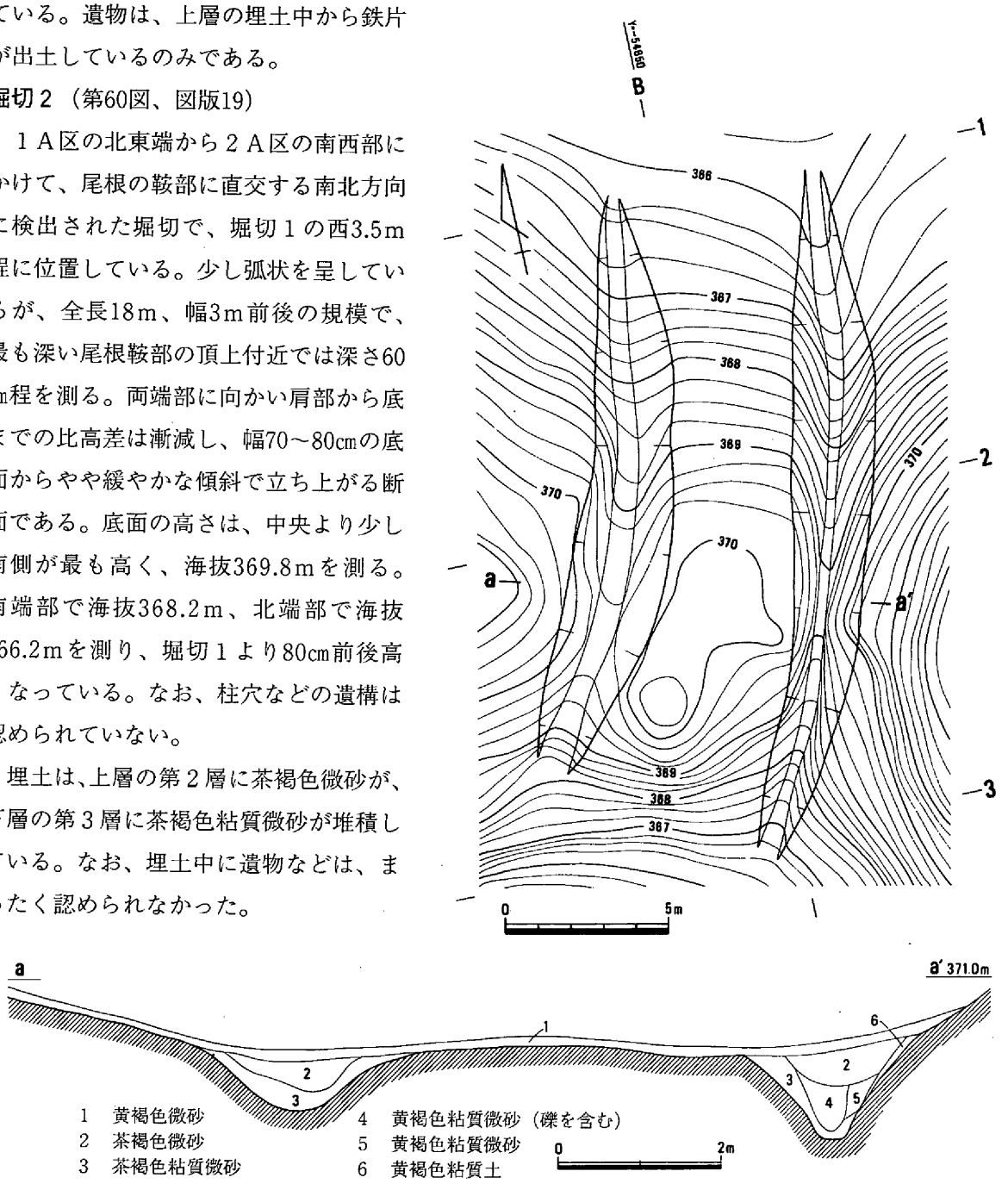
第59図　郭縦・横断面図（1/160）

っては第３層の茶褐色粘質微砂が堆積している。遺物は、上層の埋土中から鉄片が出土しているのみである。

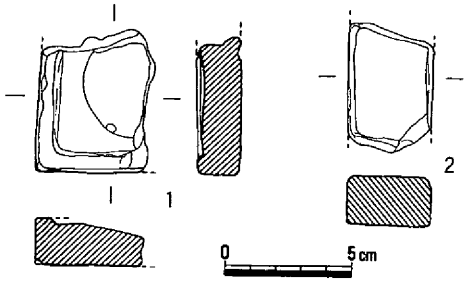
堀切２（第60図、図版19）

１Ａ区の北東端から２Ａ区の南西部にかけて、尾根の鞍部に直交する南北方向に検出された堀切で、堀切１の西3.5m程に位置している。少し弧状を呈しているが、全長18m、幅3m前後の規模で、最も深い尾根鞍部の頂上付近では深さ60cm程を測る。両端部に向かい肩部から底までの比高差は漸減し、幅70～80cmの底面からやや緩やかな傾斜で立ち上がる断面である。底面の高さは、中央より少し南側が最も高く、海抜369.8mを測る。南端部で海抜368.2m、北端部で海抜366.2mを測り、堀切１より80cm前後高くなっている。なお、柱穴などの遺構は認められていない。

埋土は、上層の第２層に茶褐色微砂が、下層の第３層に茶褐色粘質微砂が堆積している。なお、埋土中に遺物などは、まったく認められなかった。



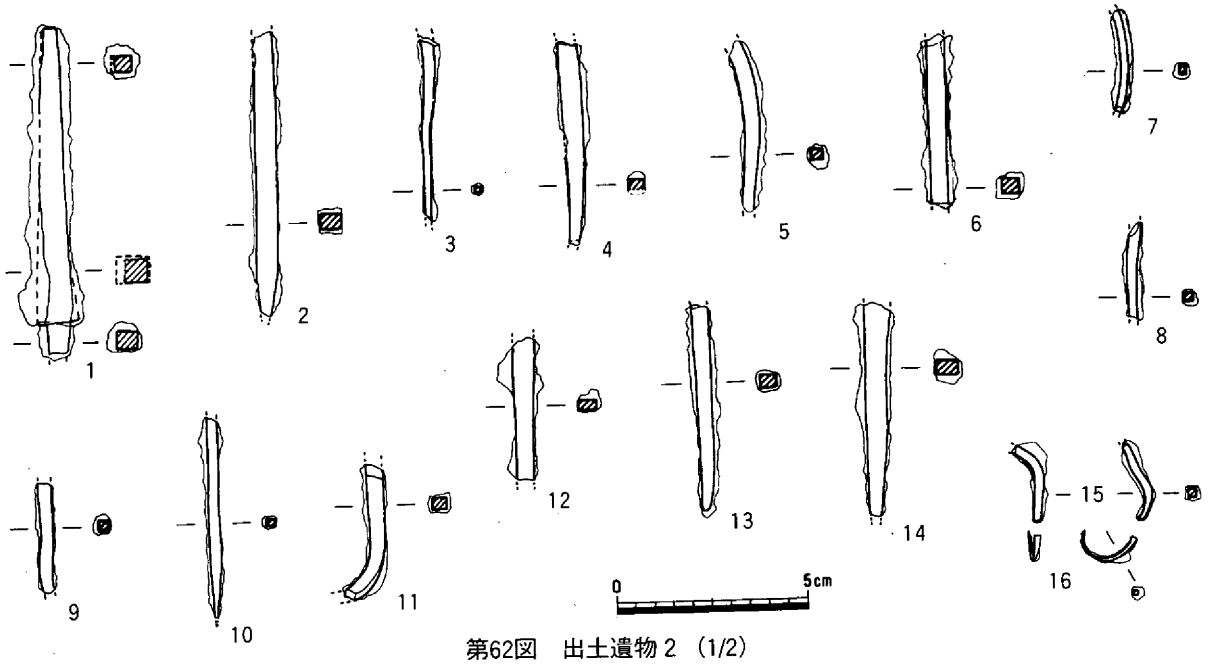
第60図　堀切１・２地形測量図（1/200）・断面図（1/80）



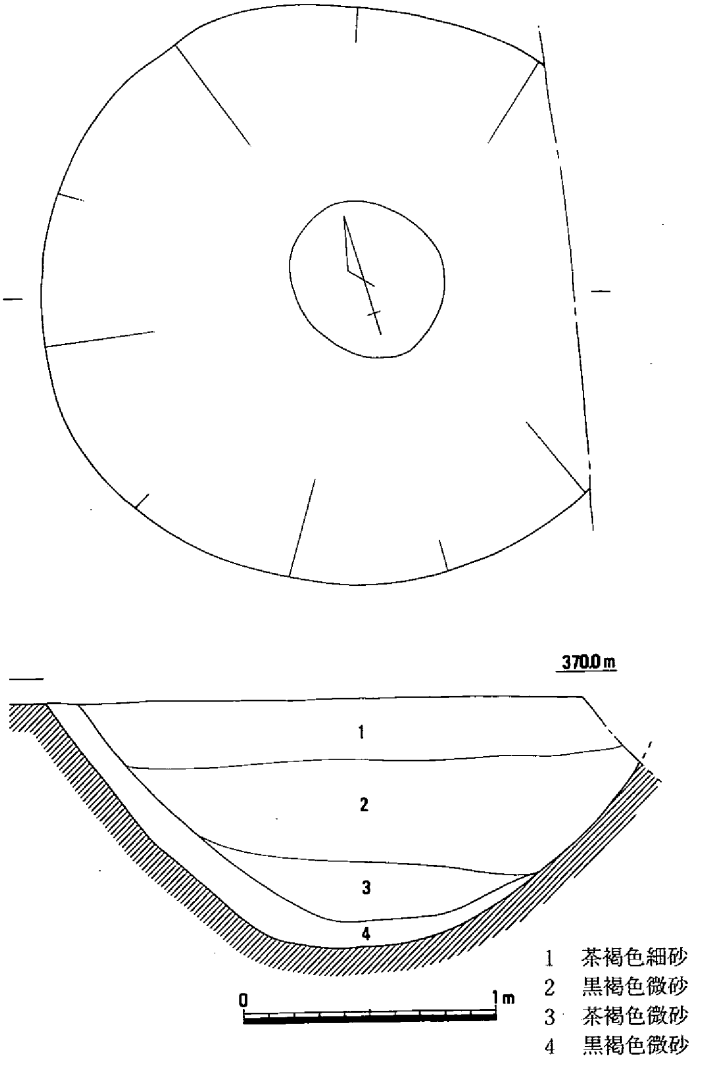
第61図　出土遺物１（1/3）

３　出土遺物（第61・62図、図版20－３）

郭南部の平坦面および斜面部と堀切２の埋土中から若干の遺物が出土している。１は３Ｃ区中央部東端の平坦面から出土した陶製の長方硯である。墨道部分５×４cm程の破片で、中央部がよく窪んでおり使い込まれたものと考えられる。２は３Ｃ区北西部の平坦面から出土した砂岩製の砥石である。両端部



第62図　出土遺物２（1/2）



第63図　土壙１（1/30）

は欠損しているが、残存長5.2cm・幅3.3cm・厚さ1.9cmを測り、上面に使用痕が認められる。Ｍ１～９は３Ｃ区北部の平坦面から、M10～13は３Ｅ区北部の斜面から、また、M14～16は堀切２の埋土中から出土した鉄片である。Ｍ１は両端部が欠損しているため全体の形状は不明であるが、関部が認められることから鏃の可能性が考えられる。Ｍ２～８は同じ場所から出土しているもので、とくにＭ２～４は３本がまとまった状態で検出された。これらＭ２～14はいずれも両端が欠損した破片で、全体の形状は不明なものであるが、釘片と考えられる。M15・16は同一個体で、釣り針状を呈しているものである。なお、いずれの遺物からも時期は確定できなかった。

４　その他の遺構

土壙１（第63図、図版20－２）

丘陵鞍部の中央付近において、東端の一部を堀切１に切られて検出された遺構である。直径230cm程の円形を呈するとみられる土壙で、非常に緩やかに底面に

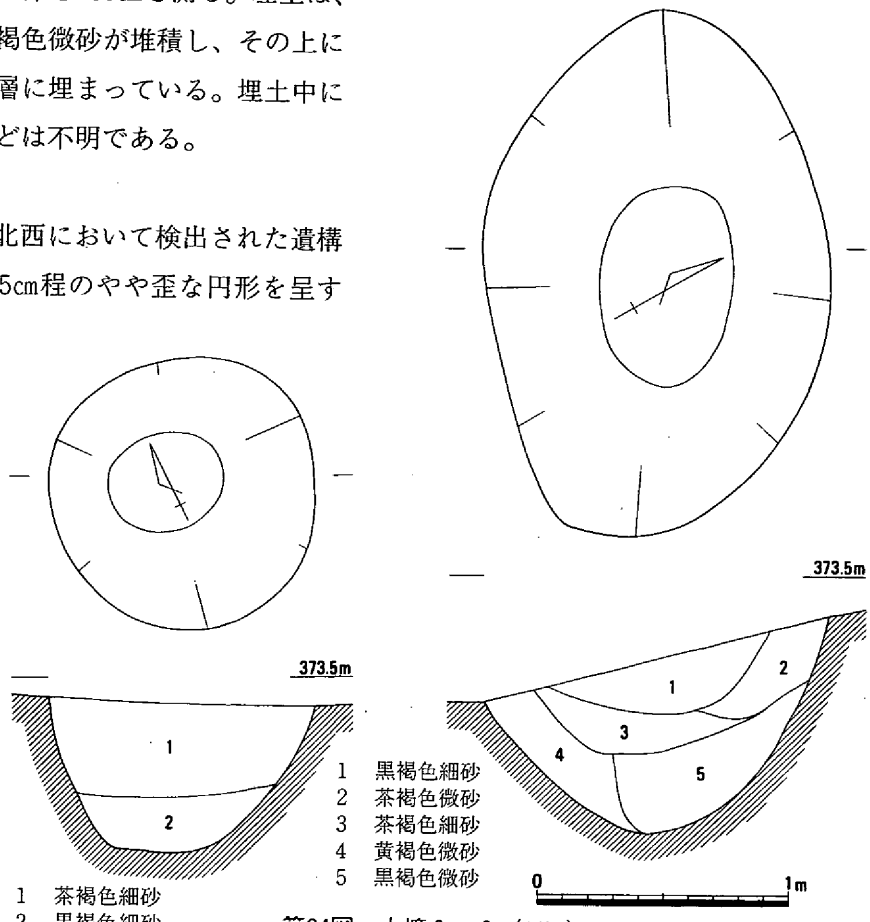
いたる断面で検出面からの深さ100cmを測る。埋土は、壁面に貼り付くように黒褐色微砂が堆積し、その上に茶褐色土と黒褐色土が互層に埋まっている。埋土中に遺物はなく時期や性格などは不明である。

土壙２（第64図）

平坦面の中央より少し北西において検出された遺構である。規模は、直径105cm程のやや歪な円形を呈する土壙で、深さ60cm程を測る。埋土は上層に茶褐色細砂が下層に黒褐色細砂が堆積しているが、遺物などはまったくなく性格や時期は不明である。

土壙３（第64図）

平坦面の中央部やや南寄りにおいて検出された遺構である。長径210cm・短径135cm程の規模でやや歪な楕円形を呈する土壙で、深さ80cm程を測る。埋土は上層に黒褐色細砂が、中層に茶褐色の微砂および細砂が、下層に黄褐色と黒褐色の微砂が堆積しているが、出土遺物はなく性格や時期は不明である。



第64図　土壙２・３（1/30）

表５　藪迨山城跡出土金属器一覧表

図	番号	地区	遺　構	器　種	材質	最大長（mm）	最大幅（mm）	最大厚（mm）	重　量（g）	時　期	備　考
62	1	郭	裾部	鏃	鉄	88.0	10.0	5.5	27.26		
62	2	郭	裾部	釘	鉄	75.5	5.5	4.0	20.0		
62	3	郭	裾部	釘	鉄	54.0	6.0	2.0			
62	4	郭	裾部	釘	鉄	49.5	4.0	3.0			
62	5	郭	裾部	釘	鉄	45.0	5.0	2.5	2.94		
62	6	郭	裾部	釘	鉄	44.5	4.5	4.0	8.24		
62	7	郭	裾部	釘	鉄	28.0	3.5	2.5	1.22		
62	8	郭	裾部	釘	鉄	26.0	3.0	2.5	1.05		
62	9	郭	裾部	釘	鉄	29.5	3.5	2.8	1.41		
62	10	郭	裾部	釘	鉄	53.5	3.0	1.8	1.71		
62	11	郭	裾部	釘	鉄		4.0	3.0	2.64		
64	12	郭	裾部	釘	鉄	38.0	5.5	2.8	4.54		
64	13	郭	裾部	釘	鉄	57.0	7.0	3.8	3.76		
64	14	郭	裾部	釘	鉄	56.5	6.5	4.0	6.18		
64	15	堀切	堀切１		鉄		3.0	2.5	1.27		
64	16	堀切	堀切１		鉄		2.0	1.5	0.43		

第5章　小　　結

下湯原Ｂ遺跡の竪穴住居について

下湯原Ｂ遺跡は、Ａ区の南端で基盤層が急激に下がり、遺跡の南端部が明らかになっている。この基盤層は北に向かって次第に高くなり、南端のＡ区と北端のＬ区とでは２ｍ程の比高差がある。この為、検出された竪穴住居の床面の高さも、南部の竪穴住居群と北部とでは1.5ｍ以上の差が認められる。一方、東西方向の高低差は幅が狭く明らかではないが、東側が西側より低くなる様子が窺え、特に北部ではその傾向が強くなっている。

下湯原Ｂ遺跡の発掘調査では、竪穴住居が18軒検出されている。このうち、10軒は調査区南部のＡ～Ｅ区から、８軒は調査区北部のＨ～Ｌ区から検出されているが、Ｆ・Ｇ区には確認できなかった。Ｆ区からＧ区にかけては、近・現代の攪乱が著しく遺構の残存状態が良好ではないが、中・近世の溝・柱穴などは検出されていることから、古墳時代の遺構はここで一旦途切れるものと考えられ、古墳時代の竪穴住居群は南部と北部の二つに分かれる可能性がある。

下湯原Ｂ遺跡の発掘調査で検出された竪穴住居には、いくつかの特徴がみられた。調査区の関係から完掘できたものが限られている為、推測の域をでないものも含まれるが、共通して認められた点などを列挙してみると次のようになる。

① 規模は、一辺が４～５ｍ前後のものが大半である。一辺が3.5～４ｍ程のやや小さなものが数軒確認されているが、特別に大きさの異なるものは認められない。

② 平面形は、隅丸の方形もしくは長方形を呈するが、正形なものはなく竪穴住居17のように台形状になるなどいずれも歪なものとなっている。

③ 壁体溝は、竪穴住居５・８・17などにおいて一部壁に沿った溝が確認されているが、四囲を明確に巡るものは確認されていない。

④ 主柱穴は、やや規模の小さい竪穴住居１・３・６では確認されていないが、他はいずれも４本柱と考えられる。

⑤ 床面では、竪穴住居３を除き、中央部を中心に堅く叩き締められた面が確認されている。

⑥ カマドは、可能性を完全には排除出来ない竪穴住居６を除き、いずれの住居からも検出されない。また、他の住居に後出するとみられる竪穴住居10を除き、明確な中央穴が認められる住居はなく、中央部に焼土面が確認できる程度の「火処」が認められるのみである。なお、竪穴住居17のみは、中央部に窪みが認められ、焼土とともに炉壁状の塊が出土していることからカマド状の「火処」が想定されるものである。

⑦ 竪穴住居７・11では住居をつくるにあたり、土中にある極めて大きな礫を取り除かないで、そのまま床面および壁面に取り込んでいる。

⑧ 多くの住居から鉄鏃または刀子が出土している。鉄器の出土している竪穴住居は７軒であるが、ごく一部のみを検出された住居が多く、出土していないのは他の住居に後出するとみられる竪穴住居10を除き、竪穴住居15のみである。

⑨ 竪穴住居９から小形仿製鏡と伴に鏡形土製品が、竪穴住居14から鏡形土製品が出土している。ま

た、竪穴住居10からはミニチュア土器が多く出土している。これらは、祭祀的要素が強い遺物と考えられるが、遺構に特徴的なものは認められなかった。

これらの特徴を基に考えられる下湯原B遺跡の竪穴住居は、以下のとおりである。

南部の竪穴住居群では、10軒のうち6軒がB区からC区にかけて集中して検出され、この住居群の中に掘立柱建物1棟も確認されている。これらの住居のうち竪穴住居3・4・5の床面は海抜329.9mで、いずれも掘立柱建物の軸線と同様に約20°西に振って建てられていることから同時存在の考えられるものである。一方、竪穴住居6・8は床面が海抜330.1m前後と20cm程高く、住居の方向も竪穴住居6は30°西に振り、竪穴住居8はほぼ南ー北方向で建てられている。これらの住居の時期は、出土遺物からはいずれも6世紀末から7世紀初頭頃と考えられ、断定できないものの、前者の先行が推定される。なお、竪穴住居1は前者と同方向に、竪穴住居9は竪穴住居8と同方向に建てられていることから、それぞれ同時性を考慮できる。なお、竪穴住居10の時期は出土遺物から7世紀前半頃で、これらの住居よりさらに後出する住居と考えられる。

北部の竪穴住居群は、検出状況などから集落の中心が調査対象地の西側にあると想定され、K区の4軒を除き比較的疎らに確認されている。検出された8軒の住居のうち、I区北端の竪穴住居14とK区の竪穴住居15・17は、いずれも床面の高さが海抜331.2m前後で、住居の方向も20°前後東に振って建てられており、同時存在の可能性が考えられる。一方、I区南端の竪穴住居13とH区の竪穴住居12は、ほぼ南ー北方向に建てられている。また、床面の高さも竪穴住居13が海抜331.0m、竪穴住居12が海抜330.8mと異なっている。しかし、これらの違いが時期差によるものか、微地形に合わせることにより生じたものかの判断はできない。これらの住居の時期は、出土遺物からはいずれも6世紀後半から7世紀初頭頃と考えられる。なお、K区の竪穴住居16・18は、隣接する竪穴住居15・17と建てられた方向が異なるだけでなく、床面の高さも20cm前後高くなっている。出土遺物がなく時期が明らかでないが、後出する住居の可能性が強いものである。

このような状況から、下湯原B遺跡の発掘調査で検出された竪穴住居は、6世紀後半から7世紀初頭頃、新しいもので7世紀前半頃までのごく限られた時間内に存在していたものであるが、これらが二つ以上のグループに分かれ、少なくとも三段階の時間に分かれ、営まれた集落と考えられる。

下湯原B遺跡では、その後も奈良時代・中世・近世と各時代の遺物が出土し、溝・土壙・柱穴などの遺構が検出されていることから、引き続き集落が営まれていたと考えられるが、住居・建物などが明らかでなく、如何なる集落であったかは不明である。

付載　下湯原Ｂ遺跡出土須恵器の胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所
白　石　　純

1　分析目的

この胎土分析では、同遺跡の古墳時代から奈良時代にかけての須恵器を分析し、胎土の比較を行った。特に、奈良時代の溝からは、「大井□」の文字が線刻されている須恵器の壺が出土している。この壺は、肉眼的観察で他の須恵器と胎土、色調が異なっていることから、この壺がどの地域で生産され持ち込まれたか、理化学的な胎土分析を実施することにより、生産地を推定することを目的とする。

2　分析方法および結果

分析は、蛍光Ｘ線分析法により胎土中の成分（元素）を定量することで胎土の差異を調べた。測定装置は蛍光Ｘ線分析計ＳＥＡ2010（セイコーインスツルメンツ社製）を使用し、測定試料は、200メッシュ程度に粉砕した粉末試料をコイン状に加圧成形したものを用いた。

測定した成分は、Si，Ti，Al，Fe，Mn，Mg，Ca，Na，K，P，Rb，Sr，Zrの13元素である。このうち、以下で述べるが、分析で有効な元素は、K，Ca，Rb，Sr，の４元素であった。そこで、これらの元素を用いてＸＹ散布図を作成し、胎土の差異について検討した。

また、分析した須恵器は第１表に記載した11点の須恵器（杯・壺・甕）および粘土塊である。この結果、第１図K-Ca散布図、第２図Rb-Sr散布図では、同遺跡出土の須恵器が複数の胎土に識別できた。それは２（杯）・３（甕）・７（壺）と１（杯）・５と４（甕）・６（壺・・・「大井□」線刻土器）の３つのグループである。

また、今回生産地試料（窯跡出土須恵器）との比較を行った。比較した窯跡試料は、大阪陶邑窯跡群（高蔵寺地区・陶器山地区・栂地地区・光明池地区）、島根県松江市大井古窯跡群（山津支群・勝田谷支群・ババタケ支群）、岡山県津山市一宮窯跡、落合町ズリ窯跡の各窯跡である。各窯跡の分析に供した須恵器の時期は、陶邑および大井古窯跡群が８世紀代、一宮窯跡が７世紀初頭、ズリ窯跡が８世紀後半～９世紀前半である。

第１図、第２図より各窯跡群と比較すると、陶邑と一宮および大井Ｂ群の各窯跡が半分ほど重複するものの他は識別された。そして、この窯跡群に下湯原Ｂ遺跡出土の須恵器をプロットすると、６の「大井□」線刻土器は、陶邑・一宮・大井の各窯跡が重複する領域に分布した。その他のものは、ズリ窯跡の分布域にほぼ入る結果となった。

3　考察

この胎土分析で明確になったことおよび今後の課題について述べる。

まず、壺６の「大井□」線刻土器は、陶邑と一宮窯跡および大井窯跡Ｂ群が重複する領域に分布したが、分布の傾向としては、陶邑の須恵器が分布する中心域より外れており、一宮や大井古窯跡Ｂ群の領域に分布する傾向を示した。この胎土分析では、どの窯で生産されたものか特定できなかったが、

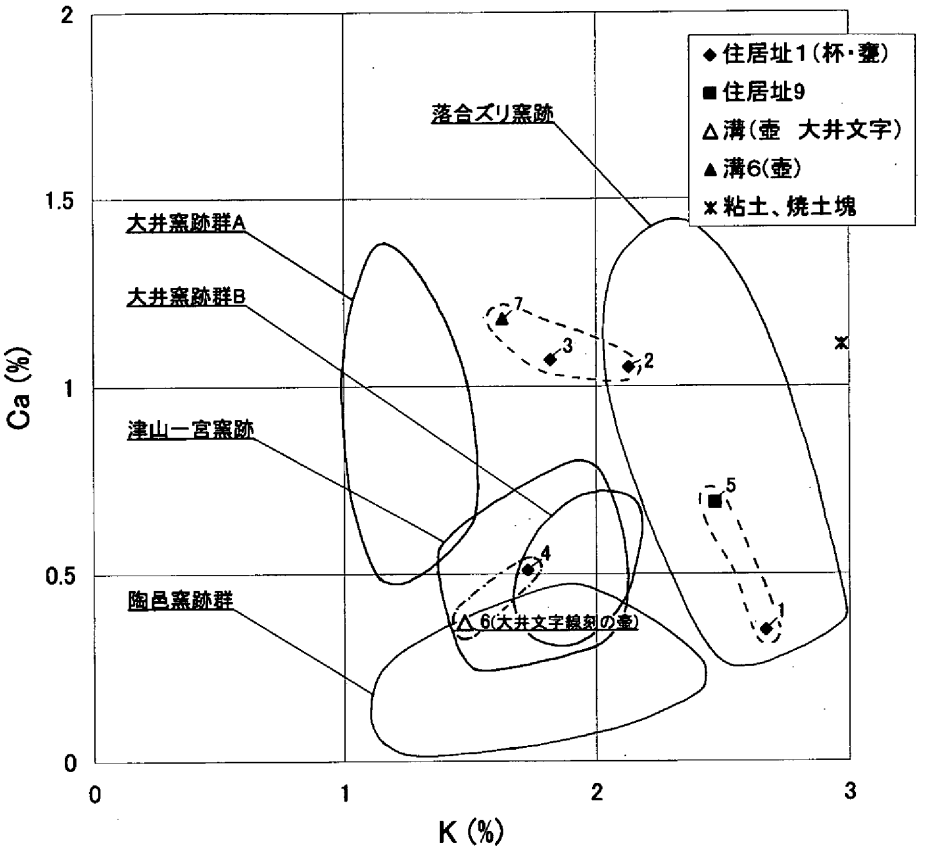
岡山県北あるいは、山陰地域の生産地に胎土が類似していることが推定される。また、下湯原B遺跡出土の須恵器は、遺構、時期により胎土分析値に違いがみられた。このことは、当然のことであるが複数の生産地より供給されていることを示している。

この分析の機会を与えて頂いた内藤善史氏をはじめ岡山県古代吉備文化財センターの職員の方々および、生産地資料その他では以下の方、機関にお世話になった。末筆ではありますが記して感謝致します。

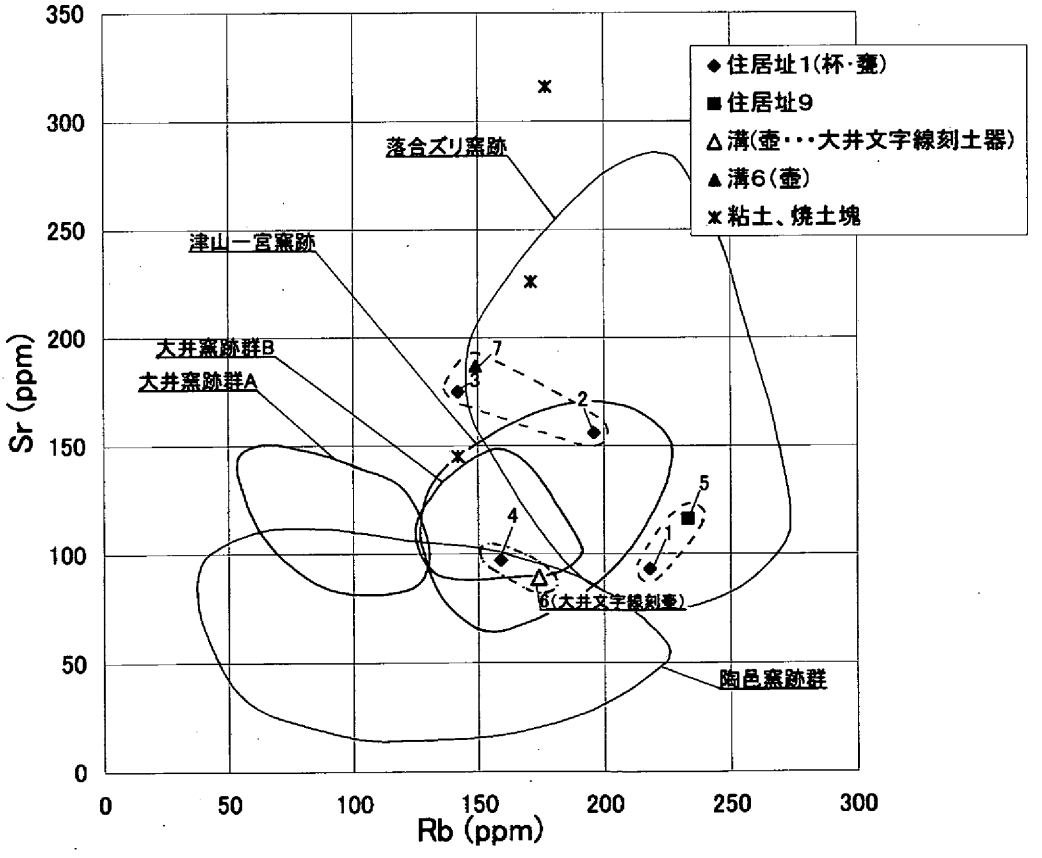
柳浦俊一、津山市教育委員会、落合町教育委員会

第1表　下湯原B遺跡出土須恵器の胎土分析表（%）ただし、Rb・Sr・Zrはppm

番号	遺跡名	遺構名	器種	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	Rb	Sr	Zr
1	下湯原B遺	竪穴住居4	杯	64.91	1.10	20.86	4.79	0.06	1.93	0.35	2.98	2.67	0.14	218	93	322
2	下湯原B遺跡	竪穴住居4	杯	65.68	0.96	20.51	4.57	0.05	1.97	1.05	2.76	2.13	0.12	196	156	312
3	下湯原B遺跡	竪穴住居4	甕	65.40	0.94	19.47	5.68	0.06	1.83	1.07	3.44	1.82	0.09	142	175	249
4	下湯原B遺跡	竪穴住居4	甕	67.67	1.02	20.14	3.92	0.02	1.84	0.51	2.87	1.73	0.14	159	97	262
5	下湯原B遺跡	竪穴住居8		64.35	0.76	22.21	5.36	0.06	1.83	0.69	1.96	2.47	0.09	133	116	238
6	下湯原B遺跡	溝3	壺	65.29	1.08	22.68	4.22	0.03	2.00	0.37	2.55	1.48	0.14	174	89	268
7	下湯原B遺跡	溝3	壺	67.07	1.03	21.46	3.52	0.04	1.84	0.43	2.55	1.77	0.13	184	90	267
8	下湯原B遺跡	溝3	壺	69.67	0.88	15.81	5.82	0.06	1.73	1.18	2.89	1.63	0.16	149	187	249
9	下湯原B遺跡	竪穴住居8	粘土	64.86	0.73	17.91	5.96	0.13	1.79	3.02	2.64	2.42	0.27	177	316	306
10	下湯原B遺跡	竪穴住居17	焼土塊	69.81	0.63	16.97	3.47	0.07	1.78	1.11	2.90	2.97	0.13	142	145	252
11	下湯原B遺跡	溝3	粘土	66.93	0.70	17.51	5.84	0.14	1.65	2.17	1.99	2.53	0.38	171	226	297



第１図　下湯原Ｂ遺跡と各窯跡群出土須恵器の比較　K-Ca散布図



第２図　下湯原Ｂ遺跡と各窯跡群出土須恵器の比較　Rb-Sr散布図

報 告 書 抄 録

ふりがな	しもゆばらＢいせき　やぶさこやまじょうあと
書　名	下湯原Ｂ遺跡・藪淫山城跡
副書名	一般国道313号改良事業に伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	166
編著者名	内藤善史　中野雅美　白石　純
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター
所在地	〒701-0136　岡山県岡山市西花尻1325-3　TEL　086-293-3211
発行機関	岡山県教育委員会
所在地	〒700-8570　岡山県岡山市内山下2-4-6　TEL　086-224-2111
発行年月日	2002年２月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北　緯	東　経	調査期間	調査面積	調査原因
しもゆばらＢいせき 下湯原Ｂ遺跡	おかやまけんまにわぐん 岡山県真庭郡 ゆばらちょうしもゆばら 湯原町下湯原	33583		35度 11分 07秒	133度 43分 58秒	19990406 ～ 20000623	3,890㎡	一般国道313号改良事業に伴う発掘調査
やぶさこやまじょうあと 藪淫山城跡	ゆばらちょうとよさかめじ 湯原町豊栄目地			35度 10分 46秒	133度 44分 00秒		1,200㎡	

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下湯原Ｂ遺跡	集落	古墳時代 奈良時代	竪穴住居　18 溝　6 石棺墓　2 土壙　3	青銅鏡 土製模倣鏡 鉄鏃・須恵器 土師器	古墳時代後期の集落遺跡から金属器など特異な遺物が出土
藪淫山城跡	山城	中　世	堀切　2 郭	硯　砥石 鉄釘	郭と二重の堀切を検出

図版１

1　下湯原Ｂ遺跡
　　遠景（南から）

2　下湯原Ｂ遺跡
　　Ａ～Ｃ区（北から）

3　下湯原Ｂ遺跡
　　Ｄ～Ｅ区（南から）

図版 2

1　下湯原Ｂ遺跡
Ｈ～Ｉ区（南から）

2　下湯原Ｂ遺跡
Ｋ区（北から）

3　下湯原Ｂ遺跡
Ｌ区（北から）

1　下湯原Ｂ遺跡
竪穴住居１覆土堆積
断面　　（南東から）

2　下湯原Ｂ遺跡
竪穴住居３
（南西から）

3　下湯原Ｂ遺跡
竪穴住居４（東から）

4　下湯原Ｂ遺跡
竪穴住居５（西から）

図版 4

1　下湯原Ｂ遺跡
竪穴住居６（南西から）

2　下湯原Ｂ遺跡
竪穴住居８遺物出土状況　　（東から）

3　下湯原Ｂ遺跡
竪穴住居９鏡形土製品出土状況（東から）

4　下湯原Ｂ遺跡
竪穴住居12鉄鏃出土状況　　（東から）

1　下湯原Ｂ遺跡
竪穴住居10(西から)

2　下湯原Ｂ遺跡
竪穴住居14(東から)

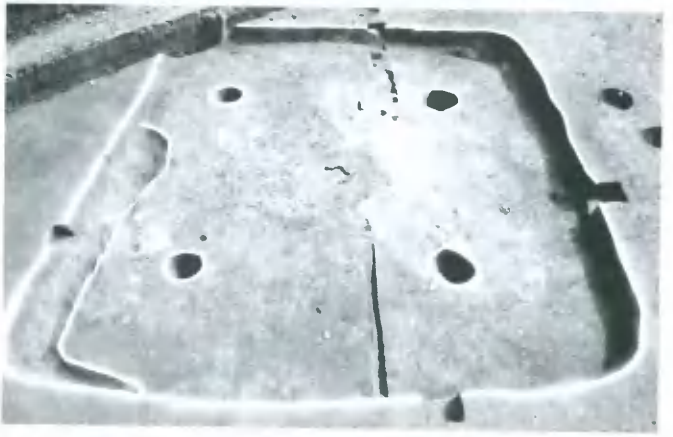
3　下湯原Ｂ遺跡
竪穴住居15(西から)

図版 6

1　下湯原Ｂ遺跡
竪穴住居17遺物出土
状況　　（北東から）

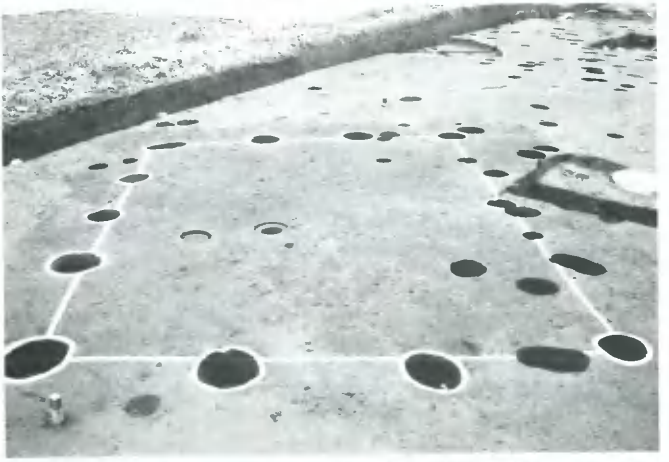
2　下湯原Ｂ遺跡
竪穴住居17刀子出土
状況　　（西から）

3　下湯原Ｂ遺跡
竪穴住居17紡錘車出
土状況　（北東から）



4　下湯原Ｂ遺跡
竪穴住居17(北東から)

1　下湯原Ｂ遺跡
竪穴住居18(東から)



2　下湯原Ｂ遺跡
建物１（北西から）

3　下湯原Ｂ遺跡
石棺墓２および１と
竪穴住居10(北から)

図版 8

1　下湯原Ｂ遺跡
　　石棺墓１（西から）

2　下湯原Ｂ遺跡
　　石棺墓２（南から）
3　下湯原Ｂ遺跡
　　石棺墓２蓋石除去後
　　の状況　（南東から）
4　下湯原Ｂ遺跡
　　石棺墓２側石除去後
　　の状況　（南東から）

1　下湯原Ｂ遺跡
土壙１（東から）

2　下湯原Ｂ遺跡
土器溜まり１遺物検出作業　（北から）

3　下湯原Ｂ遺跡
溝１断面（東から）

図版10

1　下湯原Ｂ遺跡
溝２断面（東から）

2　下湯原Ｂ遺跡
溝３掘り下げ作業
（北から）

3　下湯原Ｂ遺跡
溝３断面（南から）

4　下湯原Ｂ遺跡
溝６断面（南東から）

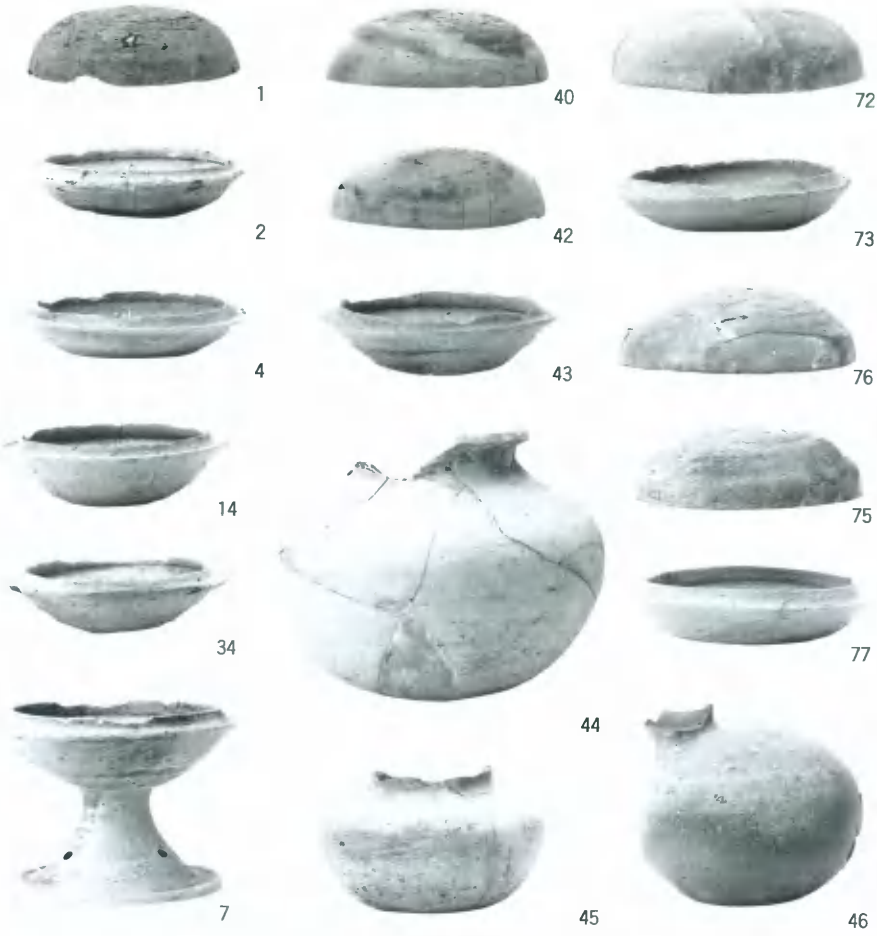
1　下湯原Ｂ遺跡
溝４断面（南東から）

2　下湯原Ｂ遺跡
溝５断面（北西から）

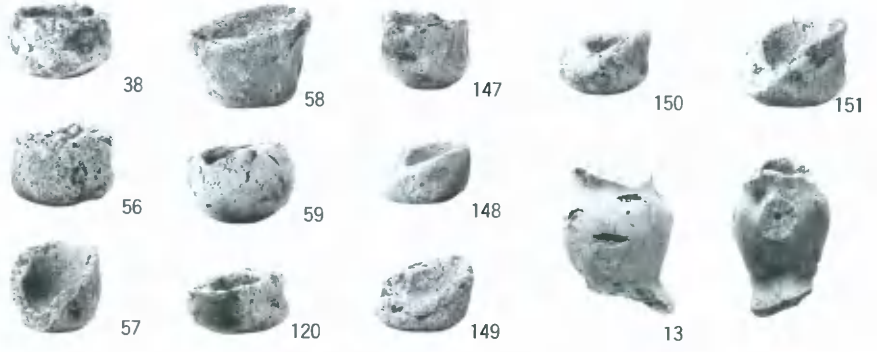
3　下湯原Ｂ遺跡
Ｄ・Ｅ区埋雪状況
（北から）

4　下湯原Ｂ遺跡
Ｄ区除雪作業
（南東から）

図版12

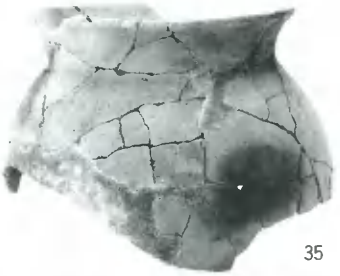


1　下湯原Ｂ遺跡 竪穴住居内出土の須恵器



2　下湯原Ｂ遺跡出土のミニチュア土器

22


35

79

80

82

81

83

84

47

31

9

下湯原Ｂ遺跡 竪穴住居内出土の土師器

図版14

100

101

102

1　下湯原Ｂ遺跡　土壙１
出土須恵器

103

104

105

106

2　下湯原Ｂ遺跡　土壙３
出土須恵器

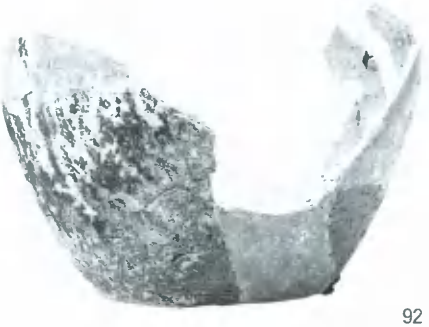
170

189

3　下湯原Ｂ遺跡　遺構に
伴わない土器

87

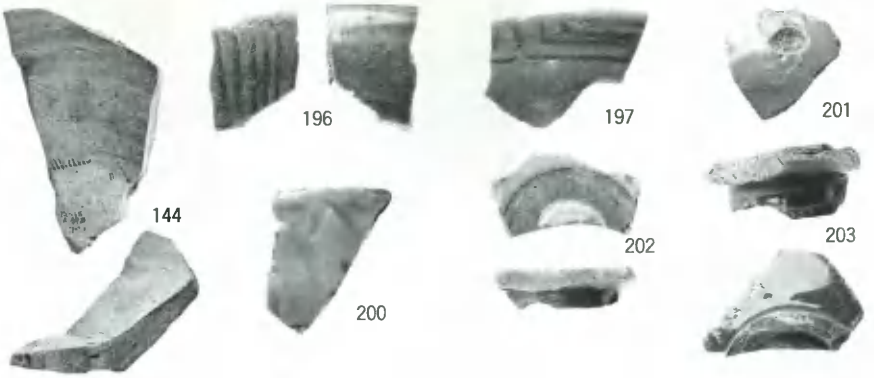
98


92

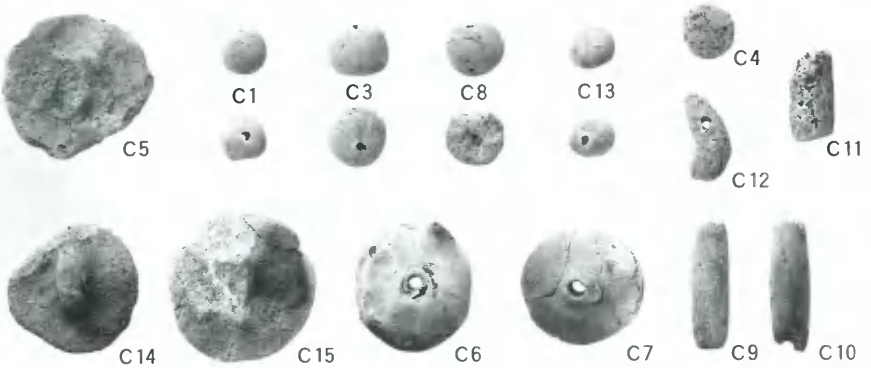
93

94

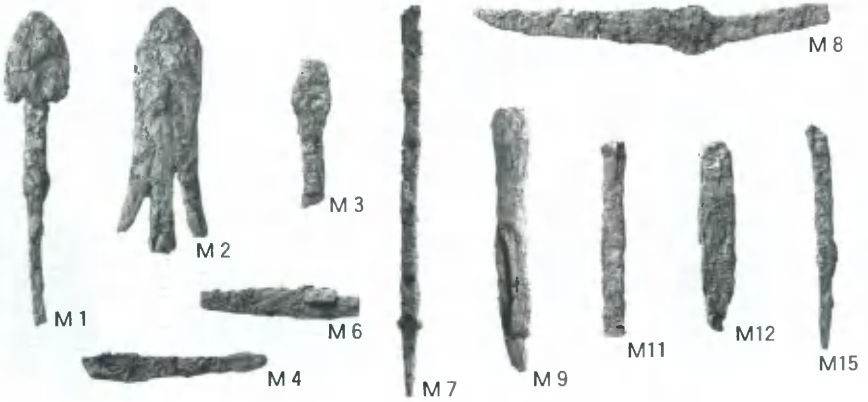
4　下湯原Ｂ遺跡　溝３出土土器



1　下湯原Ｂ遺跡出土の中世土器



2　下湯原Ｂ遺跡出土の土製品

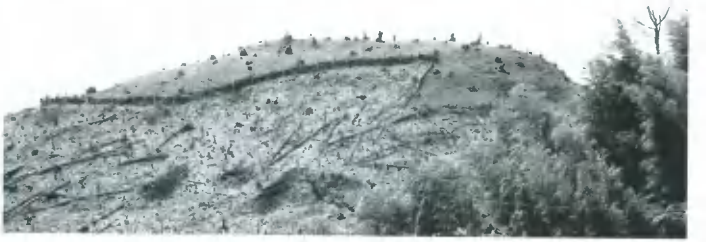


3　下湯原Ｂ遺跡出土の鉄器

図版16

1　藪逧山城跡
調査前全景
（南から）

2　藪逧山城跡
調査前全景
（北から）

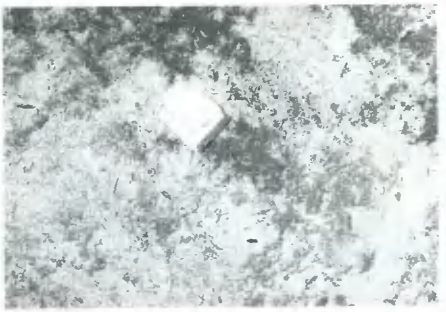


3　藪逧山城跡
表土除去後
（北から）

4　藪逧山城跡
表土除去後
（西から）

1　藪逧山城跡
郭横断面南西側
（北から）

2　藪逧山城跡
郭縦断面南東側
（南から）



3 藪逧山城跡 郭裾部 硯出土状況（南から）

4 藪逧山城跡 郭裾部 砥石出土状況（南から）

5 藪逧山城跡 郭裾部 鉄器出土状況（北から）

6 藪逧山城跡 堀切１鉄器出土状況（東から）

図版18

1　藪逧山城跡 堀切１南西断面
（南西から）

2　藪逧山城跡 堀切１南半
（南西から）

3　藪逧山城跡 堀切１北東断面
（北東から）

4　藪逧山城跡 堀切１北半
（北東から）

1　藪逧山城跡
堀切２中央断面
（南西から）

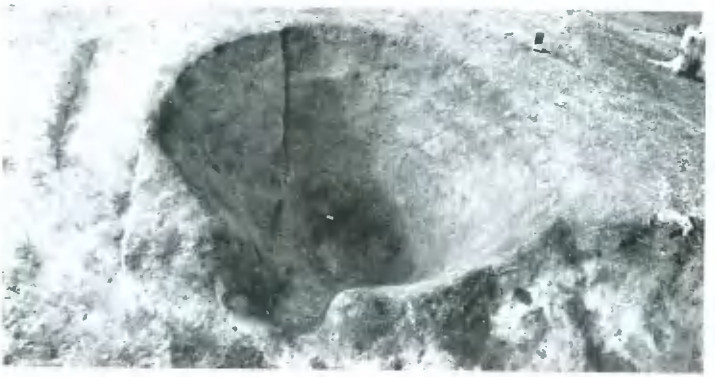
2　藪逧山城跡
堀切２南半
（南西から）

3　藪逧山城跡
堀切２北半
（北東から）

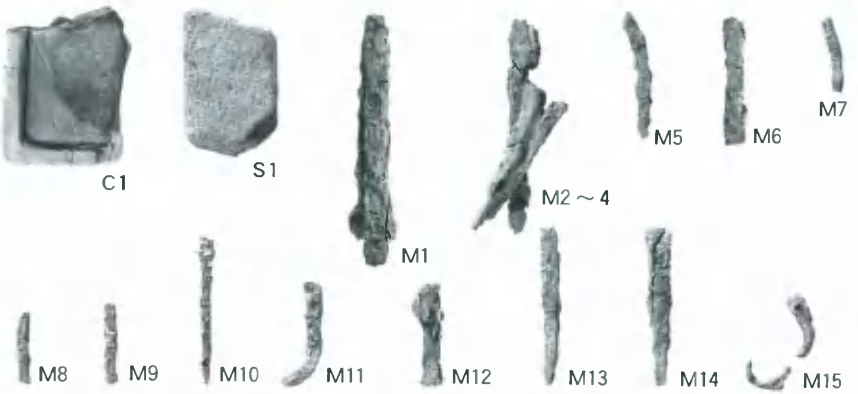
4　藪逧山城跡
堀切１・２北半
（東から）

図版20

1　藪逧山城跡
完掘後全景
（南上空から）



2　藪逧山城跡
土壙１
（南東から）



3　藪逧山城跡　出土遺物

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告166

下湯原B遺跡
藪滝山城跡

一般国道313号改良
事業に伴う発掘調査

平成14年２月28日印刷
平成14年２月28日発行

編　集　岡山県古代吉備文化財センター
岡山市西花尻1325－３
発　行　岡山県教育委員会
岡山市内山下２－４－６
印　刷　旭総合印刷株式会社